

法隆寺献納宝物特別調査概報 44

染織 2 錦

令和6年度



東京国立博物館

法隆寺献納宝物特別調査概報 44

染織 2 錦

はじめに

法隆寺献納宝物（以下、献納宝物）は、明治11年（1878）に奈良・法隆寺から皇室に献納され、戦後、国に移管の後、現在は東京国立博物館（以下、当館）が所蔵する326件（令和7年〈2025〉3月現在。ただし、未整理品については修理後に順次編入を行っており、今後とも件数は増加する予定）からなる。当館では昭和54年（1979）度より毎年、献納宝物の特別調査を実施しており、その成果は『法隆寺献納宝物特別調査概報』として逐次刊行している。

本年度は献納宝物を中心に、当館が所蔵する法隆寺伝来の「錦」を取り上げる（本調査では「錦」を多色の色糸を用いた織物・紋織物の総称とする）。ただし、当館における法隆寺伝来の染織品はNで始まる列品番号（所蔵番号）をもつ作品（法隆寺献納宝物として登録された作品、以下、N列品）と、Iで始まる列品番号をもつ作品（日本染織として登録された作品、以下、I列品）に分かれている。I列品には幕末から明治初期に法隆寺を離れ、古裂帖に仕立てられた上代裂があり、そのなかに錦類が存在する。このため、今回の概報は、当館が所蔵するN列品とI列品両者からなる法隆寺伝来の錦類について、その全貌を公開するよう心掛けた。また、当館がこれまで行ってきた調査・修理の成果を基礎に、今回新たに全種類の顕微鏡画像を撮影し、錦類の基礎情報を公開することを目的とした。

献納宝物のなかでも染織分野は、未整理品を含め特に作品数が多く、その全容解明までの道のりは遠い。今回の概報は染織作品のなかでも錦に絞ったものであるが、染織分野全体の報告を前に、本書の刊行を通じて作品研究や活用に供せられれば幸甚である。

令和7年3月28日

東京国立博物館

目次

はじめに	3
凡例	5
調査日程	6
調査員の構成	6
法隆寺献納宝物の錦類	7
図版・調査報告	17
類錦	18
経錦・緯錦	35
経拵	104
綴織	120
中世の錦	124
東京国立博物館所蔵法隆寺伝来錦類一覧	133
既刊報告等一覧	137
法隆寺献納宝物特別調査概報および研究図録等一覧	138

凡例

1. 本書は法隆寺献納宝物を調査対象として、東京国立博物館が昭和54年（1979）度より継続して実施している法隆寺献納宝物特別調査の第44次調査の概報である。
2. 今回、調査対象とした品目は、法隆寺献納宝物である列品番号（東京国立博物館所蔵番号）N-24、25、26、27、32、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、53、56、305、306、313、315、317、318、319、323とI-336、およびI-331に含まれる法隆寺伝来品、計28件に含まれる錦（多色の紋織物）87種類である。
3. 作品図版は織物の経糸方向を、本書の上下方向にあわせて掲載しているが、組織の経糸方向が上下方向とならないものについては、「←→」により経糸方向を示した。
4. 作品は、目次に挙げる技法毎に掲載する。そのうち、経錦・緯錦、および経緋に関しては、共通する文様要素をもつ作品を可能な限り並べることで文様の比較に供することとした。さらに技法毎に分類した一覧を巻末に付した。
5. 各錦の解説は、作品名、列品番号（N番号、I-336、I-331の順）を記載のうえ、概説を付した。なお、指定（◎：重要文化財）については列品番号の前に示す。さらに、組織詳細として以下の項目を記す。
 - 員数：各錦が特定の列品番号のみの場合は、断片数で記す。ただし該当作品が他の技法の部分を含む場合は現行の員数で記す。複数の列品番号を含む場合は「一括」とし、（ ）内に数えうる各断片数を記載する。
 - 分量：注記のない限り、現存寸法で経糸方向×緯糸方向で表記する。複数の断片である場合、数えうる断片の計測値のうち、それぞれの最小値～最大値で示す。
 - 素材、組織・技法：推定される素材に加え、技法を付す。
 - 経糸：糸の一種または一組について①②③……で示す。
 - ・撚り——本書では、糸の撚りの回転方向が右方向のものをS撚、左方向の糸をZ撚と表記する。また、撚りが強くかかっていない糸を甘撚と表記する。
 - ・色彩——目視により、現状からみた一般的な色名を記述する。使用される染料が推定される場合のみ付記する。
 - ・太さ——顕微鏡画像に写る糸を、KEYENCE社VHX-AX1Fにより測定した。全体的に太さに差がない場合は、他の糸と接する部分を避け、織物表面に出する平均的な太さの糸からの推定値、太さに幅がある場合には細幅～太幅で推定値を示した。見た目の太さは糸の張りや保存状態で変化するため、本書における比較用の概算値とする。
 - ・見た目の質感等の所見（保存状態、想定される糸の処理）等——生糸表面の膠質セリシンを除去する処理を精練といい、精練を行なった糸を練糸と呼ぶ。本書では顕微鏡画像および目視により記す。
 - 緯糸：同上
 - 密度：1cm間の経糸と緯糸の本数。緯糸の本数は「越」で表記し、経糸あるいは緯糸が数本で一組となるものは、「組」の単位で表記した。計測箇所や保存状態による誤差が生じるため、本書における比較用の概算値とする。
 - 文丈：経糸方向の見た目の文様単位を指す。対称文様の場合は、文様の対称軸までの長さが製織上の単位となる場合があるため、対称軸○cmとして付記する。
 - 文様幅：緯糸方向の見た目の文様単位を指す。緯錦については、想定される製織上の文様単位を「窠間幅」として付記する。対称文様の場合は、文様の対称軸までの長さが製織上の単位となる場合があるため、対称軸○cmとして付記する。
 - 組織備考：織耳、織幅等、製織にかかる補足事項
 - 年代：錦としての推定製作年代である。そのため、仏具としての推定製作年代とやや異なる場合がある。
 - 既刊報告：当館刊行の錦に関連する報告について略号を記す。
 - ・研究図録『法隆寺献納宝物 染織 ——幡・褥——』東京国立博物館、1986年
例：作品解説1番 →「図録1（1986年）」
 - ・平成26年度～平成29年度科学研究助成事業・基盤研究（C）「古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究」報告書、『東京国立博物館所蔵 法隆寺伝来——飛鳥・奈良時代の染織品——』研究代表者：沢田むつ代、2018年
例：88頁掲載の裂 →「科研報告88頁（2018年）」
 - ・『MUSEUM』所載関連報告 →「MUSEUM○号（著者○年）」書誌情報後掲。
6. 本書の「法隆寺の錦類」1～2章は三田覚之、3章および各作品の解説は廣谷妃夏が執筆した。
7. 本書の編集は廣谷が中心となり、後掲の調査員と東京国立博物館学芸企画部出版企画室が担当した。
8. 各作品の図版は、部分拡大の近接写真は三田が撮影し、顕微鏡画像はKEYENCE社VHX-AX1Fを使用し、廣谷と沼沢ゆかりが撮影した。
9. 各解説の文様略図等の挿図は、綴織は三田、その他の錦は廣谷が作成した。

調査日程

令和6年5月15日 N列品およびI-336の顕微鏡撮影および作品調査
令和6年5月16日 同上
令和6年5月21日 同上
令和6年6月6日 同上
令和6年6月18日 I-331の顕微鏡撮影および作品調査
令和6年6月19日 同上
令和6年6月26日 N列品およびI-336の顕微鏡撮影および作品調査
令和6年6月27日 同上
令和6年7月4日 同上
令和6年7月1日
～9月26日 これまでの調査成果をとりまとめる
令和7年3月28日 『法隆寺献納宝物特別調査概報44 染織2 錦』を刊行

調査員の構成

(所属・職名は令和6年5月のもの)

小山弓弦葉 (東京国立博物館学芸研究部調査研究課課長)
三田覚之 (奈良国立博物館工芸考古室主任研究員)
沼沢ゆかり (本部文化財活用センター企画担当 / 東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室研究員)
廣谷妃夏 (東京国立博物館学芸研究部列品管理課登録室アソシエイトフェロー)
長谷川聖子 (東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室事務補佐員)
沢田むつ代 (東京国立博物館学芸研究部客員研究員)

法隆寺献納宝物の錦類

1. 古記録に見る法隆寺の錦類 三田覚之
2. 法隆寺における錦類の主な用途 三田覚之
3. 献納宝物の錦類にみる各種技法 廣谷妃夏

はじめに

本概報は東京国立博物館（以下、当館）が所蔵する法隆寺献納宝物（以下、献納宝物）をはじめとした法隆寺伝来の錦類（平織の緋織や綴織、また二色以上の色糸で織られた木綿なども含む多色織物という意味で錦類とした）について、現在確認し得る全種類を目録化した初の試みである。

当館が所蔵する献納宝物の染織品にはN列品（献納宝物として登録される作品）以外に未整理品も多く、これらは修理完了後に順次列品に編入されている。未修理作品はなお約一千点近くに上る。未整理品については今後の報告を企図し、本概報では、現段階で献納宝物として整理済の錦類を対象とした。

また当館には献納宝物以外にも江戸時代に制作された古裂帖など、法隆寺伝来の染織品を研究するうえで欠かせないI列品（日本染織として登録される作品）も所蔵されている。古裂帖のうちにはN列品にない種類の錦もあるため、先に刊行した『法隆寺献納宝物特別調査概報XLI（41）染織1刺繍』（以下、「染織1刺繍」）の編集方針に準じて収録することとした。

なお、本概報の編集方針として各作品は技法別に配列し、狭義の錦である経錦と緯錦においては文様が共通する場合があるため、あえて文様構成ごとに並べた。おおむねこの配列によって、飛鳥時代から奈良時代に受容、制作された錦類の技法と文様の発展を追うことができるであろう。

しかし、ここにおいてなお問題として残るのは、当館の所蔵品が献納宝物における染織品のすべてではないということである。明治11年（1878）に法隆寺から皇室へ献じられた宝物は、当初正倉院宝庫で保管され、明治15年（1882）に東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）へ管理が移されている（献納から博物館受け入れまでの経緯は上記「染織1刺繍」の「法隆寺献納宝物の刺繍作品」参照）。こうした経緯のなかで、献納宝物の主要部分は現在当館が所蔵しているものの、御物をはじめ皇居三の丸尚蔵館と正倉院事務所にも分蔵されている。

このうち、正倉院事務所には約一千点に上ると推定される染織品が確認されるが、いまだ全容が明らかでないため、本概報は当館の所蔵品に限って報告する。その意味において献納宝物における錦類の全

容を示すものではないが、それにしても87種類として示し得た錦はこれまで国内各所に分蔵されている法隆寺裂を概観してきた経験からしても、未修理作品に含まれる少数の錦を除けば、ほぼ全種類を網羅したものといえる。いわば本概報は法隆寺伝来錦の種別を考えるうえで基礎となる台帳の役目を果たすものであり、今後国内外の各機関や個人が所蔵する法隆寺由来の染織品を同定する作業においても有効活用が期待される。

1. 古記録に見る法隆寺の錦類

まず、作品の伝来から述べるにあたり、奈良時代にまとめられた法隆寺の財産目録である『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、「法隆寺資財帳」。天平19年〈747〉成立）と、法隆寺東院の財産目録『仏経并資財条』（以下、「東院資財帳」。天平宝字5年〈761〉成立）に注目したい。東院はその創建当初、独立の寺院と位置づけられていたため、法隆寺本体とは別に資財帳が存在する。

さて、両資財帳を見ると「秘錦大灌頂壹具」（「法隆寺資財帳」）のように物品名に錦の名称があるものと、「褥一枚 表科子錦」（「東院資財帳」）のように注記として錦の存在を示したものがある。いまこれらのなかから錦の種類を抜き出すと、まず色分けで示したものに「青錦」「赤錦」「縹錦」「白錦」（以上、「東院資財帳」）がある。また、色と文様で示したものに「紺花錦」「紫花錦」（以上、「東院資財帳」）が上げられ、そのイメージとして青地唐花文錦（No.64）や紫地唐花文錦（No.61）が参考となる。

次に、文様のみを示したものに「花形錦」（「東院資財帳」、ただし花形に裁断した錦の可能性あり）、「科子錦」（「法隆寺資財帳」「東院資財帳」）および「科錦」（「東院資財帳」）がある。「科」には「すじ」「あな」「子」は小さいといった意味があることから、細かな縞文様や列点文、小花文などが思い浮かぶ。茶紫地小花目結襷文錦（No.18）などがイメージに近いだろうか。「呉人錦」（「法隆寺資財帳」）もあるいは人物文様の錦を指すのかもしれない。

技法によって示したものとしては「両面錦」（「東院資財帳」）があり、緑地目結襷文風通（No.14）のような二重織の作品を示すのであろう。また、「五色糸交幡」（「法隆寺資財帳」）や「糸交幡」（「東院資財帳」）という名称からは多色の糸をランダムに織り交ぜた織物が想起されるが、実際に幡身の縁として多色の空糸（数色の糸を交ぜて一本に合わせた糸）を用いて平織とした雑色段織（No.4）が存在する。

次に、素材で示したのものとしては「毛錦」（「法隆寺資財帳」）があり、羊毛を用いた多色織物を指すと考えられる一方、古代東アジア世界において希少であった木綿も縮れた繊維をもつことから、双鳥円文木綿裂（No.36）のような作品も該当作品として想定し得る。木綿製品としては「法隆寺資財帳」に玄奘三蔵のものという「白牒」の袈裟一領が記されている。この「白牒」とは木綿織物を指すことが知られており、あるいは双鳥円文木綿裂そのものに該当する可能性も考え得る。

また、特殊な名称として「秘錦」がある。これは「法隆寺資財帳」に、元明天皇の一周忌法要（養老6年〈722〉）に用いたことが記される「秘錦大灌頂壹具」に対応する現存作品の「広東綾大幡」（N-24）の存在によって、広東錦、すなわち赤地経緋を指すことがわかる。法隆寺金堂に安置された釈迦三尊像の脇侍背面や四天王像を見ると、彩色文様として表わされた織物が経錦（経糸に色糸を用いた錦で、わが国では7世紀に受容された。8世紀以降は緯糸に色糸を用いた緯錦が一般的となる）ではなく経緋織物であることからしても、当時いかに珍重されていたかがわかる。

以上、古代の記録をながめたが、総じて錦類の具体的な姿については特段の関心が示されておらず、現存作品との対応を裏付けることは難しい。しかし改めて考えるに重要なのは、法隆寺に伝来した染織品が基本的に飛鳥時代から奈良時代に限られることである。現在も法灯を伝える法隆寺にあっては平安時代や鎌倉時代の染織品も多く伝えられていてよさそうだが、実際には平安時代の作例は確認されず、宝物の包み裂として鎌倉時代の「錦夏褥」（N-44）など少数が知られるのみである。

これは寺の開基である聖徳太子に代表される、飛鳥時代から奈良時代の作品を選択的に遺した結果に違いなく、信仰に基づく宝物の保護意識が脆弱となりやすい染織作品を、現代にまで伝えた原動力であったことを知る。平安時代以降の法隆寺における宝物記録は基本的に聖徳太子信仰に関連したものであり、太子の袈裟という「糞掃衣」（N-33、N-34）や太子の足跡とされる「御足印」（N-36）、能曾姫という人物が太子に捧げた衾（夜具）という伝説をもった「夏御褥」（N-44 付属）など少数の作品が特別視される以外、ほとんど史料上に染織品は語られない。古代東アジアにおける錦の代表作として著名な「四騎獅子狩文錦」（法隆寺所蔵）については『古今目録抄』（顕真撰 鎌倉時代〈13世紀〉）に引用される「寛元々年八月廿三日後法性寺禪定殿下法隆寺宝蔵宝物自被渡時日記」に「四天王坎文錦一丈許 赤地」とあり、寛元元年（1243）の頃には四天王の文様と認識されていたことがわかる（後に天保13年〈1842〉の江戸出開帳時に刊行された『御宝物図絵』でも同作は「四天王紋錦之旗」と解説される）。

個々の染織品が古代の作例として広く注目されるようになったのは比較的新しく、その目録化は管見

の限り天保7年（1836）刊行の『和州法隆寺宝物目録』（当館蔵）が初めてであると思われる（元禄7年〈1694〉に行なわれた江戸出開帳の記録である『江戸江令供奉奉諸仏并宝物之品々』〈法隆寺蔵〉に挙げられた染織品は「釈迦御袈裟」「太子御足印」「御襟」「中将姫之邁糸袈裟」「頼朝卿寄進之幡」「打敷水引」の7点のみ）。いまその名称のみを挙げると、「捷陀羅國の納袈裟」「御足印」「繡佛菩薩像」「蜀紅御褥」「廣東御褥」「夏御褥」「推古天王御几帳」「四天王紋錦ノ御幡」「藕糸御袈裟」「御毛氈」「糞掃衣」「太子丸御坐具」「冬之御座具」「御褥切」「蜀紅廣東切」「御褥」「唐織の御褥」「蜀紅切」「鸚鵡形毯代」「五色糸交幡」「蜀紅之切」「廣東之小幡」「達磨附属の御袈裟」「廣東小幡」「御□唐櫃冬御褥」「御幡」の26点であり、この作品区分の基本形は、天保13年（1842）の江戸出開帳を経て明治5年（1872）の『古器物目録』（当館蔵）や、明治9年（1876）の『法隆寺御蔵物品目録』（当館蔵）を通じて明治11年（1878）の宝物献納にまで影響が及んでいる。

兵庫・香雪美術館所蔵の「法隆寺古裂帖」は、その奥書から天保13年の江戸出開帳時に制作されたことがわかるが、いわゆる名物裂帖の体裁をとった仕様からしても、研究や収集の対象として古い染織品が注目され始めた時代の風潮のなかで、法隆寺伝来の染織品が改めて注目された足跡を知ることができ

2. 法隆寺における錦類の主な用途

幡や褥、袈裟といった仕立て姿から切り離し、「古裂」として染織品を分類する感覚は明治時代以降にも引継がれ、当館でも古くは「正倉院頒布裂」（I-337-1~255）の仕様に倣い、作品を裁断したうえでガラス板に挟む整理が行なわれている（I-336-1~112、その後該当作品は、平成22年〈2010〉度~25年〈2013〉度の修理において、ウィンドウ・マット装または低加圧ウィンドウ・マット装に変更された）。

昭和47年（1972）に開始された献納宝物における染織品の本格修理以降は、本来の形状を尊重した近代的修理が行なわれるようになり、作品の形状や使用された織物の詳細が明らかになった。その基本的な研究成果は当館編の『法隆寺献納宝物 染織I——幡・褥——』（1986）⁽¹⁾、および長年にわたり修理に従事している沢田むつ代の『上代裂集成』（2001）としてまとめられている⁽²⁾。以下では先行研究を参考のうえ、法隆寺における錦類の主な用途として幡と褥を中心に概観してみよう。

幡

幡は主に仏堂の内外を荘厳するための吊り下げ旗である。上部から吊り下げ用の懸緒とその垂下部である舌、三角形の幡頭手、縦長方形の幡身、幡身の左右に下がる幡身手、五条または七条からなる幡足

によって構成され、頭・身・足など人体になぞらえた名称が付けられている。

献納宝物の幡には錦・綾・平絹が用いられているが、錦は基本的に幡身の第一坪目に用いられ、特に豪華な作例については懸緒や幡頭、幡身の縁と坪界にも用例がある。その代表例としては「蜀江錦綾幡」(N-26-1)があり、懸緒・舌・幡頭手にNo.10「赤地山菱文錦」(N-46-3-1~4は「蜀江大幡」〈法隆寺所蔵〉の同位置に用いられた断片とみなされる)、幡身第一坪に赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦(No.38)、幡身の縁と坪界に赤地格子連珠花文錦(No.22)が用いられている。

この幡は現在法隆寺に所蔵される「蜀江大幡」や東京藝術大学美術館所蔵の「蜀江錦幡残欠」と本来一具をなすものだが、仔細に見ていくと織幅に対して縦半分のみ存在した赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦を苦心して生地取りし、あるいは縫い繋いで一坪とした形跡がうかがわれ、十分な生地が手に入らないなかで制作されたものとわかる(「蜀江錦裂」(N-56)は「蜀江大幡」の第一坪に該当すると考えられる)。これらの赤地経錦について廣谷妃夏は技法と文様の検討から、中国では南北朝時代から隋代(6世紀後半~7世紀前半)にあたる時期の作であることを積極的に考証しており⁽³⁾、少ない量の錦を効率的に用いた制作態度からは、わが国におけるこの種の錦の初期受容段階を垣間見るようで興味深い。

また「法隆寺資財帳」の記述により、元明天皇の一周忌法要で用いられたと考えられる「広東綾大幡」では、幡の第一坪という特に重要な場所に先述した「秘錦」(赤地経緋)が用いられていることがわかる。東野治之氏は「秘錦」について、「朝霞錦」とも呼ばれた新羅の生産品であり、一義的には王室のための織物であったため、皇帝所用の物品に「秘」字を付す中国の例に倣って「秘錦」と呼ばれたと考察されている⁽⁴⁾。

『日本書紀』には新羅からの貢上品として天武天皇10年(681)と朱鳥元年(686)に「霞錦」の記述がある。特に天武天皇10年に記載の品々は「金、銀、霞錦、幡、皮之類」と読まれているが、献納宝物における赤地経緋の使用例からすれば、「霞錦幡」と読む可能性がある。わが国の7世紀後半から8世紀にかけて文献に現れる「秘錦」は、数ある織物のなかでも特に高級な輸入品であり、国内生産も行なわれることがなかった。希少かつ再現不可能な織物であるからこそ、幡の第一坪という最も重要な場所に使われたのだろう。

なお、特殊な例として「五色糸交幡」(「法隆寺資財帳」と「糸交幡」(「東院資財帳」)に比定し得る雑色段織裂(No.4~7)についても触れておきたい。これは先述のように多色の空糸を用いて平織としたもので、「黄地綾幡残欠」(N-319-18)にみるとおり、幡の縁として用いられていた。

特に注目したいのは、織幅が約6~8cm程度という狭い織物であること、空糸の織り入れ方がかな

りランダムで織耳にかなりガタつきがあるなど、専門工人の制作として疑問がある点である。つまり、もとより幡の縁という用途に限ったかたちで、素人が織の作業を行なったことが予想される。「法隆寺資財帳」によると「五色糸交幡」は天平6年(734)に「平城宮皇后宮」(光明皇后)が奉納したものであり、あるいは宮中の女性達が幡の縁を作善として制作した可能性が考えられるであろう。

褥

褥は敷物の一種で、法隆寺の場合は主に僧侶の座具として用いられた。献納宝物の褥を見ると、麻を芯地として、表地に錦や綾を用い、裏地に小さな目結文を絞った纈纈平絹が用いられている。なかでもNo.9「広東錦褥」(N-42)とNo.48「蜀江錦褥裂」(N-43)は飛鳥時代に遡るもので、現存するわが国最古の褥である。

これらの褥を見ると表地は中央付近で2枚を縫いつないだ仕様をとっている。これは7世紀の錦がおおむね45cm幅前後であることから、それ以上の大きさで褥を仕立てる場合、接ぎ合わせる必要があるためである。「広東錦褥」と「蜀江錦褥裂」ともに左右両方の織耳を確認することができないためあくまで目安であるが、現状で表地の最大幅は「広東錦褥」が約49cm、「蜀江錦褥裂」が約36cmである。

これに対し、麻の芯地に天平勝宝6年(754)の墨書銘をもったNo.43「葡萄唐草文錦褥」(N-38)は錦の幅が約58cm、類例のNo.43「葡萄唐草文錦褥」(N-39)では約57cm、No.42「狩獵文錦褥」(N-40)では約58cmと、8世紀中ごろまでには1枚の錦で表地を仕立てるように変化している。また7世紀の遺品が経錦であったのに対し、8世紀の褥は緯錦で作られており、その技法の差から表わされた文様が大柄に変化している。

鏡筥

献納宝物に伝えられた褥が基本的に長方形であるのに対し、円形の例として「羅衣纈円褥」(N-30)がある。この作品には錦を用いていないが、錦を用いた類似作例として「円座具」(N-37)という名称で呼ばれてきた作品がある。しかし、仔細に見るとこの作品には周囲をめぐって麻の芯が帯状に存在し、これは立ち上がり部分の芯と考えられる。これによりおそらく本作は円形をした箱の内張りであったと考えられる。正倉院宝物においては鏡筥の内張りに平絹を用いた例があり、「円座具」も本来同様の使用法をとったものであろう。貴重な錦を内張りにふんだんに用いた例として、改めて注目される。

天蓋

天蓋は古代インドの日傘に由来し、その場に高貴な存在がいることを示すものとして、仏像や高僧などの頭上を飾るために用いられた。献納宝物では、蛇舌と呼ばれる天蓋周囲に垂れ下がった三角形の部

位に、赤地経錦を用いた例がみられる。正倉院宝物も視野にいれると、7世紀から8世紀の天蓋は本体部分を平絹か綾とし、天蓋中央の軸を挿す部分の周囲や四隅、蛇舌部分に錦や綾を用いているものが多い。こうした構造は法隆寺金堂の木製天蓋や高松塚古墳壁画の東壁男子群像に表わされた天蓋にも見ることができる。

帯

特殊な例として、聖徳太子の妃である膳大郎女が用いたと伝わる「蜀江錦帯」(N-47)は赤地格子連珠花文錦(No.23)を帯状に縫製している。本作は現状で4片に分かれており、いずれも端の縫製部分を残していない。にもかかわらずその長さは最長の断片で354cmもあり、実際に人体用の帯であったとは考えにくい。正倉院宝物の場合においても衣服の帯と考えられる平打組の帯では最長で3mほどであり、全体を錦で作ったものは残されていない。「蜀江錦帯」には当初からの仕様と考えられる不整形な切り取り跡もあるため、当初は天蓋などに付属する仏事用の帯であった可能性も考えられる。

包裂

中世以降の例として、宝物の包裂として用いられた錦の代表例としては、No.83「錦夏褥」(N-44)と紅地菊桐文錦(No.84)がある。「錦夏褥」は当館での名称であり、伝統的には「夏御褥」と呼ばれてきた。現在は大破した状態であるものの、『古今目録抄』(鎌倉時代)によると、絹綿を生絹で包んだ衾であったといい、現在も付属品として絹綿と白平絹が残されている。これにより赤地に菊花円文や唐草花文等を配した錦を二幅仕立てとした「錦夏褥」(鎌倉～室町時代)は包裂であったことがわかる。どの宝物を包んでいたのかは不明ながら紅地菊桐文錦(室町時代)も同様の包裂である。

また、五代将軍徳川綱吉の生母桂昌院によって元禄7年(1694)に誂えられた箱には、七種宝物(糞掃衣(N-33)、梵網経(N-13)、五大明王鈴(N-64)、八臣瓢壺(皇居三の丸尚蔵館所蔵)、御足印(N-36)、梓弓(N-133)、六目鑄箭・彩絵胡籥(N-134))をはじめ、錦で作られたものを含んだ江戸時代の包裂が付属している。(三田)

3. 献納宝物の錦類にみる各種技法

今回の調査で判明した事項を中心に、献納宝物ならびに法隆寺伝来の当館所蔵品に含まれる多色織物の各技法について概説し、分類を試みたい。古代中国においては、「錦」は基本的には絹糸(特に生糸および練糸)を用いた経錦等の紋織物を指す。しかしながら前章で示したように、日本の奈良時代の文献資料では、「錦」の語に様々な多色織物が当てられている。現代日本語における一般的な語義と同様に、上代においても「錦」は、素材技法を問わず多

色の織物を指す総称であったことがうかがえ、本章でもこの観点に則り記述する。各技法の錦の一覧を本書巻末に付している。

平織

平織は経糸と緯糸が1本ずつたがい違いに組織する、最も基本的な構造の織物である。献納宝物では、様々な色に先染した糸を経緯に用いることによって多色織物とする例が多く確認される。多くが経縞あるいは段文を呈し、献納宝物の錦類のうちでも特に素朴な技法である。なお、経緋も平織の一種であるが、染色技法とともに後述する。

(1) 経縞

経糸に色糸を用いたものでは、3例が確認された。茶地雑色経縞裂(No.1)は、様々な色の糸を機結びによって順々に繋いだ糸を、経糸の一部に織り入れている。また、雑色空糸平織(No.2・3)は、一部のみならず経糸全体に太い空糸(複数色の糸を撚り合わせた糸)を用いたものである。

(2) 横縞(段織)

緯糸に色糸を用いる雑色段織裂は4例(No.4～7)が確認された。規則的な段になるように順に織り入れられた緯糸はその風合いも様々で、空糸風に2色の色糸を引き揃えた糸、強くS撚にした空糸をさらに数本引き揃えた糸、1色の平糸を用いる例がある。いずれも細幅の織物で、その段で使用しない緯糸は織耳部分で浮かせている。経糸は細い生糸(No.4)や、やや太い練糸(No.5)を用いる例がある。

(3) 縦横縞

縦横縞を平織によって表わすものに、赤地整文交織裂(No.8)の1例が確認された。この作品では、濃色の糸と淡色の糸の配列を工夫することにより、遠目に見て経縞や横縞に見える部分や、格子の輪郭線を表わしている。

平地浮文錦

この種の錦は、白地山菱文錦(No.9)および赤地山菱文錦(No.10)の2例が確認された。色糸を文様に即して浮かせる、浮文織の一種である。地をつくる緯糸(地緯)とともに、文様を表わすための色糸(絵緯)を同じ杼口に全通(緯糸を織幅いっぱいに通して用いること)で織り入れ、文様を表わす部分のみ、絵緯を地組織より浮かせている。絵緯の浮きを規則的に押さえるための別絡みの経糸は存在せず、絵緯はやわらかく浮く。後代の浮文織には、文様にかかわらない部分では絵緯を裏面で長く浮いたままとするものが多い。一方で、上代の平地浮文錦の大きな特徴は、地の部分では絵緯と地緯を2本まとめて扱い、絵緯が完全に裏に回らずに、地経としっかりと平に組織する点である。このために、用いる絵緯の色ごとに、段状に色帯が重なるように見える。織り出される文様は、ほとんどが菱文や山文

の変形で、経糸の把釣を捨てていくことで自然に発生しうる、幾何学的な文様である。

平地浮文錦の製作については、東南アジア諸地域で織られている、絵緯による紋織物に類するとする見解がある。その原理としては以下が想定されている⁽⁵⁾。経糸には平組織をつくる地綜統に加え、竹棒と糸などでつくった紋綜統を文様に則してあらかじめ通しておく。この状態の経糸を開口し、地緯を織入れ、そのまま紋綜統を引き上げて同じ杼口に絵緯を入れる。このように二重の開口を繰り返すことで、地緯と絵緯を同口に入れつつ、浮文織とする。原理上は、指や棒などを用い、その都度色糸を掬い上げても同じ構造の錦が製作可能であるが、献納宝物の2種類の平地浮文錦には、紋上げ（文様に即して引き上げる経糸を選択し紋綜統に通すこと）の誤りと思われる変則的な浮きが、経糸方向に繰り返されるため、やはり事前に紋綜統を整えていたと考えられる。

このように緯糸を浮かせて文様を表わす紋織物は、紋織技法としての素朴さから、「魏志倭人伝」（『三国志』魏書・倭人条）に記された「倭錦」に類すると推定されることもある。現時点では、この種の錦は法隆寺伝来の染織品にのみ確認されており、同時代の中国出土品には確認されていない。日本列島の紋織技術の古層には、このような緯糸による文様表現があると考えられる。7世紀の錦としては、経糸によって有機的な文様を表わす、中国大陸由来の経錦技法と好対照を成している。

複様緯四枚綾地菱文組織

この種の錦は2例が確認された（No.11・12）。入子菱の地文が特徴的なやや特殊な錦で、淡茶地入子菱繫文錦（No.12）の一部に緯糸の色交替による頭文が確認できるものの、副次的な要素である。経糸は組織をつくる組織経と、表面と裏面の間に入り、緯糸を表面に押し出す芯経の二つの役割が確認でき、複様組織の一種といえる。織物の裏面では2色に引き揃えた緯糸と組織経が経四枚綾の入子菱文をつくり、表面においても2色引き揃えの緯糸とは別の緯糸を組織経が規則的に押さえ、入子菱文をつくる。表面の緯糸はやや長く浮いて見えるが、組織経との交錯のみを考えれば緯四枚綾組織である。

二重織（平地風通）

この種の錦は、小罫文風通（No.13）と緑地目結襷文風通（No.14）の2例が確認された。表面を構成する織物と裏面を構成する織物とが、それぞれほぼ独立した平織となり、文様の部分ごとに表裏が交代し、各部分は袋状に綴じる。

このような二重織は、前述のとおり、上代では「両面錦」と呼び表わしていた可能性もある。表面の織物と裏面の織物の間隙にまさに風が通るような組織であり、近世以降の「風通」とほぼ同じものである。ただし、二重の織物であるため経糸と緯糸は通

常の平織の2倍の本数が必要となる場所、後代の風通では一般に経緯の色糸を121212……のように配列する一方で、この2例では1122112211……のように打ち返した順番となることが確認された。

経三枚綾地緯浮文織

経緯縞地花文錦（No.15）の1例が確認された。経糸に複数色を用い、緯糸と経三枚綾に組織し、部分的に地緯を浮かせて文様を織り出している。

経錦・緯錦

古代東ユーラシアにおける狭義の「錦」は、経錦と緯錦に二分される。経錦は経糸に、緯錦は緯糸に複数の色糸を用い、この色糸の浮き沈みによって文様を織り出す錦を指す⁽⁶⁾。このうち地を平組織とする複様平組織経錦は、中国では西周時代（前8世紀）の出土品からも確認される、非常に古い紋織技術である。その技術および文様の精華とみられるのは漢代経錦であり、交易などを通しユーラシア大陸の東西に渡っていったことが南シベリアヤタリム盆地等各地の出土資料により知られる。この複様平組織経錦は、日本列島では古墳時代中期（5世紀）の出土例が確認されており、技術としても中国南部あるいは朝鮮半島の工人によって、6世紀までに伝わったとみられる。一方で中国大陸では7世紀ごろまで、複様平組織経錦を引き続き織り続けていた。しかし、中央アジア以西で生産された複様綾組織緯錦が中国でも盛行し、7世紀前半には緯錦の三枚綾の地合を模した複様綾組織経錦が織られるようになった。そして、8世紀にはほぼ複様綾組織緯錦に移行する。正倉院に伝わる錦からみると、大陸での傾向と並行するように、日本でも奈良時代には複様綾組織緯錦が盛んに織られたことがうかがえる。ただし、東大寺大仏開眼会（天平勝宝4年〈752〉）、聖武天皇一周忌斎会（天平勝宝9歳〈757〉）などの儀礼に用いられた染織品のうちには、多くはないものの複様綾組織経錦が含まれており、8世紀の日本では新旧の技術が並走していたといえる。しかし、その文様表現は馴化が進み、8世紀を越えず経錦技法はほぼ途絶したといつてよい。

献納宝物に目を移すと、法隆寺伝来の錦は正倉院よりも一世紀ほど早いものを中心とし、割合としては経錦が多く含まれる。法隆寺伝来の一群は経錦の地合が古来の平組織から綾組織へ変化し、そして錦の主流が経錦から緯錦へと段階的に変遷する時期のものであり、千年以上におよぶ経錦の歴史のなかでは末期の様態であることに注意したい⁽⁷⁾。さらに献納宝物には、東大寺正倉院伝来染織品が明治期に混入したものではない、と考えられる錦のなかにもかなりの数の緯錦が確認でき、正倉院裂との同時代性も注目される。

(1) 複様平組織経錦

この種の錦は、当館所蔵品からは計13例が確

認された。

漢代の複様平組織経錦には経糸に6色を用いる例も報告されているが、法隆寺伝来の錦ではいずれも経糸は2色か3色を一組とする。3色以上の色を表現するには、色の組み合わせを変えた経糸の組を順番に配列するため、全体に長斑の色帯のようにみえるものが多い(長斑双鳳連珠円文錦〈No.41〉ほか)。整経の際に、あらかじめ各経糸を123321……というように打ち返し順に配列しておき、地組織をつくる地綜統にはこの経糸一組を通し、さらに文様表出にかかわる紋綜統には、隣りあう組の同色の糸を2本一組として通すことで、効率的に文様を表わしたと考えられる。緯糸は、1越ごとに顕文(文様表出)と組織という二つの役割を果たし、複様組織を成す。第1の緯糸(顕文緯/陰緯)は、一組の経糸のうち、文様に即して1色の経糸を選択して表面に掬い出し、残りの経糸を裏に送る。第2の緯糸(組織緯/母緯)は、一組の経糸とともに平組織を形成し、顕文緯によって裏面で浮いた経糸を押さえている。このような構造の紋織物を複様平組織経錦という。

絹は、蚕繭から糸を切らずに引き出すことができればその繊維の長さは数mにもなる。生糸や練糸として用いるのであれば、植物繊維や獣毛のように紡ぐ必要はない。中国古来の経錦は、経方向の張力に強い長繊維で、表面が滑らかな、絹糸の特性に適した技法といえる。とはいえ、数色を一組に用いるとなれば、自然に経糸の糸混みは強くなる。そのため、製作の便から表面に出る色の経糸のみを紋綜統によって引き上げ、織表(織機で織り出すときの上面が織物の表になる織り方)としていたと考えられている。通常は3色のうち1色を引き上げるが、経糸の選択(紋上げ)の際に、誤って2色選択したことにより、経糸方向に点線のように別色が現れる現象が確認されることが多い。

8世紀の複様綾組織緯錦に用いられたと考えられている空引機(小花楼提花機)では、各経糸に繋がる通糸を操作することによって経糸方向に文様反復でき、さらに、この通糸をまとめた大通糸を機台の上方に座る空引工が文様に則して操作することによって、緯糸方向にも一定の窠間幅で同じ文様を織り出すことができる。しかし、複様平組織経錦では、たとえ経糸・緯糸方向それぞれに同じ文様を繰り返しているようにみえても、織疵などを観察すると、緯糸方向には完全に同じ文様の反復はみられず、経糸方向にのみ文様反復可能な機構をもつ織機によって製作されていたことがわかる。この点から経錦は、棒綜統や輪奈綜統など、より単純な綜統の仕組みをもつ織機を用いて、織幅分の横長の文様帯を経糸方向に反復して織り出していた可能性が指摘されている⁽⁸⁾。今回の調査により、法隆寺伝来の経錦でも例外なく、緯糸方向に完全な文様反復はしておらず、比

較的小さな文様を織幅いっぱい配列していることが確認された。

漢代経錦では、この小さな文様帯を文様の天地を変えずに段のように重ねるのが基本型である。いっぽうで、6世紀以降とみられる中国出土および日本伝来の経錦では、文様を横倒しとし、文丈(経糸方向の文様の丈)の半分を製織上の文様単位として紋綜統を整える。この一段分の文様単位を織ったのち、同じ文様単位を経糸方向に線対称に打ち返して対称文とすることで、全体に大きな文様をつくる傾向にある。これは、大柄で華麗な緯錦風の文様を、経錦の技術で模すための工夫といえる。法隆寺伝来の錦では、赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦(No.38)がその代表例である。また、経糸方向の製織上の文様単位(対称文の場合は文丈の半分)は、最大値と最小値を除いた平均は2.7cmであるが、最も小さいものでは紫地双鳥文入波唐草文錦(No.49)の1.4cm(文丈2.8cm)から、大きいものでは紅地鳥獸連珠円文錦(No.37)の10.5cm(文丈21.0cm)まで幅がある。

(2) 複様綾組織経錦

この種の錦は、計20例確認された。

基本的な構造は複様平組織経錦と同じであるが、一組の経糸と組織緯が経三枚綾地に交差する。緯糸は組織と顕文を交互に果たすので、見た目には経糸は緯糸5越分を飛び越しているように見える。なお裏面では、緯三枚綾に組織する。法隆寺伝来の錦では、主に3本一組から6本一組までの多色の経糸を用いており、前述の複様平組織経錦に比べて一組に多くの経糸を用いる例が増加している。綾流れの方向は、右流れが計7例、左流れが計13例となり、大きな偏りは認められない。経糸方向の製織上の文様単位(対称文の場合は文丈の半分)は、最大値と最小値を除いた平均は複様平組織経錦と同じく2.7cmであるが、最も小さいものでは緑地花葉文錦(No.51)の1.5cm(文丈3.0cm)、大きいものでは淡緑地輪繫文錦(No.16)の4.3cm(文丈8.6cm)で、複様平組織経錦に比べ均一である。

地組織が三枚綾地であるため、製織の際には、紋綜統の操作と緯入れを行ない、紋綜統の引き上げを維持したまま、地綜統と次の紋綜統の緯入れの操作を2回ずつ繰り返していたことになる。紋綜統を上方に効率的に固定する便を考えれば、空引機のように二人がかりでの製織も考えられる。ただし、複様綾組織経錦が西方の複様綾組織緯錦の影響を受けつつ、複様平組織経錦の延長で織られたとすれば、少なくとも地組織を綾組織としはじめた初期には、複様平組織経錦に近い機構の織機を用いていたと想定されている。また、今回の調査において同じ複様綾組織経錦でも、表面の風合いや経糸の交替の処理にいくつかの異なる傾向をもつ錦が確認された。一群の資料のなかで複数

の複雑綾組織経錦を比較できる貴重な例であるため、あくまでも参考として、代表例を挙げて付記しておきたい。

- ・淡緑地輪繫文錦 (No.16)、紫地亀甲繫花葉文錦 (No.19) ほか

やや太く膨らみのある経糸が密に交錯し、組織緯を含む緯糸をほぼ完全に覆い隠し、表面の経糸が組織点と組織点の間で紡錘形を成す。

- ・赤地花入連珠円文錦 (No.26)、縹地花入連珠円文錦 (No.27) ほか

経糸方向に程よく張った経糸が緯糸とバランスよく交錯し、組織緯が整然と綾流れに従って露出する。また、表面の経糸が組織点近くで角張るさまが緯錦の緯糸に似る。

- ・紫地小花目結襷文錦 (No.18)、紫地獅嚙鳳凰文錦 (No.45) ほか

経糸方向の張りが緩く、表面で顕文する経糸はやや瘦せた線の集合にみえ、裏に沈んでいるほかの色糸が垣間見えるもの。また糸の配列や交替に若干の混乱がみられるもの。

紋綜統や織機の機構のみならず、経緯に使用する糸の前処理や太さのバランス、緯打ちの具合、保存状態、織手、工房その他の諸条件によって、見た目上の織の状態は多様に変化する。これらの複合的な条件を考慮せず一概に分類することは厳に慎まなければならないが、法隆寺伝来の錦では複雑平組織経錦に比べ、複雑綾組織経錦に技術面の方向性のばらつきが確認された。

(3) 複雑平組織緯錦

この種の錦は、計3例が確認された。うち2例が絹製、1例が木綿製である。

複雑平組織緯錦は、複雑平組織経錦をちょうど90度回転させたような組織で、一組の緯糸と平組織を成す経糸（組織経／母経）、文様表出を担う経糸（顕文経／陰経）を交互に配し、表面に露出した緯糸によって文様を表わしている。このような錦は、紀元前後には西アジアにおいて羊毛を用いて織られ始めたと考えられている。また、中国西北部タリム盆地のザーホルック遺跡（戦国時代～漢代）からは、絹の真綿から紡いだ糸を用いた複雑平組織緯錦が複数報告されているが、その文様は明らかに漢代経錦の文様に類似する。平組織緯錦の東西の出土例は、羊毛製あるいは真綿の糸にある絹製がほとんどを占める。複雑平組織緯錦は、古代中国の複雑平組織経錦を模して、短繊維という羊毛の特性のために緯糸顕文に習熟した文化圏で発達した技術といえる。

素材は異なるものの、紡いだ糸を使用するという点では羊毛、木綿、絹の糸は共通する。木綿製とみられる双鳥円文木綿裂 (No.36) は、少なくとも5世紀以降、木綿製品の生産が盛んとなった中央アジアで製作されたと考えられる。タリム

盆地におけるこれまでの出土報告では、トルファン近郊アスターナ古墓群309号墓より出土した幾何文錦 (M309:048、北朝、平組織緯錦か、絹綿交織、新疆ウイグル自治区博物館所蔵) などの数例が報告されているものの⁽⁹⁾、木綿製品の出土例はその多くが、平織、あるいは縹縹等の後染によって加飾したものであり、先染の糸を用い、緯錦として文様を織り出す双鳥円文木綿裂は貴重な例といえる。ここで興味深いのは、前述の経錦とは逆に、この作例では経糸方向に文様が反復せず、段のように別の文様帯（双鳥円文および四葉文）を配し、緯糸方向には文様の半分にあたる製織上の文様単位を屏風のように打ち返して対称文様を成している点である。現代の西アジアにおいても、緯糸方向にのみ文様を繰り返すことができる立機（イランのzilu織機など）が存在し、こうした現存例をもとに、中央アジア出土複雑平組織緯錦についての技法考察がなされている⁽¹⁰⁾。本作例も、緯錦の織機が空引機へ発展する前段階に位置し、当時西アジアから中央アジアにかけて存在した織機による製作であろうと推測される。経糸方向の各段の丈は25cm、緯糸方向の製織上の文様単位（窠間幅）は9.5cmであり、縦長矩形の文様単位である。

絹製の2例（紅地渦連珠輪違文入双獅子文錦〈No.34〉、淡茶地渦連珠輪違文錦〈No.35〉）も、断片を見るかぎりでは経糸方向には段のように文様帯を配し、緯糸方向は屏風窠間による文様構成となる。製織上の経糸方向の文様単位は、最小の復元丈で8.8cm（全体の文丈はいずれも不明）、緯糸方向の製織上の文様単位（窠間幅、対称文の場合は文様幅の半分）は3.2cmとなる。また、経糸には強く撚りをかけ、緯糸には撚りがなく強い光沢を放つ練糸を織り入れる。また、やや太い組織経のために緯糸が組織点で角張り、矩形の集合のように見える点が、2例とも共通する。さらに、文様は中国南北朝時代の綺（平地綾）や平組織経錦にも類例の多い、連珠渦輪違文に動物文をこめる構成で、中国内地での製作の可能性も考えられる。6世紀から7世紀の日本列島では複雑平組織緯錦の製作は試みられていなかったと考えられ、中国での出土例も多くはないなかでこの2例は貴重な伝世例といえる。

(4) 複雑綾組織緯錦

この種の錦は、計16例が確認された。

複数綾組織緯錦は、複雑平組織緯錦と同じく中央アジア以西に源を発すると考えられるが、紀年銘資料を伴う中国西北部出土の染織品から、7世紀後半になって本格的に中国でも織られ始めたとみられている。基本的な構造は複雑平組織緯錦と同じであるが、地組織は綾組織となる。中国出土品、日本伝世品ともに共通する基本的な特徴を以下に挙げる。まず経糸は、多色の緯糸の一組と緯

三枚綾組織を成す経糸（組織経、なお、裏面では経三枚綾に交差する）、織図に即し特定の色の緯糸を持ち上げて文様表出を担う経糸（顕文経）の二種類の経糸を交互に配している。このような組織を複様組織という。そのため、たとえば文様表現のために表面に露出する緯糸1本に注目すると、顕文経・組織経・顕文経・組織経・顕文経の経糸5本分を飛び越しているように見え、それ以外の緯糸は裏に回ったまま組織経と交差する。また、中国出土の複様綾組織緯錦では、顕文経と組織経の糸の本数や質に差異があるものが散見される。これは経糸の役割に応じ、織機に対して二重に整経していることとなり、織機の変遷とみることができ。また緯糸は、4色以上の多色を用いる傾向にあり、1色ごとに12341234……の順列に織り入れたものが多く確認されている。文様に関しては、一つの文様単位を上下左右に展開する点対称の文様構成が多く、この効率的な文様構成は、中国における空引機の導入という技術発展によると考えられている。

法隆寺伝来の複様綾組織緯錦では、製織上の経糸方向の文様単位（対称文の場合は文丈の半分）は平均18.2cm、緯糸方向の文様単位（窠間幅）は13.7cmほどで、平組織緯錦に比べやや縦横比の小さい縦長矩形の文様単位が多いが、緑地花鳥蝶文錦（No.55）など横長のもの、黄地唐花文錦（No.58）のように正方形に近いものも確認された。基本的な綾流れの方向は、右流れが計6例、左流れが計10例であった。さらに、今回の調査において同じ複様綾組織緯錦でも、表面の風合い、整経の処理、特に顕文経の動きに異なる傾向をもつ錦が確認された。前述の複様綾組織経錦と同様に、一概に分類に繋がるものではないが、あくまでも本調査で確認された事項として代表例を挙げて付記しておきたい。

(a) 白茶地双鳳連珠円文錦（No.39）、白茶地蓮唐花文錦（No.59）ほか

顕文経をやや太い生糸の2本引き揃え、組織経を1本遣い（素入）とし、緯糸方向に程よく張った緯糸がこれらの経糸とバランスよく交錯し、組織経が整然と綾流れに従って露出する。また、表面の緯糸の張りがよく、組織点近くで角張っている。緯糸の色数は4色。

(b) 緑地唐花文錦（No.60）、紫地唐花文錦（No.61）ほか

顕文経をやや細い生糸の2本引き揃え、組織経を1本遣いとし、広い色面の部分では2本引き揃えで交錯して緯糸を押し上げ、輪郭線などの部分で顕文経が個別に動き、細かく文様を表出している部分がある。また、表面の緯糸の張りがよく、組織点近くで角張っている。緯糸の色数は4色から7色と比較的多い。

(c) 緑地狩獵連珠円文錦（No.42）

顕文経をやや細い生糸の2本引き揃え、組織経を1本遣いとする。経糸が細いために、やや角の取れたふっくらとした風合いで緯糸が交錯する。緯糸の色数は2色。

(d) 黄地葡萄唐草円文錦（No.43）、緑地花鳥蝶文錦（No.55）ほか

顕文経、組織経ともに細い生糸の1本遣いで、緯糸にはやや太めの2色の練糸を用いる。経糸が細いために、角の取れたふっくらとやわらかい風合いのまま緯糸が交錯し、部分的に組織点と組織点の間で紡錘形を成す。緯糸の色数は2色。

(e) 紫地唐花文錦（No.57）

経糸に緯糸と同程度の太さの甘摺りの練糸を用い、顕文経も1本遣いとする。緯糸の張りはやや甘い。緯糸の色数は2色。

(f) 紅地唐花文錦（No.64）ほか

経糸に緯糸と同程度の太さのやや強いS摺りの練糸を用い、緯糸の張りは甘く、全体に色面の輪郭線がやや穏やかなもの。また、2本引き揃えの顕文経が1本ずつ個別に動き、輪郭線などを細かく表現している部分がある。緯糸の色数は4色、あるいは5色。

(g) 青緑地唐花文錦（No.67）

顕文経と組織経に別色の経糸を用い、地組織を緯五枚綾組織とする。緯糸の張りはやや甘い。緯糸の色数は4色。

これまでに報告されている7世紀から8世紀ごろの中国生産と考えられる中国西北部出土複様綾組織緯錦の例では、(a) (b) のごとく緯糸が表出部分で整然と角張るものが目立つ。一方、(c) (d) (e) のような風合いの緯錦については出土例が見受けられず、正倉院伝来品のうち、聖武天皇一周忌齋会等の機会に製作されたと考えられている染織品に、(c) (d) に類するものが多いことを考慮すると、現時点では日本列島で織られたものである蓋然性は高いといえよう。また、(b) (f) の錦のように2本引き揃えの顕文経が、一部1本ずつ個別に動く例では、より細かく滑らかな文様表出を目指し、あえて通糸を増やし、各顕文経に接続しているとみられ、織技術の変遷過程のうえで興味深い。

さらに注目されるのは、(g) 青緑地唐花文錦（No.67）である。7世紀の複様綾組織緯錦は、日本伝世品はもちろんのこと、大陸で出土した緯錦においても緯三枚綾組織が一般的であるなかで、緯五枚綾組織の地組織であることが判明した。同種の錦は、現在のところ確認例がなく、貴重な例といえる。地組織を縷子組織とする複様縷子組織緯錦が、9世紀ごろより中国出土品に確認されるが、8世紀後半とみられる正倉院宝物の錦においても報告例がある（縷線鞋〈北倉152第4号B〉）⁽¹¹⁾。五枚綾組織と複様縷子組織緯錦はいずれも、5本の経糸を一組とする組織

であり、基盤となる織機の機構や技術が共通する可能性もあるが、後稿の機会をもちたい。

このように一口に複雑綾組織緯錦といっても、法隆寺伝来の錦は7世紀から8世紀まで広くかかる可能性のある、多様な一群を含んでいることが明らかとなった。

経緋

この種の錦は、今回の調査では計12例が確認された。

経緋は、経糸とする糸を文様に即して括り、数回に分けて浸染し、この経糸と緯糸とで平組織に交差させて織った織物である。近世には「広東錦」「広東裂」とも呼ばれる織物であるが、本書では技法に即した名称を用いる。経緋については、現代のインドネシアの木綿経緋における技法をもとに、輪状整経で腰機を使って織る可能性が指摘されている⁽¹²⁾。輪状整経は、その名称のとおり経糸を輪奈状にして製織する方法で、腰機などの比較的小型で機台のない原始機に適している。輪奈状の経糸は、文様下図の写し、主に浸染による括り染め、織機への移動などの各工程において扱いやすく、経緋の製作には合理的な方法であると想定される。

献納宝物の絹の経緋は、いずれも箎目が見られず、緯糸密度に対して経糸が非常に密であることが確認された。箎は細かい歯の間に経糸を通すことで、経糸密度を一定に整え、また、前後に動かして緯糸を打ち込むこともある道具である。箎が入らない場合、自然に経糸は詰まり、緯糸に対して経糸の密度が高い経地合となることが多い。この点は、経糸を螺旋に輪奈状にして織機にかけるために、箎を入れることのない輪状整経による製作であることを裏付ける。現代の技法では、整経した経糸は緋括り用の木枠に移し、文様に即して数本ごとに括って染め分けることもあるが、この際、輪の下層に回った経糸と合わせて括れば、最終的な織物中央を対称軸とした対称文様となる。また、折り畳むなどの操作を加え、経糸の束を合わせて括れば、防染の手数を減らしつつ、さらに細かく上下・左右対称文様をつくることも可能である。献納宝物の経緋に目を向けると、紫地花繫文経緋(No.72)に含まれる数種類の花文のうち、緯糸方向の対称軸をもつものがある。この花文を境に、連なる花文が線対称となっている部分が確認された。古代の経緋においても、経糸を輪奈にし、二層をまとめて括るなどの方法がとられていた可能性が指摘できる。他にも法隆寺伝来の経緋には、雲気文、花文、獅嚙文などの文様が見られるが、ある程度文様が明らかな作品では多くが対称文様である。今回調査した12例のうち、基本的に経糸方向を対称軸とする線対称の文様構成は5例(No.68、69、72、73、74)、比較的小さな文様単位を点对称とする文様構成は2例(No.70、71)、全体文様が不明のものは5例(No.75~79)が確認された。いずれも断片のため、文様を括り染める手順

の想定には至っていないが、輪奈状にまとめた経糸を活かして、ある程度効率的に染め分けたことをうかがわせる。先行研究では、緋括りの単位本数による工房の差異の可能性について指摘されている⁽¹³⁾。日本列島では、このように織り出す前の糸の括り染めによって有機的な文様を積極的に表現する織物は、近世後期に至るまでほかにほとんど確認できず、経緋は飛鳥時代から奈良時代初期の対外交渉のなかで伝わった、一過性の渡来品と考えられる。

綴織

この種の錦は、金地龍蓮華文綴織(No.80)、葱花山形文綴織(No.81)、大型連珠円文綴織(No.82)の計3例が確認された。

綴織は、粗く整経した地経に絵緯を文様に沿って織嵌め、文様を表現する技法である。緯糸を経糸方向に密に詰めるので地経はほぼ表出せず、糸の色面で象嵌されたようにみえる。色面の境目では、緯糸が部分的に折り返しており、自然に把釣目と呼ばれる孔が生まれる。この孔は経糸が密であればそれほど目立つことはないが、構造上の弱点でもあり、緯糸同士をうまく絡ませて露出しないように工夫することもある。綴織は、複雑な織機の機構を必要とせずとも、平織で単純かつ明快に文様を表出でき、さらに短繊維を紡いだ糸に適した技法でもある。西アジアでは綴織が紀元前より織られていたことが出土品より明らかになっている。その多くが経糸を植物繊維、緯糸を羊毛などの獣毛製とする。東アジアの綴織は、この毛の綴織が東方に伝わって生み出されたものと考えられ、中国では唐代以降、緯糸に絹を用いる綴織(緯絲)が発達した。

法隆寺伝来品に含まれる綴織も、3例すべて、絹糸および金属箔糸を素材とする。文様の地は流し織技法(緯糸を水平に織り入れず、文様の形に沿って経糸方向に打ち込む技法)によって密に詰めている。文様の輪郭線は、一本把釣技法(絵緯を地経1本ごとに細かく折り返し、水平に上へ積み上げることにより細く線を表現する技法)と流し技法(絵緯を水平に入れず、下の形に沿わせるように地経と平に交差させてゆるやかな線を表現する技法)によって表わしていることが確認された。また、いずれも把釣目の部分で緯糸同士を絡ませることはしていない。

中世の錦

法隆寺伝来の錦は、ほとんどが飛鳥時代から奈良時代のものであるが、一部に鎌倉時代以降の錦とみられる染織品が確認された。

(1) 経三枚綾地絵緯浮文織

紅地菊花入唐草円文錦(No.83)の1例が確認された。地組織を経三枚綾とし、絵緯を織幅いっぱいに通した地絡全通織の一種である。地絡縫取織の一種である唐織物とはひとまず区別して記載する。

(2) 平地浮文織

紅地菊桐文錦 (No.84)、紅地髹木瓜桐文錦 (No.86) と浅葱地髹桐文錦 (No.87) の3例が確認された。

経糸と地緯を平地に交差させたところに絵緯を浮かせて文様を織り出す地絡全通織の一種で、前述の飛鳥時代における平地浮文錦と区別するため、暫定的に平地浮文織としておく。最も顕著な違いは、平地浮文錦では絵緯が文様の地では地緯と引き揃えられてともに経糸と交差するのに対し、中世の平地浮文織では絵緯は地の部分では織物の裏面に回され、裏では経糸と絡まずに浮いている点にある。経糸は2本引き揃えとし、文様に即して緯糸を浮かせる部分では、2本の経糸のうち1本を浮糸となる絵緯と地緯の間に入れて立ち上げる。つまり、経糸は地では母経と芯経が同一であるが、文様を表出する部分のみ経糸の機能が分かれている。法隆寺伝来の例では、使用する色は各段2色に限られ、経糸密度、緯糸密度ともに低い。この緯糸は2色を引き揃えているので、絵緯の入り方は自然に緯糸1段ごと(全越)となり、浮糸を押さえるための捌経はない。神社の御神宝として伝世している鎌倉時代から室町時代の浮文織では、経3枚綾地の報告例が多いが、献納宝物の例は平地である。桐文や菊文などの小さく可憐な文様を段状に重ねている。

(3) 緯六枚綾地緯六枚綾文錦

紅地花唐草文錦 (No.85) の1例が確認された。

一本の経糸で、地、文様ともに緯六枚綾を織り出している。奈良時代(唐代)までの複雑綾組織緯錦、平安時代(宋代)の準複雑綾組織緯錦を経て、鎌倉時代以降の日本では準風通様緯錦が織られたとされる。これは、地経と地緯、絡経と絵緯がそれぞれに組織し、一部が二重の織物となっている組織である。しかし紅地花唐草文錦では、1本の経糸が文様も地も織り出した一重の織物となり、織技術としてはさらに簡略化が進んだものといえる。同じ組織の錦として、熊野速玉大社御神宝の赤地桐唐草文錦(明徳元年(1390)奉納)が報告されている⁽¹⁴⁾。献納宝物の紅地花唐草文錦も先行報告では鎌倉時代とされるが⁽¹⁵⁾、制作年代は室町時代まで下がる可能性が高い。(廣谷)

まとめ

以上、法隆寺宝物館に所蔵される錦類の概要を記した。従来、6~7世紀、日本における飛鳥時代の錦は経錦が主流である一方、8世紀前半、奈良時代の錦は緯錦が主流となると考えられてきた。その大きな傾向は中国において隋時代までの錦が経錦であるのに対し、盛唐時代には緯錦が主流になる動きと一致する。東アジアにおける錦の傾向ではあるものの、一言で経錦、緯錦、と分類しても、詳細には地組織の違い、紋緯の入れ方などに多様な組織があ

り、経糸と緯糸の撚りの有無、精練の風合い、糸の太さなどによって、単純には語れない。飛鳥時代から奈良時代の織物については、織の構造や文様が中国や朝鮮半島などの影響が色濃いことから、その多くは日本産ではないという考え方があった。同時代以降の日本の錦の後退・発展の歴史を考慮すれば、そのような考え方にも一理ある。しかし、法隆寺に伝来する飛鳥時代から奈良時代の錦の傾向を俯瞰的にながめると、織成のあり方、織幅、糸質(撚・精練など)、色糸の傾向、それらの結果から表出される織物の風合いなどの点において、日本産の可能性が想定される。本調査を基盤として、改めて東アジア地域における日本の錦の位置付けを考察することが、今後の課題となろう。(小山)

注

- (1) 東京国立博物館編『法隆寺献納宝物 染織I——幡・褥——』便利堂、1986年。
- (2) 澤田むつ代『上代裂集成』中央公論美術出版、2001年。
- (3) 廣谷妃夏「法隆寺伝来〈赤地獅子鳳凰円文錦〉及び〈赤地格子連珠花文錦〉の制作年代再考——東部ユーラシア染織品との比較から——」『美術史』193冊、美術史学会、2022年。
- (4) 東野治之「朝霞錦考」『遣唐使と正倉院』岩波書店、1992年。
- (5) 横張和子「魏志倭人伝の異文綿をめぐって」『古代オリエント博物館紀要』第14号、古代オリエント博物館、1993年。
- (6) 佐々木信三郎『日本上代織技の研究(川島織物研究所報告 第二報)』川島織物研究所、1951年(新修版1976年)。
- (7) 廣谷妃夏「〈研究史〉中国「経錦」研究の百年」工芸史研究会編『工芸史』1号、南方書局、2024年。
- (8) 横張和子「経錦技法の理論的考察」『古代オリエント博物館紀要』第9号、古代オリエント博物館、1987年。
- (9) 武敏「新疆出土漢——唐絲織品初探」『文物』1962(7-8)、文物出版社、1962年。
- (10) Zhao Feng, Weaving Methods for Western-style Samit from the Silk Road in Northwestern China, *Riggisberger Berichte* Vol.9, Riggisberg, Switzerland: Abegg-Stiftung, 2006, pp.189-210.
- (11) 田中陽子「繡線鞋に関する一考察」『正倉院紀要』第32号、宮内庁正倉院事務所、2010年。
- (12) 沢田むつ代「法隆寺献納宝物の広東裂——その分類および絵画・彫刻等からみた文様の伝播について——」『MUSEUM』667号、東京国立博物館、2017年。
- (13) 注12と同じ
- (14) 西村兵部『紋織 日本染織藝術叢書』芸艸堂、1975年。
- (15) 東京国立博物館『法隆寺宝物館』、東京国立博物館、1999年。

圖 版

類錦

1 茶地雑色経縞裂 I-336-86

1片

25.6×16.8cm

絹製、平組織

経糸：甘いS撚、練糸か。地経は淡茶（0.56mm）、色経は現存部では8色確認できる。

①紫（0.70mm）、②藍（0.67～0.89mm）、③赤（0.44～0.61mm）、④淡紅（0.61mm）、⑤黄（0.59mm）、

⑥橙（0.68～1.11mm）、⑦白（0.49～0.62mm）、⑧藍（S撚、0.19mmほどの糸を5～6本合わせた糸。藍の染めは浅い。0.66～0.77mm）

緯糸：全体は甘いS撚りであるが、一部に強い撚りにより縮れる部分あり。練糸。

①淡茶（0.63mm）、②緑茶（0.52mm）

密度：経15本/1cm、緯15越/1cm。糸込みはほぼ経緯一定。

文丈：なし

文様幅：なし

組織備考：一辺が織耳となる。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告138頁（2018年）

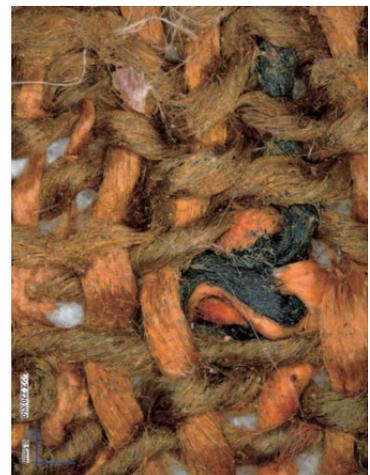
淡茶と緑味のある茶の糸を緯糸に用い、経糸に種々の色を用いることにより経縞を表わした断片である。縞の間隔は一定ではないが、おおよそ地経2本から5本ほどを空けて色経を挿入し、地経と同様に緯糸と平に交差する。この経糸は、異なる色糸を機結びで短く繋ぐことによって、節の目立つ斑状の縞となり、全体におおらかな風合いを与えている。織耳に補強のための処理はなされていない。使用状況不明。



I-336-86

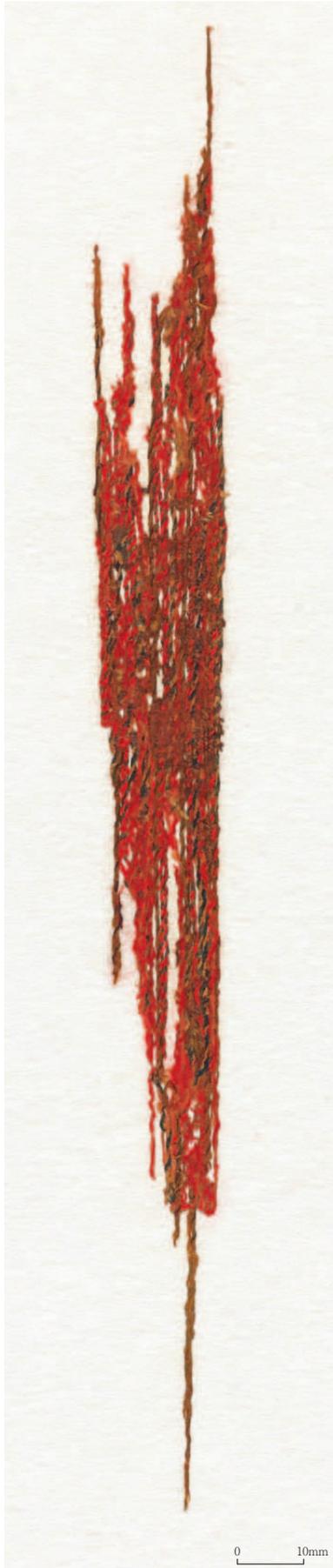


顕微鏡画像（×20）織耳、機結び部分



顕微鏡画像（×50）機結び部分

2 雑色空糸平織 I-336-56



I-336-56

1片

2.0×22.5cm

絹製、平組織

経糸：S撚の色糸を撚り合わせ、Z撚の空糸とする。練糸。

①浅葱と赤（2本ずつ4本。太さ0.64～0.70mm）

②浅葱と白（4本と1本。0.60mm）

③淡緑と黄と濃茶（1本ずつ3本。0.76～0.80mm）

④赤と淡紅（1本と2本。0.74mm）

⑤藍と白（2本と1本。0.85mm）

緯糸：S撚、練糸。茶（0.62mm）

密度：経15本/1cm、緯20越/1cm

文丈：なし

文様幅：なし

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM662（沢田2016年）、科研報告91頁（2018年）

複数色を撚り合わせた空糸と、同程度の太さの緯糸が平組織をなす。さまざまな色を合わせた経糸には明確な配列順は見受けられないものの、顕微鏡画像（×20）からは、経糸①を2本ずつ織り入れて太い縞とし、その間に別色の経糸②～⑤を1本ずつ適宜入れていることがわかる。使用状況不明。



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）

3 雑色空糸平織 I-331-B-27

1片

3.5×7.0cm

絹製、平組織

経糸：甘撚、練糸。S撚の色糸を撚り合わせ、Z撚双糸の空糸とする。

①赤と緑(0.55mm)、②赤と黄(0.62mm)、③青と緑(0.55mm)、④青と白(0.54mm)

緯糸：甘撚、練糸か。茶(0.42mm)

密度：経17.5本/1cm、緯20越/1cm

文丈：なし

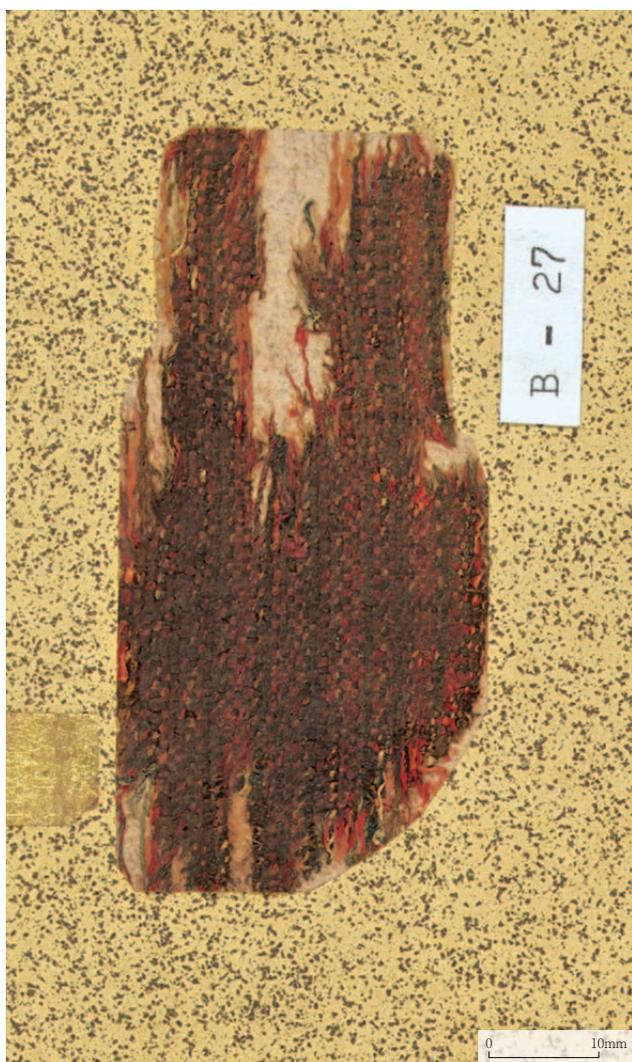
文様幅：なし

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

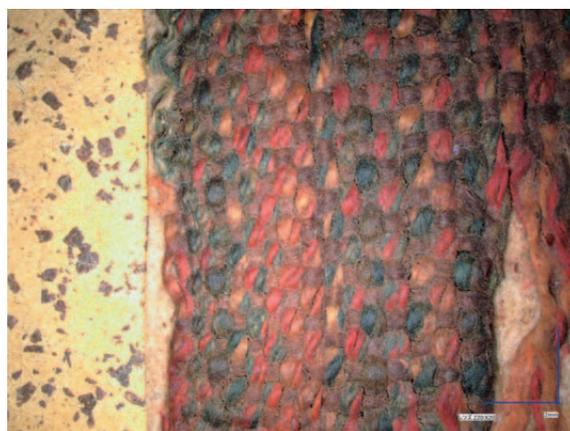
飛鳥時代・7世紀

既刊報告 —

糊の固着により判別しにくいが、2色を撚り合わせた空糸と、同程度の太さの緯糸が密に平組織をつくる。おそらく空糸が経糸と考えられる。顕微鏡画像(×20)では、左端から経糸②を2越、経糸①③②④①③①④を1越ずつ、経糸②を2越入れるという具合で、地といえる緯糸や空糸の規則性は現存断片からは判断できない。使用状況不明。



I-331-B-27



顕微鏡画像(×20)



顕微鏡画像(×50)

4 雑色段織裂 N-319-18/I-336-88/I-331-B-38

一括（1流〈部分〉、1片、1片）

N-319-18：31.0×2.6cm、I-336-88：12.6×8.1cm、I-331-B-38：4.0×6.5cm

絹製、平組織

経糸：甘撫、生糸か。赤（0.14mm）

緯糸：いずれも甘撫、光沢の強く残る練糸。

①紫（0.38mm）

②紫と白の平糸を2本引き揃えにした糸（0.51mm）、③紫と緑（0.82mm）、④紫と黄（0.83mm）、

⑤紫と浅葱（0.80mm）、⑥赤と緑（0.84mm）

密度：経20本/1cm、緯10越/1cm

文丈：1.0～1.2cm

文様幅：なし

組織備考：織耳が両辺に残り、約8cmの現存幅が織幅となる。箄目ありか。

飛鳥時代・7世紀

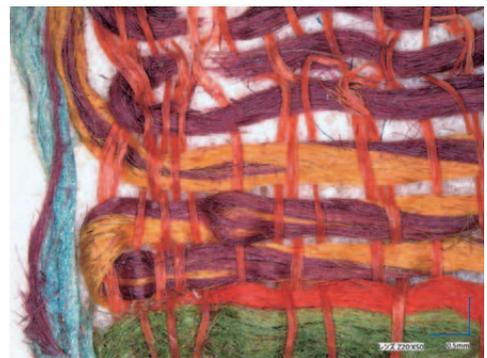
既刊報告 MUSEUM442（沢田1988年）、662（沢田2016年）、科研報告141頁（2018年）

鮮やかな多色の緯糸を、規則的な段になるように織り入れた細幅の織物である。No.5と近い配色であるが、段部分の色糸の多くが紫との空糸となる。緯糸①を地とし、概ね5越ごとに緯糸②を2越、緯糸③を5越、地を挟み、緯糸④を2越、緯糸⑥を2越、緯糸⑤を3越、の配色を繰り返す。緯糸を挿入する数が奇数となる部分があるため、色糸の交代による輪奈が両方の織耳にみられる。織耳部分の経糸はやや密度を高めている。

経糸が細いために、中央部と左右織耳部分の折目に沿った欠損が目立つ。「黄地綾幡残欠」（N-319-18）の縁裂に用いられており、仏幡の残欠と考えられる。



I-336-88



顕微鏡画像（×50） 織耳、色糸転換部分



顕微鏡画像（×20） 配色

5 雑色段織裂 I-336-87/I-331-B-11

2片 (各1片)

I-336-87: 9.7×6.1cm、I-331-B-11: 3.2×5.6cm

絹製、平組織

経糸: 甘燃、練糸か。太さにムラあり。

①赤 (0.18mm)

②赤茶～淡茶 (0.39mm、一部赤味が強く残っており、褪紅色か)

緯糸: いずれも甘燃、光沢の強く残る練糸。

①青緑と赤茶 (経糸②とほぼ同色) のS撚双糸の空糸 (0.17mm) を、3本引き揃えとした糸 (0.51mm)

②青と白の平糸を2本引き揃えにした糸 (0.83mm)

③萌葱と赤の平糸を2本引き揃えにした糸 (0.82mm)

④黄と紫の平糸を2本引き揃えにした糸 (0.83mm)

密度: 経20本/1cm、緯糸①部分3本合わせて20越/1cm、緯糸②～緯糸④は2色合わせて緯15越/1cm

文丈: 0.8～1.2cm

文様幅: なし

組織備考: 織耳両辺にあり、約6cmの現存幅が織幅となる。箴目なし。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 科研報告140頁 (2018年)

多色の緯糸を規則的な段になるように織り入れた細幅の織物である。それぞれの緯糸は鮮やかな色彩を保っており、補色関係の色を2色ずつ配して重ねている。柔らかく平織とすることで、特に段文部分の緯糸では自然に糸が捻れ色調が変化し、混色によって紫がかった地に、細波が立つような複雑な色味が生まれている。緯糸①を地とし緯糸②③④、あるいは緯糸②④②の順に織り入れる。経糸の配列には明確な規則性は見出せない。緯糸の転換と挿入は片方の織耳に揃え、その段で使用しない緯糸は織耳部分で遊ばせている。織耳部分の経糸の補強処理はみられない。

このような細幅の織物は、奈良時代の『東大寺献物帳』などにみえる帯紐状の織物、「綺 (かんはた)」にあたとされる。現状では、織耳部分の経糸が部分的に欠失し、織耳の輪郭は一定でない。中央部と織耳から1cm程度の部分に、経糸方向に折目が残り、縁裂か筒状の帯として用いていたものと思われるが、現存断片からは緯糸の確認できない。



I-336-87



顕微鏡画像 (×20) 織耳、色糸転換部分



顕微鏡画像 (×50) 織耳、輪奈部分

6 雑色段織裂 ◎ N-318-4

2片

幅 0.5mm

絹製、平組織

経糸：甘撚、生糸か。淡茶（0.16mm）

緯糸：甘撚・S撚、いずれも練糸。

①淡緑と紅の平糸を2本引き揃えにした糸（0.50mm）

②赤紫と白の平糸を2本引き揃えにした糸（0.45mm）

③黄のS撚単糸2本と藍糸1本を引き揃えた糸（0.57mm）

密度：経40本/1cm、緯糸①部分20越/1cm、緯糸②③15越/1cm

文丈：不明

文様幅：なし

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 —

鮮やかな多色の緯糸を規則的な段になるように織り入れており、類例からみて細幅の織物の一種と考えられる。緯糸①を地とし、概ね8越ごとに緯糸②を2越、緯糸③を2越ずつ交互に入れる配色を繰り返す。

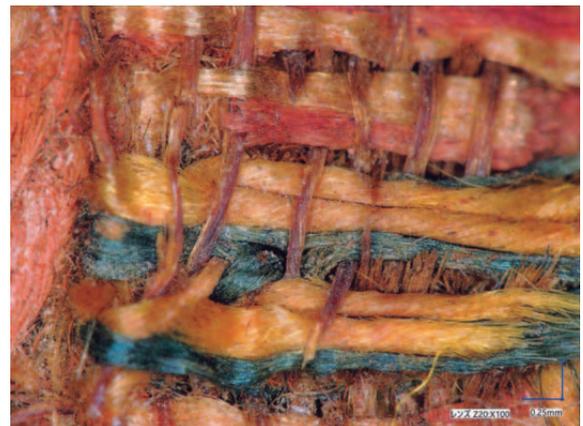
赤地双獅子連珠円文錦を用いた天蓋垂飾の縁裂である。



N-318-4 裏面



顕微鏡画像（×30）



顕微鏡画像（×100） 緯糸③の撚り部分

7 雑色段織裂 I-331-B-13

1片

2.2×7.8cm

絹製、平組織

経糸：甘撫、生糸か。赤（0.08～0.13mm）

緯糸：甘撫、練糸。捻れなく平滑に織り入れる。

①赤（0.46～0.55mm）、②紫（0.34mm）、③白（0.40mm）、④濃緑（0.60～0.75mm）

密度：経30本/1cm、緯糸①～③30越/1cm、緯糸④15越/1cm

文丈：不明

文様幅：なし

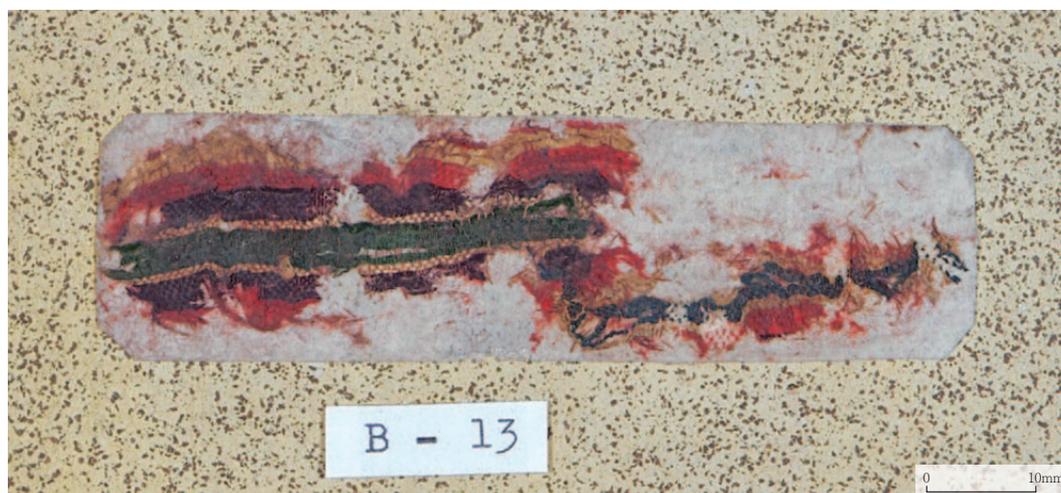
組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 —

緯糸にさまざまな色糸を用いて段文（横縞）を表わしており、類例からみて細幅の織物の一種と考えられる。同種の雑色段織裂のなかでも細い経糸を使い、緯糸の光沢が映える。緯糸②を地とし8越、緯糸①を4越、緯糸③を2越、緯糸④を4越入れる。

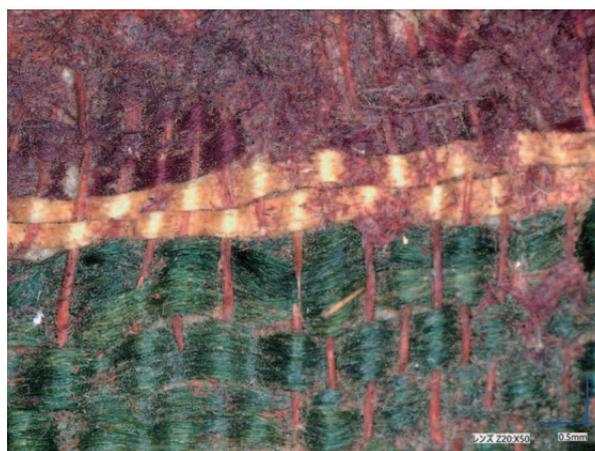
使用状況不明。



I-331-B-13



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）

8 赤地髷文交織裂 ◎N-45 付属／◎N-318-16／I-336-79／I-331-B-63

一括

N-45 付属：測定不能、N-318-16：一括 7.5×9.5cm、

I-336-79：5.0×3.8cm、I-331-B-63：7.2×6.0cm

絹製、平組織

経糸：やや強いS撚、練糸か。

①赤 (1.03mm)、②黄茶 (0.54mm)

緯糸：甘いS撚、練糸か。①赤 (0.78mm)、②淡黄 (0.79mm)、

③白 (0.51mm)、④淡紅 (0.77mm)

密度：経 10 本/1cm、緯 12 越/1cm。

文丈：不明

文様幅：不明

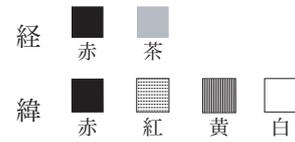
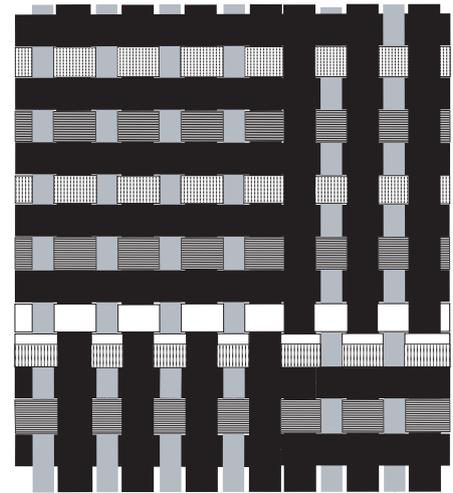
組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代：7世紀

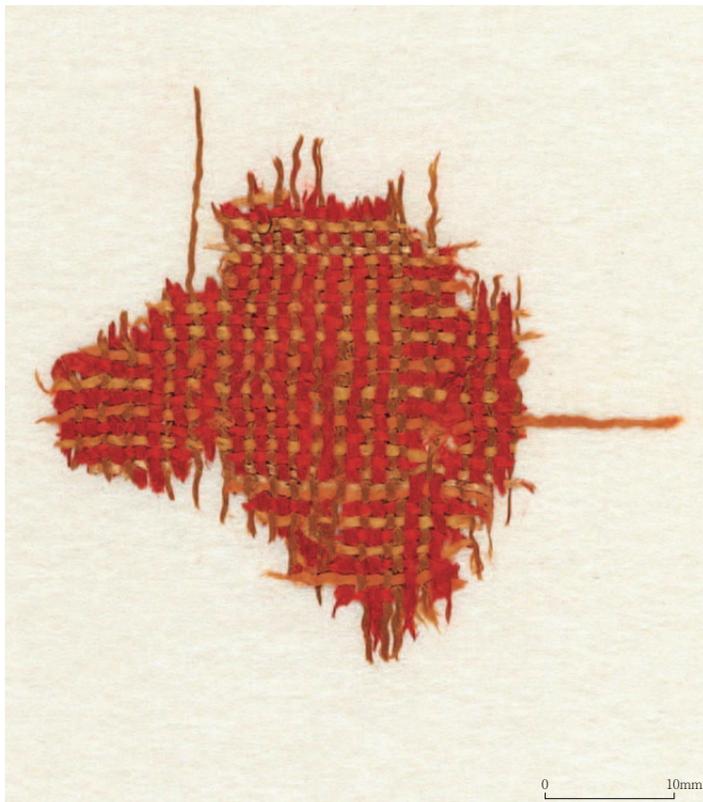
既刊報告 MUSEUM658 (沢田 2015 年)、科研報告 131 頁 (2018 年)

赤、淡黄、白、淡紅の同色調のやや太めの糸を経緯に用いた織物断片である。組織は単純な平織であるが、色糸の配列の工夫によって、白や淡紅などの淡色の糸を格子とし、赤の経糸が目立つ部分（縦縞）と赤の緯糸が目立つ部分（横縞）をつくり、錯覚効果を利用して全体に髷文を表わしている（パターン図参照。赤と淡色を交互に配列し、縦縞、横縞を切り替える格子の部分に淡色の糸を続けて配列する）。

正倉院宝物にやや大きめの類裂あり（古屏 61-6 ①）。使用状況不明。



縦縞・横縞パターン図



I-336-79



顕微鏡画像 (×20) (経糸方向↔)



顕微鏡画像 (×20) 縦縞、横縞切替え部分 (経糸方向↔)

9 白地山菱文錦 ◎N-42

1枚

98×74cm

絹製、平地浮文錦

経糸：S撚、練糸か。白(0.19mm)

緯糸：いずれも甘撚、練糸。

地緯①白(0.31mm)

絵緯②黄(0.30mm)、③紅(0.25~0.41mm)、④青(0.25~0.36mm)、⑤緑(0.22~0.34mm)、

⑥白茶(0.33~0.52mm)、⑦紫(0.35mm)

密度：経45本/1cm、緯は2本まとめて15越/1cm

文丈：(A) (B) および (A') (B') の段は各0.8cm、(C) (D) の段は1.0cm

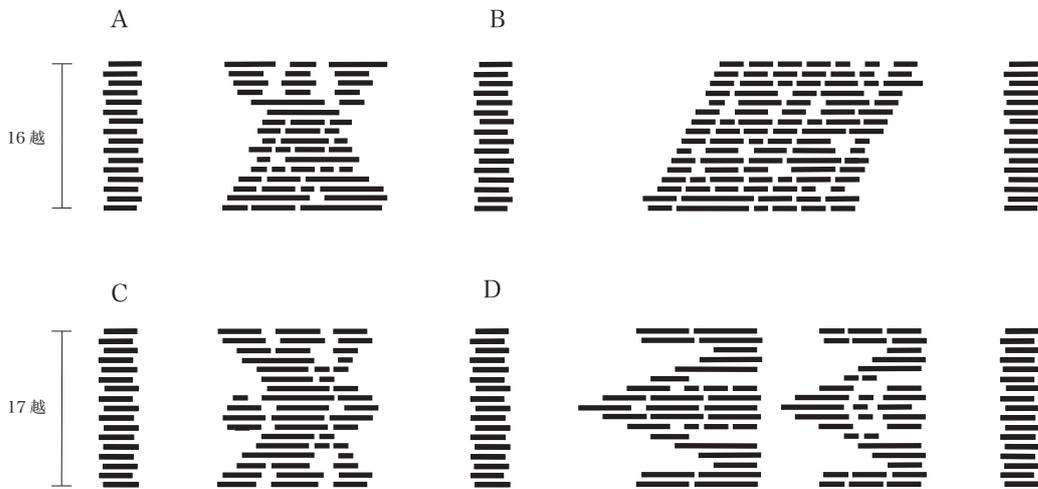
文様幅：(A) (C) の列は各1.6cm、(B) (D) の列は各2.6cm

組織備考：織耳なし。箆目なし。織幅不明(一枚の最大現存幅48.5cm)。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 研究図録27(1986年)

白地に色糸を浮かせることで、幾何学的な文様を織り出した浮文織の一種である。地緯とともに絵緯を同じ杼口に織幅いっぱい織り入れ、文様を表わす部分のみ絵緯を地組織より浮かせる。文様要素ごとにみると(A) (B) の段、文様を経糸方向に打ち返した(A') (B') の段、(C) (D) の段の3種がみられる(文様略図参照)。2座の(D)山岳文、また3本の斜線の中に菱文を納めた(B)が山道のように蛇行し、その隣に縦線を挟んで(A) (C) のX字形の文様を並べる。紋上げの誤りと考えられる変則的な浮きが、経糸方向に繰り返される部分がある。また、緯糸方向に連なる同じ文様要素においても緯糸の浮き方が異なる部分があり、文様は都度色糸をすくい上げたものではなく、事前に綜統棒等によって織幅分の紋綜統を整えていたと考えられる。(A) (B) の段では16越、(C) (D) の段では17越分の緯糸が用いられており、(A') (B') の段では、(A) (B) の段の綜統を逆に使うとすれば、紋綜統は最低33組必要となる。現状は中央で2枚接ぎとなり、縫合痕からみて、本来は正方形の褥の表裂として用いられたことがわかる。



文様略図



N-42 部分



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

10 赤地山菱文錦 ◎ N-26-1・2/N-46-3-1~4/◎ N-318-5/I-331-B-37

一括

N-26：幅 2.9cm、N-46-3-1：77.5×16.9cm、N-46-3-2：35.4×16.2cm、25.6×15.5cm、N-46-3-3：59.5×15.4cm、
N-46-3-4：32.0×4.2cm、N-318-5：17.0×0.8cm、I-331-B-37：13.0×13.5cm

絹製、平地浮文錦

経糸：強いS撚、光沢の強い練糸。赤 (0.31mm)

緯糸：いずれも甘撚、練糸。絵緯②④⑤は2本引き揃え。

地緯①赤 (0.30mm)

絵緯②赤 (0.40mm)、③緑 (0.23mm)、④浅葱 (0.32mm)、⑤黄 (0.41mm)

密度：経 35 本/1cm、緯は地緯・絵緯まとめて 15 越/1cm

文丈：(A) (D) 1.2cm、(C) (F) 0.8cm、(B) (E) 1.3cm

文様幅：(A) (B) (C) の列 1.2cm、(D) (E) (F) の列 1.5cm

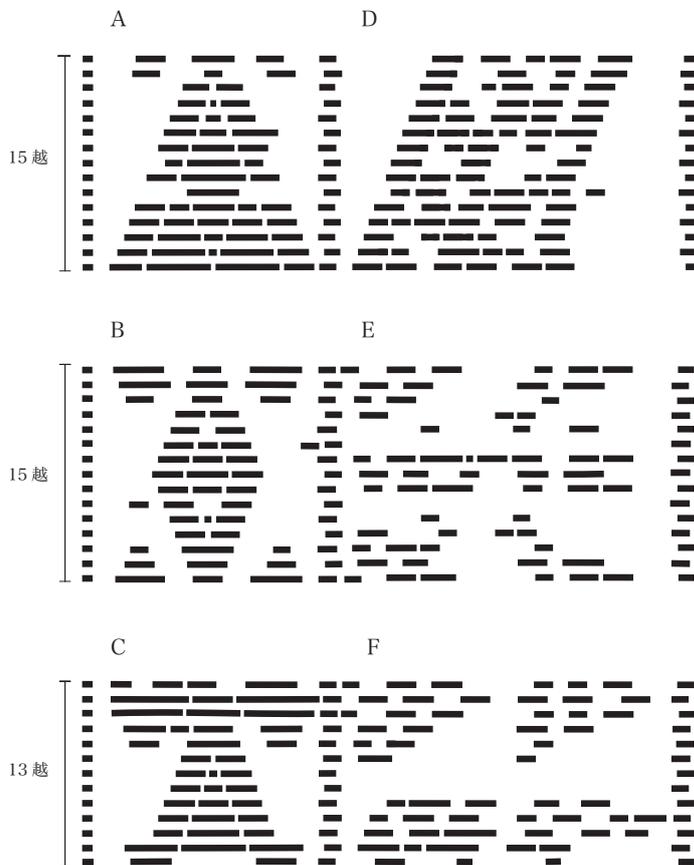
組織備考：織耳あり。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 図録3、4 (1986年)、MUSEUM574 (沢田2001年)

赤地に色糸を浮かせ、幾何学的な文様を織り出した浮文織の一種である。地緯とともに絵緯を同じ杼口に織幅いっぱいに入れ、文様を表わす部分のみ絵緯を地組織より浮かせる。裏面を見ると、赤地の平組織が目立ち、平地浮文錦の構造がわかりやすい。白地山菱文錦 (No.9) に類するが、文様要素の種類は多く、一段の文様を上下対称に打ち返すことで、様々な菱文の変化形を織り出している。(A) (D) および打ち返した (A') (D') の段、(C) (F) および (C') (F') の段、(B) (E) の段の三種を経糸方向に繰り返している (文様略図参照)。また、白地山菱文錦では各文様要素の間の縦線も浮文のみで表わしているが、本作例では地経2本分を空けて透かすことによって、絵緯のみを強調して表わしていることが確認された。織耳部分では経糸16本分を、絵緯を浮かさずに密度の高い平織とする。変則的な浮糸が同文様の段で繰り返しみられ、緯糸方向の同じ文様要素においても緯糸の浮きが異なる部分がある。紋綜統はおよそ43組と考えられる。

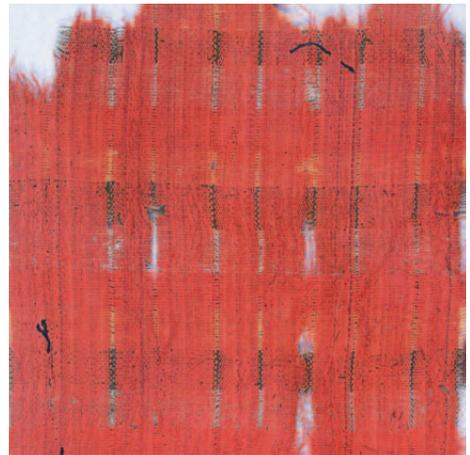
寺伝で「太子／御褥切」とされる、N-46の一群から矩形の断片が発見されている。また、「蜀江錦綾幡」(N-26)では、同種の錦を帯紐状とし、仏幡の掛緒が変化した装飾部である幡頭手に用いている。幅の広いN-46は、この「蜀江錦綾幡」と一具をなす、「蜀江大幡」(法隆寺所蔵)の幡頭手とも考えられる。



文様略図



N-46-3 部分



N-46-3 裏面



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 織耳部分

11 淡茶地入子菱繫文錦 I-336-81/I-331-B-61・64

3片（各1片）

I-336-81：11.5×10.5cm、I-331-B-61：3.5×9.2cm、I-331-B-64：5.8×5.5cm

絹製、複様緯四枚綾地菱文組織

経糸：強いS撚、生糸か。淡茶（0.26～0.41mm）

緯糸：甘撚、練糸か。2本一組（杼二杼）。一杼は2色を引き揃える。

①淡茶か（0.51mm）、藍と淡紅（0.56～0.69mm）

②淡茶か（太さ測定不能）、淡緑と淡紅（0.64～0.78mm）

密度：経30本/1cm、緯25越/1cm

文丈：0.5cm

文様幅：2.2cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告133頁（2018年）

四枚綾風に入子菱の地文を表わす錦である。現状の表面はおそらく織物裏面となるが、引き揃えた2色の緯糸が鮮やかに見える。緯糸の組み合わせは二組あり、色替わりの段となる。

固い風合いの太いS撚の糸は組織経で、2色の緯糸を3越分ずつ越え、経四枚綾のように見える。顕微鏡写真（×50）に示したのは、この組織経とその間に挟まる経糸（芯経）、2色の緯糸と表面に露出する緯糸との交替の様子である。図版左から4本目と8本目の組織経にかかる藍、淡紅の糸の下に、別の淡茶の緯糸が確認でき、表面ではこの淡茶の緯糸が、少なくとも7本分の経糸（組織経・芯経）を越して長く浮いていることとなる（矢印参照）。現在は保存処置のため織物表面の詳細な確認は難しいが、裏面写真を見ると、この淡茶緯糸も入子菱文を形づくっていることがわかる。組織経のみを数えるならば、経3本分を越しているの、やはり表面は緯四枚綾となっているであろう。つまり、芯経が表面と裏面の間に挟まって淡茶緯糸を表面に出し、表面では組織経がこの長い浮きの淡茶緯糸を押さえ、入子菱文をつくる。一方裏面では、2色の緯糸と組織経が密な経四枚綾の入子菱文をつくっている。裏面の2色の緯糸は経糸に対し菱形中央に向かって屈曲して見え、表面では緯糸が並行に段を成しており、表裏の風合いの違いに味わいがある。

菱文の中心から中心までの経糸を数えると、緯糸4越分を1単位の紋綜統として5回繰り返す、6回目の途中で紋綜統を逆に用いているようである。断片中央部に、完全に菱形になり切っていない段がみられるが、繰り返しの途中で紋綜統の操作順を変更したために生じたと考えられる。

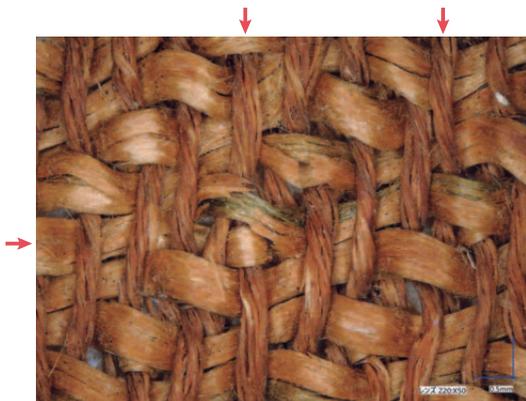
使用状況不明。



I-336-81



裏面（修理前）



顕微鏡画像 (×50)



顕微鏡画像 (×20)

12 淡茶地入子菱繫文錦 I-331-B-68

1片

7.0×16.3cm

絹製、複様緯四枚綾地菱文組織

経糸：S撚、練糸か。淡茶 (0.18mm)

緯糸：甘撚、練糸か。①淡茶 (0.22mm)、②淡茶 (0.26mm)

密度：経 30 本/1cm、緯は 2 本まとめて 10 越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

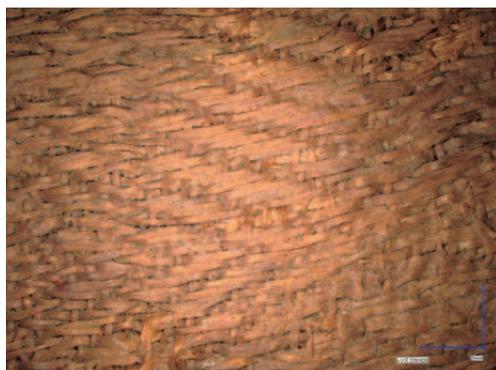
既刊報告 —

裏面は確認できないものの、おそらく No.11 の淡茶地入子菱繫文錦 (I-336-81) と同様の組織で、緯糸がやや長く浮き、入子菱の地文を織り出している。注目されるのは顕微鏡画像 (×50) の中央、上から 3・4 番目の緯糸と経糸が交錯する部分で、現状ではほとんど色の差は判別できないが、緯糸が色交替しているようである (矢印参照)。この色の交替によって、地文とは別に何らかの文様を織り出していたと思われるが、本断片からは判別できない。

使用状況不明。



I-331-B-68



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

13 小整文風通 ◎N-45 付属／◎N-318-52／I-336-80

一括

N-45 付属：測定不能、N-318-52：6.6×0.6、1.5×0.7cm、I-336-80：18.4×2.2cm

絹製、二重織（平地平文風通）

経糸：甘撫、練糸。淡黄（0.20mm）、藍（0.15mm）

緯糸：甘撫、練糸。淡黄（0.20mm）、藍（0.15mm）

密度：経2本合わせて8本／1cm、緯2本合わせて4越／1cm

文丈：0.8cm

文様幅：0.6cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告132頁（2018年）

青と黄の整文を織り出した断片で、経糸と緯糸各色2本ずつを一組として順に配列する。同色の経糸と緯糸同士で平に交差し、表裏で別色の小さな正方形を表わしている。部分ごとに表裏交代することによって整文となる。各正方形部分のみを見ると、袋状の明確な二重組織をもつ、いわゆる平地平文風通であることがわかる。

三角形の舌状の垂飾である黄色纈纈裂の縁裂（N-318-52）に類似のものがあり、I-336-80の左辺に残る赤色の縫合糸や縫合幅もこの裂と一致することから、天蓋垂飾の縁裂とみられる。



顕微鏡画像（×30） 縫合糸部分



顕微鏡画像（×50）



I-336-80

14 緑地目結襷文風通 I-336-78

1片

12.8×14.8cm

絹製、二重織（平地変わり平文風通）

経糸：甘摺、生糸か。淡黄（0.16mm、2本引き揃え）、淡緑（0.10mm、1本）

緯糸：甘摺、練糸。淡黄（0.18～0.29mm）、淡緑（0.23mm）

密度：経2本合わせて8本/1cm、緯2本合わせて4越/1cm

文丈：0.7cm

文様幅：1.1cm

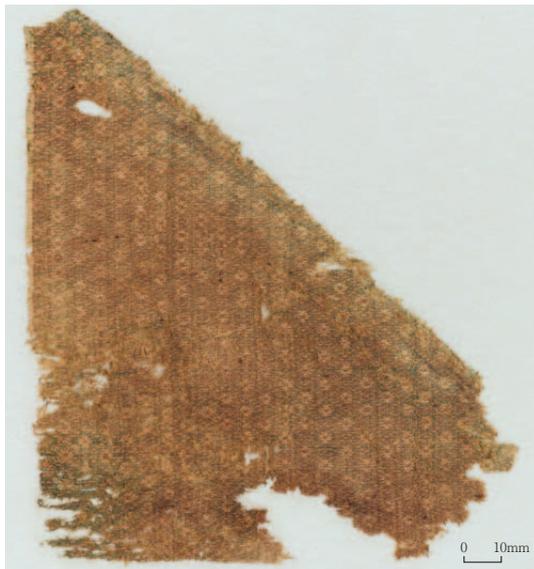
組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

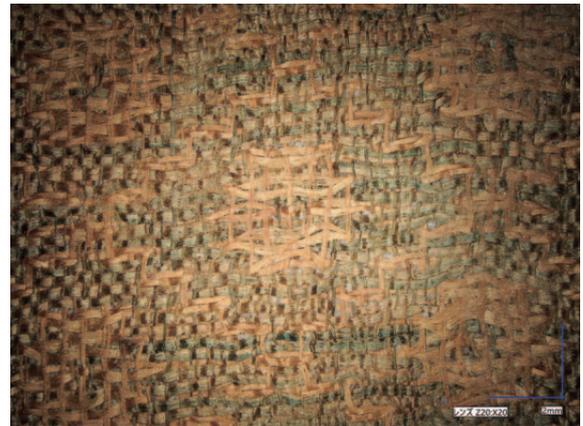
既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告128頁（2018年）

中央に目結文をこめた襷文を織り出した断片で、淡黄の糸同士、淡緑の糸同士が表裏両面で平に組織する。二重織の一種で、地（淡緑）も文（淡黄）も同じ平組織とする。ただし、No.13の小髷文風通（I-336-80）と比較して、文様の輪郭部分が地の経緯の交差と入れ子になる点など、完全には両面の糸遣いとはなっていない。両面共に、経糸2本ずつが一組となり、平に交差するが、淡黄の経糸が2本引き揃えのまま緯糸と交差し、淡緑の糸は1本ずつ緯糸と交差するために、淡黄の糸が1回交差する間に淡緑の部分では2回交差していることとなる。したがって、淡黄色の部分のみ、糸が倍に長く浮いているように見える。これにより、現状の面を表面とすると、目結文の輪郭線や丸文のみが質感の差によって際立って見え、浮文織のような効果が生まれている。

三角形の断片で、長辺部分に赤色縫合糸が残存する。使用状況不明。



I-336-78



顕微鏡画像（×20）



I-336-78 裏面（修理前）



顕微鏡画像（×50）

15 縹縹縹地花文錦 I-336-44

1片

11.3×15.0cm

絹製、経三枚綾地緯浮文織

経糸：いずれも甘撚、練糸。

①白 (0.29mm)、②淡紅 (0.25mm)、③赤紫 (0.20mm)

緯糸：甘撚、練糸。藍 (0.25mm)

密度：経 35 本/1cm、緯は 2 本まとめて 10 越/1cm

文丈：8.0cm

文様幅：4.8cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 科研報告 78 頁 (2018 年)

先染の糸を用いた複数色の織物であるため、本書では錦に含めて報告する。経糸に3種類の風合いの異なる糸を順に用いることで縹縹調の縹をつくり、さらに緯糸と三枚綾に交錯させ地を織り出している。白地縹にみえる面が恐らく織物表面で、左流れ(↖)の経三枚綾とし、部分的に藍の地緯糸を露出させることで遠文に四弁花文を織り出している。したがって、四弁花文部分は地とは異なり、規則的な糸の浮きとはなっていない。

使用状況不明。



I-336-44



顕微鏡画像 (×20) 四弁花文



I-336-44 裏面 (修理前)



顕微鏡画像 (×50)

経錦・緯錦

16 淡緑地輪繫文錦 ◎ N-45 付属/N-313-1・2/I-336-68/I-331-B-73

一括

N-45 付属：測定不能、N-313-1：16片。14.5～60.5×2.6～14.6cm、N-313-2：20片。4.2～36.5×1.3～5.5cm、I-336-68：28.0×4.0cm、15.4×7.8cm、6.1×9.6cm、I-331-B-73：20.4×4.0cm。

絹製、複様綾組織経錦

経糸：ややS撚の糸とややZ撚の糸が交互となる。練糸。5色一組。一部、白が2本ずつ入り6本一組となる。柔らかな風合いながら非常に密な経地合で、緯糸はほとんど露出しない。

- ①紫 (0.20mm)
- 紅 (0.19mm、現在はほぼ紅が褪色し黄味の強い香色となる)
- 青 (0.15mm)
- 緑 (0.17～0.32mm)
- 白 (0.14～0.24mm)

緯糸：甘撚、生糸か。淡茶 (0.18mm、2本引き揃え、生染か)

密度：経60組/1cm、緯30越/1cm

文丈：8.6cm (対称軸4.3cm)

文様幅：9.4cm

組織備考：N-313-2に織耳あり、端に2色の色帯による補強装飾処理あり。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

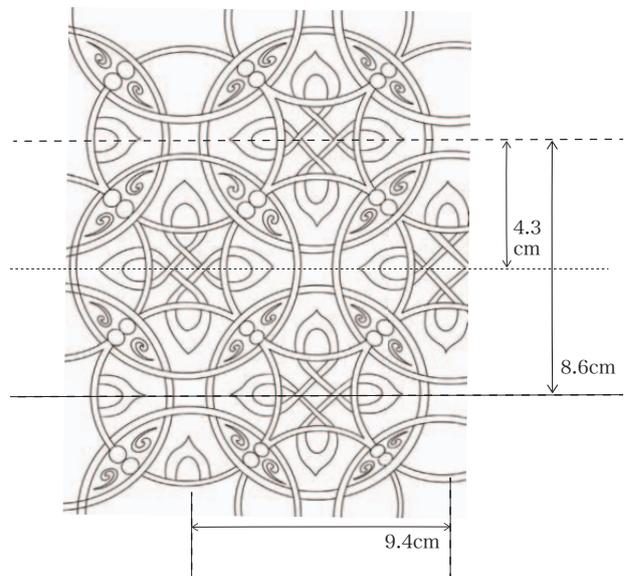
既刊報告 MUSEUM574 (沢田2001年)、655 (沢田・三田2015年)、科研報告112～113頁 (2018年)

7世紀以降に多くみられる綾組織経錦の組織で、大小二種類の円文の一部を重ねてつなぎ、内部に様々な文様を収めた複雑な構成をとる。組織緯と経糸一組が右流れ(ノ)の三枚綾地となる。文様の1単位は文様略図の通りである。大円文の重なる弧を留めるように、小円文の線が交差し、小円文同士の結節点を連珠2箇とする。間に雲文を逆向きに入れ、大円文の外周を接点とする菱形に、編紐十字文を配している。織耳部分では、文様部のような複数色の組の経糸は用いず、青(2mm)と白(5mm)の単色の色帯とし、さらに連珠文を配している。

正倉院宝物に含まれる類裂に関する報告では、経糸は6色一組であり、紫地部分の雲文は白、円の輪郭線の地は白茶と指摘された(佐々木1959年)。今回の調査で確認した当館所蔵断片では、輪郭線の地と雲文いずれも、褪色の少ない部分でははっきりとした白を呈すことから、この色差を明確に確認することができなかった。しかし、顕微鏡画像(×50、文様輪郭部分)では、表面の色糸が欠失した部分に、褪色した紅を含めた淡色の3本が露出し、まとまって組織緯を越している部分が確認できる。白糸2本を入れ、確かに経糸を6本一組としている。経糸が交替する部分の多くは、経錦の通例通り、隣の経糸の組の同色の糸と2本一組で表出している。ただし、紫と白糸が交替する部分(雲文)のみ、紫と白が1本ずつ交替しているように見え、やや特異な配列である。本作例では青が文様の輪郭線をつくり、緑・紅・白・紫の各色に接している。仮に糸が交替しやすいよう、青を中心に接する面積が大きい順に経糸を配列する場合、緑/青/紅/白/紫の順となる(顕微鏡画像(×50文様輪郭部分)の色糸の配列と一致する、矢印参照)。雲文のある部分のみを経糸方向にみていくと、上から緑、青(輪郭線)、白(輪郭の地)、青、紫(紡錘形の地)、白(雲文)、紫、青、白、青、のように白糸が頻繁に現れる。この交替を簡便にするために、上記の色糸に白糸を1本足していたと推測される。

具体的な使用状況は不明であるが、N-313-2には赤と紺の強い撚糸を緯にした縁飾りが残る。

参考文献：佐々木信三郎「正倉院錦綾に見る特異技法の一考察(三)」『書陵部紀要』第11号、宮内庁書陵部、1959年



文様略図



N-313-1 部分拡大



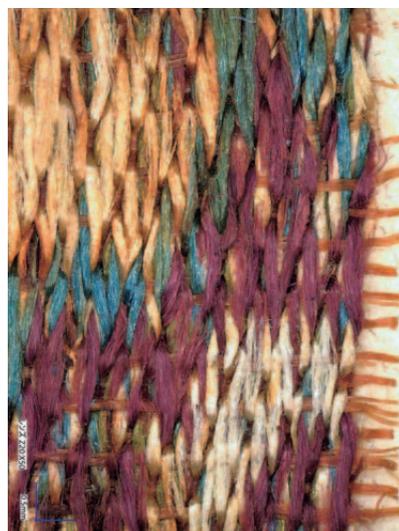
顕微鏡画像 (×50) 文様輪郭部分の糸交替



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分



顕微鏡画像 (×50) 文様輪郭部分、表面の紫の経糸が
磨耗し、下の経糸が露出する部分



顕微鏡画像 (×50) 緯糸露出部分

17 縹地連珠櫻花文錦 ◎ N-45-2/I-336-54・55

一括 (11片、1片、1片)

N-45-2 : 11片。18~18.5×1.4~2.7cm、I-336-54 : 16.0×2.0cm、I-336-55 : 14.0×3.0cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、丸みのある練糸。2色一組、3色一組。白糸はやや細く摩滅する。

①青 (0.37mm)、赤 (0.26mm)

②青、白 (0.27mm)、赤

緯糸：甘撚、生糸か。紫 (0.22~0.32mm、生染か)

密度：経 35組/1cm、緯 25越/1cm

文丈：3.0cm (対称軸 1.5cm)

文様幅：3.0cm

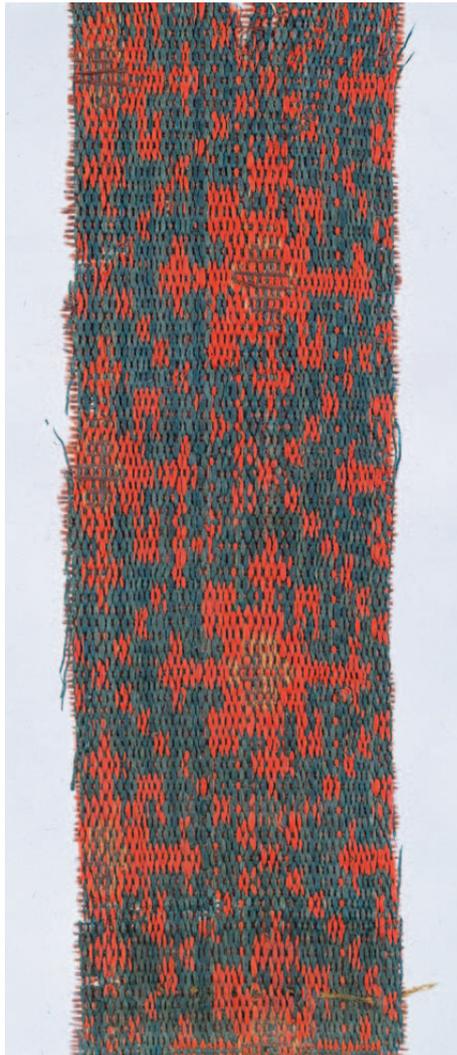
組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6~7世紀

既刊報告 MUSEUM574 (沢田 2001年)、662 (沢田 2016年)、科研報告 92~93頁 (2018年)

襷掛けに連珠文を斜行させてつくった菱形の区画に、八弁花文を納めている。裏面を見ると、花文の中心にあたる部分のみが、経糸②青白赤の3色一組の経糸を用いていることがわかりやすい。この2色一組あるいは3色一組の経糸の色順は、打ち返した配列となっている。単位文様の対称軸までの緯糸の数を数えると16越となる。紋上げの誤りによって、経糸方向に本来の配色とは異なる色糸が点線のように現れる現象が散見されるが、この現象は経錦の特徴である。

いずれも帯状の断片で、半分ほどが擦れて褪色している。I-336-54は中央に縫合痕があり、黄色の縫合糸が残るも使用状況不明。



N-45-2 部分



N-45-2 裏面 (修理前) 部分



顕微鏡画像 (×50) 緯糸露出部

18 茶紫地小花目結襷文錦 I-336-59/I-331-B-17

一括（各1片）

I-336-59：13.8×11.0cm、I-331-B-17：7.3×0.9cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸。2色一組の部分と3色一組の部分あり。

①茶紫（0.32mm）、淡黄（0.18mm）、青緑～淡緑（0.18mm）

②茶紫（0.18mm）、白（0.17mm）、赤（0.13～0.18mm）

③茶紫（0.20mm）、白（0.19mm）

緯糸：甘撚、練糸か。淡茶（0.17～0.21mm）

密度：経60組/1cm、緯25越/1cm

文丈：4.2cm（対称軸2.1cm）

文様幅：2.3cm

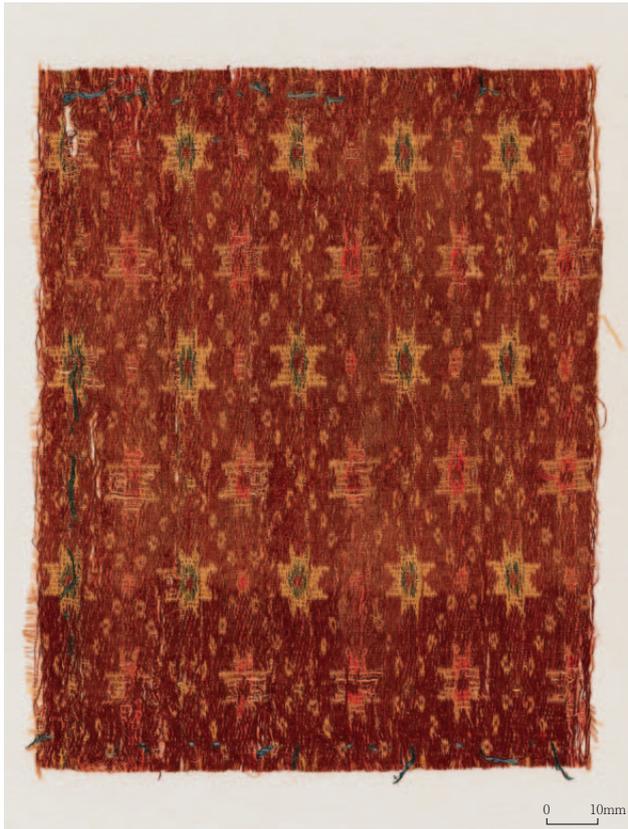
組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告98～99頁（2018年）

纈纈の結び目のように見える丸文（目結文）を襷掛けのように斜行させ、この菱形の区画のなかに八芒星のような花文を納める。中心部は段ごとに赤と緑の色変わりとなる。裏面を見ると、地の部分は経糸③紫と白の2色、花文の中心にあたる部分のみに、経糸①と経糸②の配色の3色の経糸を用いていることがわかりやすい。糸の細さに対して緯の打ち込みが甘く、全体にややよけた風合いとなっているためやや判別しにくい。本作例の地組織は右流れ（ノ）の経三枚綾地となっている。複様綾組織経錦で頭文緯3本、組織緯2本を越えるため、表に浮く経糸は、緯糸最大5越分浮いているように見える。

四辺が裁ち切られており、上辺、右辺、下辺に青（浅葱～藍）のS撚双糸の縫合糸が残る。使用状況不明。



I-336-59



I-336-59 裏面（修理前）部分



顕微鏡画像（×50）

19 紫地亀甲繫花葉文錦 N-305/I-336-60

一括（4片、1片）

N-305：5.6×49.5cm、6.7×10.3cm、5.6×10.3cm、6.0×14.7cm、I-336-60：9.0×25.0cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。経糸の張りがよく、糸の交替も規則正しい。

①赤紫（0.22mm）、白（0.20mm）、紅（0.16～0.22mm）

②赤紫（0.22mm）、黄（0.22mm）、淡緑（0.21mm）

緯糸：甘撚、練糸か。赤紫（0.25mm）

密度：経40組/1cm、緯30越/1cm

文丈：4.4cm（対称軸2.2cm）

文様幅：5.2cm

組織備考：N-305は両端に織耳が残存、端の補強装飾処理なし。織幅49.5cm。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 MUSEUM574（沢田2001年）、655（沢田・三田2015年）、科研報告100～101頁（2018年）

枠線に連珠を納めた六角形を亀甲のように繋ぎ、パルメット文を十字に組み合わせた四葉文を配した複様綾組織経錦である。表面の経糸は左流れ（ \nearrow ）の三枚綾になっている。花葉文の中心部には経糸②、両端に被さるよう経糸①の組が長斑に用いられる。文丈の短い文様帯を、経糸方向に対称させており、文様の対称軸で打ち返すと考えれば、必要な紋綜統は28組ほどとなる。織耳には、No.16の淡緑地輪繫文錦（N-313-2）にみられた色帯による処理はなく、織耳の最も端の部分が単位文様の対称軸（花葉文の縦軸）にあたり、その他の部分と同様の3色一組の経糸を用いている。

正倉院にも同種の錦がのこる。I-336-60の中央部に折目があり、長辺に濃紫の縫合糸（S撚双糸）が残存する。縁裂とみられるが、具体的な使用状況は不明。



N-305



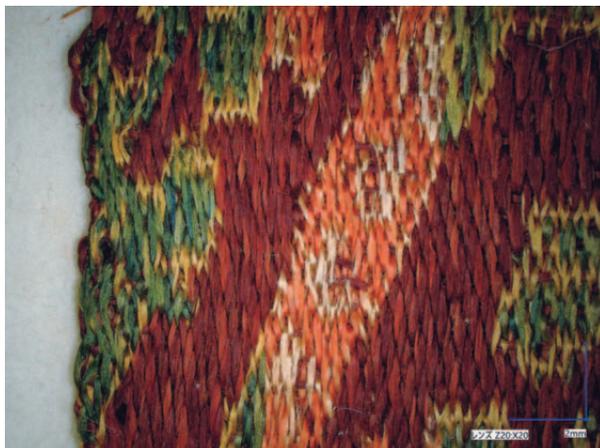
N-305 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経糸①②、緯糸露出部分



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分

20 緑地蓮華入連珠亀甲繫文錦 I-331-B-86

1片

15.8×21.5cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：S撚、いずれも練糸か。4色一組。やや細く丸みのある糸。

①緑(0.19mm)、紅(0.24mm)、白(0.18mm)、紺(0.16mm)

緯糸：甘撚、練糸か。紅(0.22mm)

密度：経60組/1cm、緯30越/1cm

文丈：3.2cm(対称軸1.6cm)

文様幅：5.8cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 —

亀甲文の区画に、連珠文をめぐらせた六弁花文をこめた経錦である。No.19の紫地亀甲繫花葉文錦とは異なり、全体に4色一組の経糸を用いており、亀甲文の輪郭線に配列した4色の小さな連珠が可憐である。経糸は組織緯と左流れ(ノ)の三枚綾地を成す。糊の固着によりややわかりにくいだが、緯糸に対し経糸が細いものの、よろけが少なく経糸方向の糸の張りがよい。経糸がはっきりS撚を呈す点は、法隆寺伝来の綾組織経錦のなかでは珍しい。使用状況不明。



I-331-B-86



顕微鏡画像(×20)



顕微鏡画像(×50) 経糸の交替

21 雑色変り罽花文錦 I-336-61/I-331-B-10

一括（各1片）

I-336-61：12.0×10.2cm、I-331-B-10：7.9×8.8cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸とみられるが、やや瘦せた糸である。4色一組、3色一組。

①紫（0.24mm）、黄（0.16～0.21mm）、青緑（0.13～0.20mm）、赤（0.16～0.24mm）

②紫（0.15mm）、白（0.17mm）、青緑（0.20mm）

緯糸：甘撚、生糸か。茶（0.16mm、生染か）

密度：経50組/1cm、緯35越/1cm

文丈：7.5cm（対称軸3.8cm）

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 MUSEUM658（沢田2015年）、科研報告102～103頁（2018年）

2種類の花文と、小罽文を組み合わせて大きな罽文とする。経糸一組は組織緯と左流れ（ㄣ）の三枚綾組織となる。文様の輪郭線は明確ではなく、緯糸の打ち込みが緩いためか全体に張りが弱くよれてみえる。また、特に色糸が交替する部分で、やや経糸が屈曲しながら裏面に沈む部分がある（顕微鏡画像〈×50〉中央）。おそらく、完全に経糸が打ち返し順に整理されていない部分があることによって、経糸の選択に一部無理を生じているようである。また、一部に緑色の糸が緯糸とともに挿入されている部分がみられた（顕微鏡画像〈×30〉左側）。経糸の組み合わせは裏面を見るとわかりやすい。赤地花文の区画全体と紫地変形花文の中央部を経糸①、その他を経糸②の組み合わせで配列している。

四辺が裁ち切られており、1辺に白の縫合糸（S撚双糸）が残存する。使用状況不明。



I-336-61 裏面（修理前）



I-336-61



顕微鏡画像（×30）三重経部分



顕微鏡画像（×50）四重経部分

22 赤地格子連珠花文錦 ◎ N-26-1・2

2流（部分）

幅 3.6cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。

①赤（0.16～0.26mm）、白（0.16～0.26mm）、濃青～灰青（0.16～0.21mm）

②赤（0.26mm）、黄（0.19～0.27mm）、緑（0.19mm）

緯糸：甘撚、生糸か。淡紅（0.25～0.29mm、生染か）

密度：経 55 組／1cm、緯 40 越／1cm

文丈：5.6cm（対称軸 2.8cm）

文様幅：不明

組織備考：織耳あり、端の補強装飾処理なし。織幅不明。

飛鳥時代・6世紀後半～7世紀前半

既刊報告 図録3、4（1986年）

格子文の中央に蓮華とみられる連珠花文（連珠は20箇、花卉は14枚）を配しており、同じ文様構成の錦（複様綾組織経錦）が、中国新疆ウイグル自治区トルファン近郊のトヨク石窟やアスターナ古墓群、青海省吐蕃墓などから出土している。これらの出土類例を参照すると、連珠花文を挟む蕨手のような文様は、本来は四隅にパルメット文を表わした地の部分であることがわかる。本作例は、法隆寺伝来の錦に含まれる複数の赤地格子連珠花文錦のなかで、最もパルメット文が明確であり、中央の連珠花文も端正である。

緯糸と経糸はほぼ均等な太さで経糸の張りもよい。経糸は、隣あう経糸の一組から、同色2本一組として扱う。連珠花文と格子文に経糸①、パルメット文に経糸②の組み合わせを用いている。表面には、経錦技法に独特の現象である、紋上げ時の経糸選択の誤りにより、経糸方向に点線のように別色が現れる部分が散見される。緯糸方向の格子文の大きさには幅がある。織耳部分では端の色帯処理はなく、やや文様が縮まりつつも格子文の縦線部分を文様の端とする。顕微鏡画像（×50）にこの織耳部分を示しているが、文様がつながるように織耳部分を白糸（Z撚双糸）で縫い繋いでいる。

本作例は法隆寺に伝わる灌頂幡、「蜀江大幡」と一具をなすとされる小幡の縁裂であり、「蜀江広東古切」として献納された。



N-26-1 蜀江錦綾幡



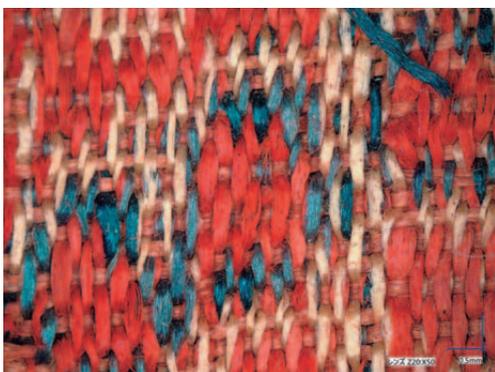
N-26-1 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) パルメット文部分 (経糸②)



顕微鏡画像 (×50) 連珠花文部分 (経糸①)



顕微鏡画像 (×50) 織耳、縫合部

23 赤地格子連珠花文錦 ◎ N-47・47 付属／◎ N-318-2・3／I-331-B-20・30

一括

N-47：354.4×8.0cm、N-318-2：6片、13.0×1.5cm、10.5×1.5cm、12×2cm、10.5×1.5cm、11.0×1.5cm、5.5×1.5cm、

N-318-3：一括 長17cm、I-331-B-20：8.7×4.8cm、I-331-B-30：7.8×6.0cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚で光沢が非常に強く残り、いずれも練糸か。基本的に3色一組。一部に例外的に4色一組であったかと思われる経糸がある。

①赤 (0.21~0.31mm)、白 (0.27mm)、青 (0.27mm)

②赤 (0.21~0.31mm)、黄 (0.22mm)、緑 (0.23~0.30mm)

③赤、黄 (0.15mm)、青

④赤、黄、白、青

緯糸：甘撚、生糸か。赤 (0.23mm、生染か)、茶 (0.21mm、生染か)

带状の折り返し部分の縫合部を境に、緯糸が2種類確認される。

密度：経 50 組/1cm、緯 (赤) 29.5 越/1cm、緯 (茶) 30.8 越/1cm

文丈：3.4cm (対称軸 1.7cm)

文様幅：4.3cm

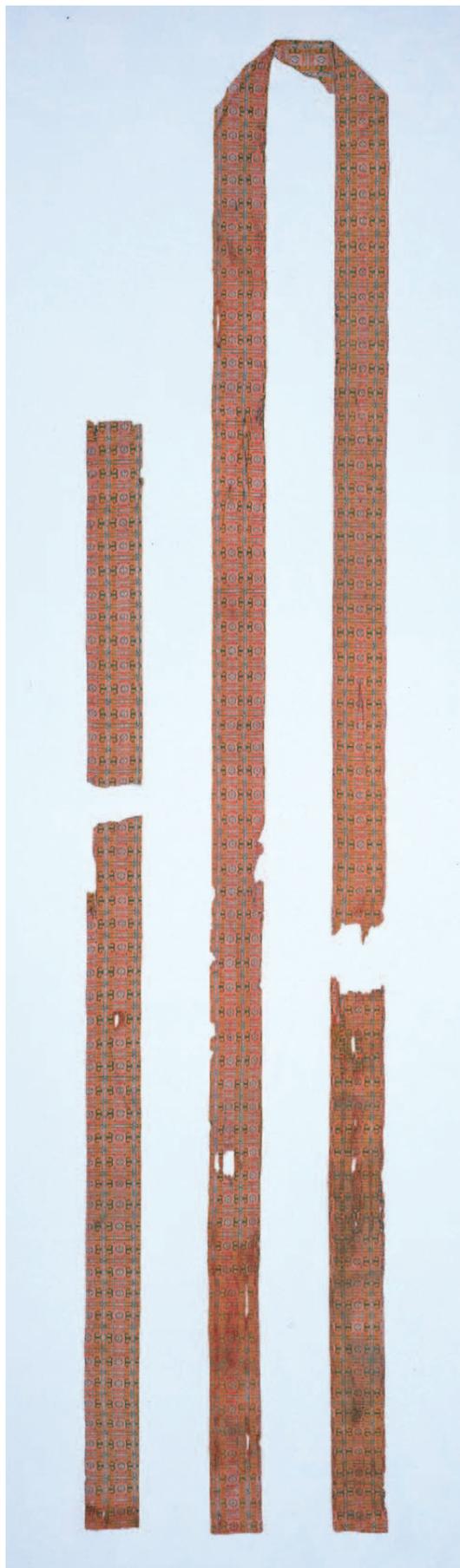
組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6世紀後半~7世紀前半

既刊報告 —

文様は、格子文の四隅にパルメット文を置き、中央に蓮花とみられる連珠花文 (連珠は18箇、花卉は10枚) を置く。同種の格子連珠花文のなかでは小ぶりながらよく文様が整い、経糸の練絹らしい強い光沢もよく残っているが、パルメット文部分の地と文の関係はやや崩れ、蕨手文に近づきつつある。一見すると経糸方向、緯糸方向に同じ文様を繰り返しているように見えるが、図版の2列の格子文のうち、連珠花文中央部を見比べると、経糸方向のみに同じ文様の崩れが見られ、実際の紋綜統の上では緯糸方向の文様は繰り返されていないことがわかる。織図と経糸の配列のずれにより、青糸がパルメット文部分にも一部かかる。基本的には、連珠花文と格子文に経糸①、パルメット文に経糸②の組み合わせを用いる。本調査で、ごく例外的に経糸③ (格子文部分)、経糸④ (連珠花文中央部) の部分があることが確認された。

本作例を用いた「蜀江錦帯」(N-47) は長い袋状に仕立てられており、紅色の縫合糸 (S撚双糸) が残る。また、緯糸を換えて織り出した同種の錦を縫い繋いでいる (全図、折り返し部分)。寺伝では膳妃の下げ帯と伝わるものの、実際の使用状況は不明である。また「善光寺如来御書箱」(法隆寺所蔵) の縁にまわす外張り裂として、パルメット文部分のみが転用されている。



N-47 蜀江錦帯



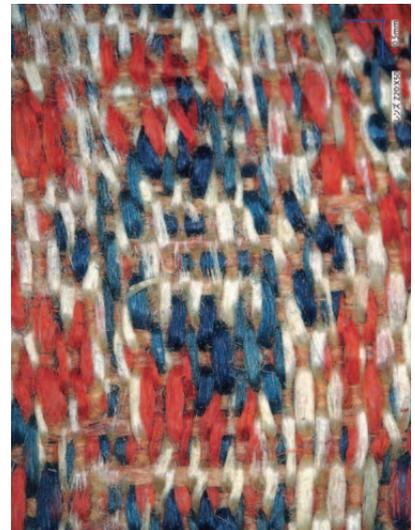
N-47 部分拡大



N-47 裏面 部分拡大



顕微鏡画像 (×20) 経糸①②



顕微鏡画像 (×50) 緯糸 (茶) 部分



顕微鏡画像 (×20) 緯糸④ 部分

24 赤地格子連珠花文錦 ◎ N-318-2/I-331-B-25・28

一括（2片、各1片）

N-318-2：16.3×2.0cm、6.7×2.5cm、I-331-B-25：11.9×8.2cm、I-331-B-28：6.7×5.3cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸とみられる。3色一組。

①赤（0.22mm）、白（0.20mm）、青（0.22mm）

②赤（0.19mm）、黄（0.21mm）、緑（0.22mm）

緯糸：甘撚、生糸か。淡紅（0.22mm、生染か）

密度：経 35 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：5.4cm（対称軸 2.7cm）

文様幅：不明

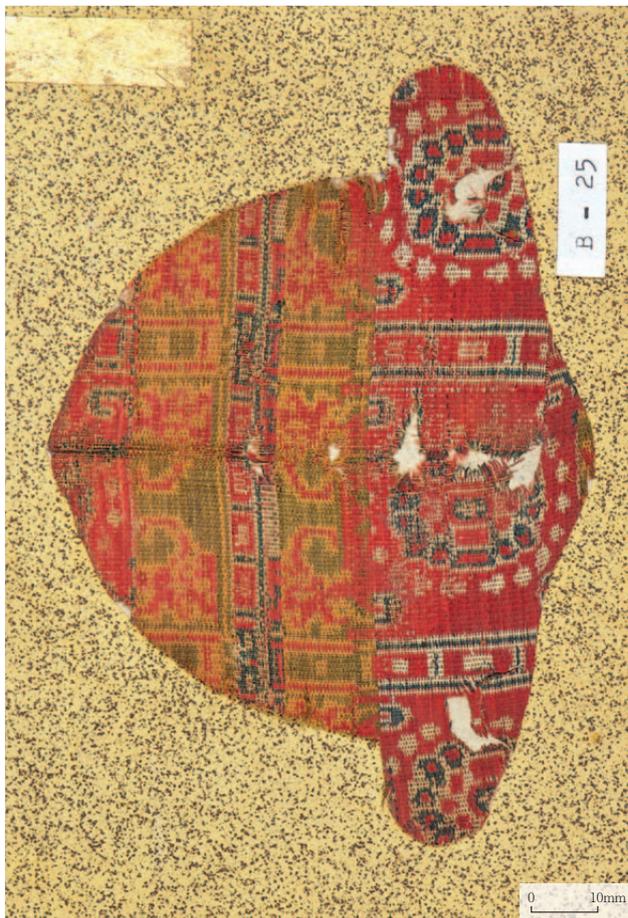
組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6世紀後半～7世紀前半

既刊報告 —

格子文の四隅にパルメット文を置き、中央に蓮華とみられる連珠花文（連珠は20箇、花卉は14枚）を置く。同種の格子連珠花文のなかでは大型で、花文の中央部が緯糸方向に伸び、輪郭が一律でないなど、やや文様の崩れがみられる。

この類型の格子連珠花文錦は、現在額装されている「蜀江大幡」（法隆寺所蔵）の縁裂に用いられたものであり、「善光寺如来御書箱」（法隆寺所蔵）の外張り裂にも転用されている。



I-331-B-25



顕微鏡画像（×50） 経糸①



顕微鏡画像（×50） 経糸②

25 赤地格子連珠花文錦 I-336-53

1片

11.1×1.8cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚でいずれも練糸とみられる。3色一組。糸の張りがよい。

①赤 (0.13~0.33mm)、白 (0.15~0.26mm)、
青 (0.14~0.34mm)

緯糸：甘撚、淡茶 (0.25mm)

密度：経 60 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：5.5cm (対称軸 2.8cm)

文様幅：不明

組織備考：織耳あり、端の補強装飾処理なし。織幅不明。

飛鳥時代・6世紀後半~7世紀前半

既刊報告 MUSEUM662 (沢田 2016 年)、科研報告 90 頁 (2018 年)

赤地格子連珠花文錦の連珠花文部分のみの断片である。連珠花文の連珠は、現存部分から推測すれば 14 箇か。やや文様が縮まり、パルメット文の途中を最端の織耳部分とする。経糸の特徴、連珠花文の花弁の表現、織耳の特徴など、前述の類例とは一致しないため別裂とする。

使用状況不明。

以上のように日本伝世の赤地格子連珠花文錦には、文様の大きさや織耳の特徴、巧拙の異なる数種類がある。本書に掲載した 4 種類のほか、額装の赤地格子連珠花文錦 (法隆寺所蔵) を含め、少なくとも 5 種類が確認される。



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 織耳



I-336-53

26 赤地花入連珠円文錦 ◎ N-45 付属 / I-336-64

一括

N-45 付属：測定不能、I-336-64：16.5×8.8cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸で丸みのある糸。5色一組、4色一組。

①赤 (0.24mm)、白 (0.21mm)、青 (0.19mm)、黄 (0.20mm)、緑 (0.27mm)

②赤 (0.25mm)、黄 (0.26mm)、白 (0.26mm)、青 (0.27mm)

緯糸：甘撚、生糸か。茶 (0.20mm、生染か)

密度：経 40 組 / 1cm、緯 27.5 越 / 1cm

文丈：5.0cm (対称軸 2.5cm)

文様幅：5.5cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 MUSEUM670 (沢田 2017 年)、科研報告 106~107 頁 (2018 年)

四方に重角文のある連珠円文の内部に八弁花文をこめ、四葉文と互の目に配した、緻密で華麗な経錦である。表面では特に白糸の脱落が多くややわかりにくい、裏面をみると、四葉文部分と連珠円文中央部を経糸①の五重経とし、その他の部分を経糸②の四重経としていることがわかる。この経糸一組は組織緯と右流れ (ノ) の三枚綾組織となる。顕微鏡画像 (×50) 中央部をみると、緑の経糸のみ、黄と白の経糸と 1 本ずつ交替しているように見え、やや特異な配列となる。この部分では、経糸二組が青 / 白 / 黄 / 緑 / 赤・赤 / 黄 / 白 / 緑 / 青の配列となっていることが確認でき、打ち返し順を基本としながら、緑糸を例外的に挟んでいる。

本作例は、舌状の三角形を呈し、天蓋垂飾の一部とみられる。縁に沿って縫合痕が残り、色残りもよいことから、元来は縁裂が付けられていたようである。また先端の大きな孔は、金具を垂れ下げた痕とみられる。



I-336-64



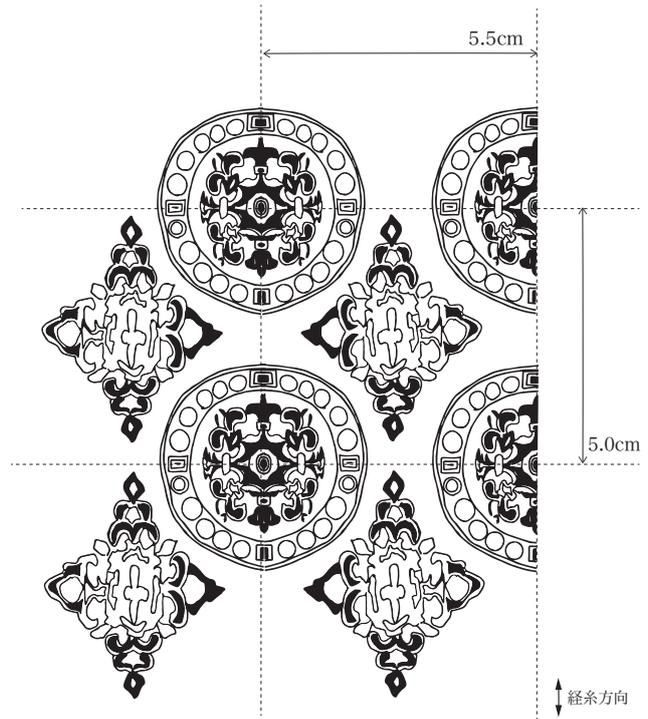
I-336-64 裏面 (修理前)



顕微鏡画像 (×20) 白糸の色残りのよい部分



顕微鏡画像 (×50) 経糸① 五重経部分



文様略図

27 標地花入連珠円文錦 N-318-5

一括

15.5×8.8cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸とみられ、色残りとも光沢がよい。5色一組。

①赤 (0.25mm)、黄 (0.19mm)、浅葱 (0.20mm)、緑 (0.21mm)、白 (0.21mm)

緯糸：顕文緯・組織緯ともに甘撚、生糸か。紅 (0.21mm、生染か)

密度：経 40 組/1cm、緯 40 越/1cm

文丈：5.0cm (対称軸 2.5cm)

文様幅：4.5cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 —

四方に重角文のある連珠円文の内部に八弁花文をこめ、四葉文と互の目に配している。現状では断裂が激しいが、五重の経糸を駆使しながら整然と糸が交替し、文様の輪郭線は非常に明確である。経糸一組は組織緯と左流れ（へ）の三枚綾組織となり、特に浅葱の地の部分では、経糸の立ち上がり角張りが角張り、緯錦のような風合いである。また、赤地花入連珠円文錦と同様に、緑の経糸が白と黄の経糸に対して1本ずつ交替している。経糸二組が赤/白/黄/緑/浅葱・浅葱/黄/白/緑/赤の配列となっていることが確認された。

先の尖った三角形の形状の天蓋垂飾の表製で、下地に茶平絹、縁裂に赤地の平地浮文錦（経：赤色 S 撚 0.31mm、絵緯：緑色 0.38mm）を用いる。



N-318-5 部分拡大



N-318-5 全図



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経系交替部分



顕微鏡画像 (×20) 縁裂

28 赤地花入連珠円文錦 I-331-B-36

1片

9.0×5.2cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：糊の固着によりわかりにくいだが、甘撫の練糸か。3色一組、4色一組。

①赤(0.20mm)、白(0.19mm)、青(0.21mm)

②赤(0.20mm)、黄(0.22mm)、緑(0.26mm)

③赤、黄、緑、白

緯糸：甘撫、生糸か。赤(0.20mm、生染か)

密度：経40組/1cm、緯35越/1cm

文丈：3.6~4.6cm(対称軸1.8~2.3cm)

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 —

連珠円文の内部に八弁花文をこめ、四方にパルメット文を延ばした四葉文と互の目に配している。やや緯糸方向に間延びする部分があり、文丈には幅がある。八弁花文の中央部を経糸③とし4色の経糸を用い、その他の部分を経糸①②の3色の組み合わせを配列する。経糸一組は組織緯と右流れ(↗)の三枚綾組織をつくる。経糸はやや細く、顕文緯の露出が多い。

使用状況不明。



I-331-B-36



顕微鏡画像(×20)



顕微鏡画像(×50)

29 赤地花入連珠円文錦 I-336-52

2片

9.5×2.4cm、9.5×2.0cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘藷、いずれも練糸か。3色一組。

①赤 (0.10mm)、白 (0.15mm)、青 (0.11mm)

②赤 (0.13mm)、黄 (0.16mm)、淡緑 (0.13mm)

緯糸：甘藷、生糸か。淡茶 (0.10mm、生染か)

密度：経 45 組/1cm、緯 40 越/1cm

文丈：4.5cm (対称軸 2.2cm)

文様幅：不明

組織備考：織耳あり、端の補強装飾処理なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

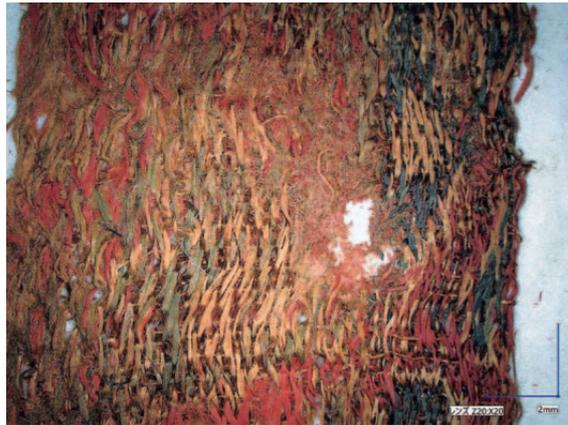
既刊報告 MUSEUM662 (沢田 2016 年)、科研報告 89 頁 (2018 年)

連珠円文の内部に八弁花文をこめ、四方にパルメット文を延ばした四葉文と互の目に配している。同種の文様のなかではやや小ぶりである。緯糸の密度は低くないものの、経糸と緯糸ともにやや細く、全体がよれた風合いとなる。経糸一組は組織緯と左流れ(↖)の三枚綾組織をつくる。織耳部分では文様部分と同じく3色一組の経糸が入れている。

使用状況不明。



I-336-52



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経糸交替、織部分

30 赤地花入連珠円文錦 I-331-B-26

1片

3.5×2.5cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。

赤 (0.18mm)、黄 (0.19mm)、緑 (0.12mm)

緯糸：S撚、生糸か。茶 (0.16~0.19mm、生染か)

密度：経 45 組/1cm、緯 40 越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 —

表面の経糸が脱落し、文様は不鮮明だが、連珠円文の内部に花文をこめている。経糸と緯糸ともにやや細い。経糸一組は組織緯と左流れ（へ）の三枚綾組織をつくる。

使用状況不明。



I-331-B-26



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経糸交替

31 赤地花入連珠円文錦 I-331-B-62

1片

7.5×5.3cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。

①紫(0.15mm)、紅(0.13mm)、緑(0.17mm)

緯糸：甘撚、生糸か。淡茶(0.18~0.20mm、生染か)

密度：経40組/1cm、緯40越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 —

表面の経糸が脱落し、文様は不鮮明であるが、内部に花文をこめた連珠円文が二つ並んでいる。このような花入連珠円文の文様構成は、中国での出土類例は、紀年銘をもつものでは7世紀後半を中心とする。7世紀に盛んに織られたと推測されるが、報告されている例は中国出土品、日本伝世品ともに綾組織経錦であり、本作例のような平組織経錦は稀である。

使用状況不明。



I-331-B-62



顕微鏡画像(×20)



顕微鏡画像(×50)

32 赤地花鳥入連珠円文錦 I-336-65・66

一括（各2片）

I-336-65：16.1×4.3cm、I-336-66：16.6×13.7cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸で丸みのある糸。4色一組、3色一組。

①紫（0.24mm）、黄（0.20mm）、白（0.20mm）、濃緑（0.22mm）

②紫（0.25mm）、黄（0.28mm）、赤紫（0.29mm）

緯糸：甘撚、生糸か。濃茶（0.19mm、生染か）

密度：経40組/1cm、緯30越/1cm

文丈：3.0～3.3cm

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

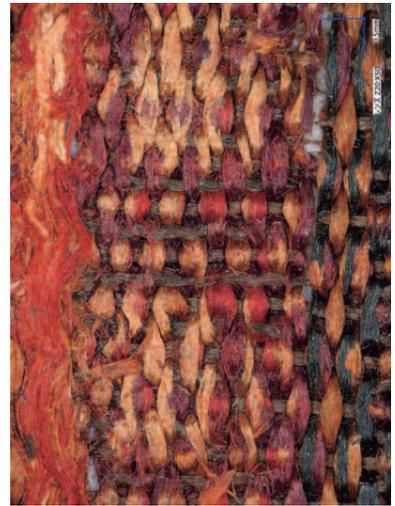
既刊報告 MUSEUM662（三田2016年）、670（沢田2017年）、科研報告108～109頁（2018年）

I-336-65は、連珠を配した文様帯を挟み、連珠円内に鳥文を配し、反対側は樹木を挟み向かいあう鳥文とする。円外には副文として四葉文を半分にした文様を配している。経糸方向に対し、文様の天地を横ざまに織り出している。I-336-66も同様の文様構成であるが、連珠円内に八弁花文を配している。文様の上からは両錦が接続するか不明であるが、糸質などの特徴が一致することから一連の裂である可能性が高い。連珠文の文様帯の部分に経糸②、その他に経糸①を用いる。連珠円内に横向きの鴨様の鳥を表わす点は、7世紀前半ごろの中央アジア産の綾組織緯錦に例がみられるが、平組織経錦による例はめずらしい。

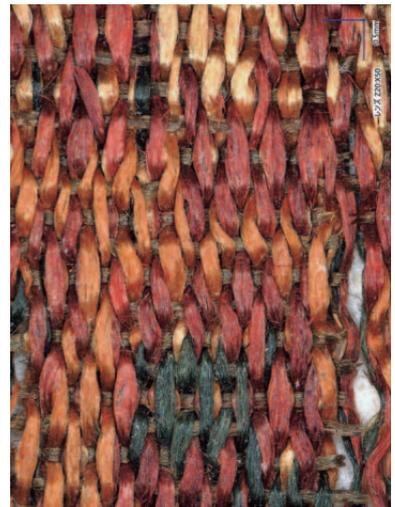
使用状況不明。



顕微鏡画像（×20） I-336-65



顕微鏡画像（×50） I-336-65
経糸②三重経部分、緯糸露出部



顕微鏡画像（×50） I-336-66
経糸①四重経部分



I-336-65

I-336-66

33 赤地双獅子連珠円文錦 ◎ N-318-4

1片

14.2×8.8cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、練糸で丸みのある糸。5色一組。

①赤 (0.27mm)、白 (0.21mm)、青緑 (0.23mm)、
黄 (0.27mm)、紫 (0.22mm)

緯糸：甘撚、生糸か。濃茶 (0.15~0.20mm、生染か)

密度：経 40 組/1cm、緯 40 越/1cm

文丈：5.8cm (対称軸 2.9cm)

文様幅：5.5cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 —

連珠円文の中に向かい合う動物文をこめ、左右に心葉形の文様帯とパルメット四葉文を半分にした文様要素を配している。この動物文は、類裂に対する先行報告では鳳凰とされることもあるが、文様略図に示したようにパルメット文が動物の下方にあるとすれば、両脚を地に付け蹲踞する双獅子文であろう。

経糸は太く丸みをもち、明確な文様の輪郭線をつくりつつ、地の部分では顕文緯との交錯部でやや角張り、一見緯錦のような風合いもある。経糸一組は組織緯と左流れ(↖)の三枚綾組織をつくる。部分的に3色か4色の色帯になっているようにも見えるが、顕微鏡画像(×20、連珠文部分)の中央部を見ると、紫と白糸の下に赤・黄がのぞき、一部青緑色の糸も確認できるので、ひとまず5色一組の経糸としておきたい。

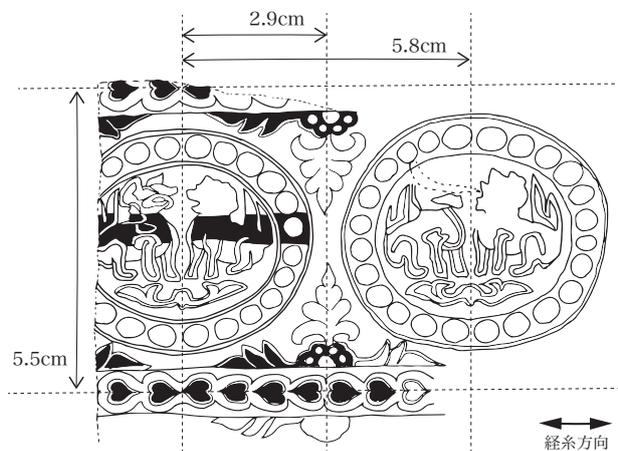
表面に白色の付着物があり、折れ目のついた部分を中心に糸の脱落が激しい。また、本作例は、三角形の舌状を呈する天蓋垂飾の一部である。縁裂は雑色段織裂で、下地は赤平絹を用いている。当館所蔵の正倉院伝来とされるI-337-151~153、また正倉院宝物中の「幢幡残欠」(南倉 165)と同種の錦であるが、「幢幡残欠」に付着する杏葉形金銅金具は、法隆寺に同形の金具が存し、やはり法隆寺系の天蓋垂飾と考えられる。本作例にも先端に孔があり、おそらくこの部分に杏葉形金銅金具を吊り下げていたものと推測される。



N-318-4



顕微鏡画像(×20) 経糸交替、緯糸露出部



文様略図



顕微鏡画像(×50)

34 紅地渦連珠輪違文入双獅子文錦 N-317/◎N-318-10/I-331-B-42

一括

N-317、N-318-10：小断片一括、I-331-B-42：8.8×12.1cm

絹製、複様平組織緯錦

経糸：強いS撚、生糸か。

①顕文経 赤～淡茶 (0.24～0.27mm)

②組織経 赤～淡茶 (0.22～0.28mm)

緯糸：甘撚（平糸）、光沢強く練糸か。3色一組（杼3挺）。緯糸方向の張りが強く、経糸との交錯部分で適度に角張る。

①淡茶（紅、0.31～0.58mm）、白（0.32～0.54mm）、紺（0.24～0.32mm）

②淡茶（紅、0.39～0.52mm）、白（0.33mm）、淡緑（0.38～0.51mm）

密度：経35本/1cm、緯25組/1cm

文丈：不明（連珠円花文部分推定8.8cm）

文様幅：6.4cm（窠間幅：対称軸3.2cm）

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6～7世紀

既刊報告 研究図録19（1986年）

裂帖に貼られた断片（I-331-B-42）は連珠円文の中に、八弁花文を中心とした連珠円花文をこめ、上下をさらに連珠の文様帯で挟んでいる。この錦もとの姿を推測できる資料として、明治時代に描かれた「法隆寺伝来御物図」がある。この図によれば、連珠円花文の下に、渦と連珠で縁取った輪違文を配し、内部に双獅子と樹木文、パルメット文を表わしていたようである。現状では断片となっているN-317とN-318-10にも、この獅子と思しき断片が含まれる。獅子と連珠花円文の部分は緯糸①、渦文部分は緯糸②の配色とする。顕微鏡写真（×50）を見ると、淡茶（紅）／白／紺・淡茶（紅）／白／紺……の順番で色糸が入れられ、3挺の杼を追掛で入れていることとなる。また、太いS撚の顕文経により、緯糸が長方形に張り出し、繊維の方向もよく揃う。織耳は確認できないが、以上の点からみて、緯錦と判断できる。緯錦のなかでも平組織のものは古様の技法であり、毛織物文化圏で発展した。ただし、このように絹で平組織緯錦を織り出す例も、中国南北朝時代にあたる時期の出土品にみられる。輪違文入動物文という文様からも、6世紀後半から7世紀初頭ごろの錦の可能性が高い。平組織緯錦は、日本伝世品では非常に例が少なく、本作品は中国大陸から渡ってきた可能性が高い錦の一つである。

本作品は法隆寺系の仏幡の特徴をもつ、「錦綾幡残欠」（N-317）の第一坪の坪裂と考えられる。



I-331-B-42 連珠円花文部分



N-318-10 部分拡大 獅子文部分



P-609 法隆寺伝来御物図
永井如雲・石本秋園・石原重盈ほか／写
明治時代・19世紀



顕微鏡画像 (×20) 緯糸②



顕微鏡画像 (×50) 緯糸① 色系交替部分

35 淡茶地渦連珠輪違文錦 I-336-74

1片

15.5×32.7cm

絹製、複様平組織緯錦

経糸：強いS撚、生糸か。

①顕文経 濃茶 (0.22mm)

②組織経 濃茶 (0.19mm)

緯糸：甘撚（平糸）、光沢強く練糸か。2色一組（杼2杼）。緯糸方向の張りが強く、経糸との交錯部分は適度に角張る。

①紫 (0.20mm)、淡茶 (0.24mm)

②青 (0.30mm)、淡茶 (0.26mm)

密度：経 35 本/1cm、緯 30 組/1cm

文丈：不明

文様幅：6.3cm（窠間幅：対称軸 3.2cm。組織経 1 本を軸とする）

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6～7世紀

既刊報告 MUSEUM670（沢田 2017 年）、科研報告 122 頁（2018 年）

文様は不鮮明であるが、渦と連珠の二重の輪違文のなかに、菱形を先端部とする文様をこめ、下部には連珠文と小櫛掛文による文様帯を表わしている。緯糸①紫と緯糸②青の段を交互に配し、2色一組の緯糸で文様を織り出した平組織緯錦である。緯糸方向の打ち込みは緩く、間隙から台紙がみえるほどである。顕微鏡画像（×50）を見ると、淡茶（紅）／紫・紫／淡茶、あるいは青／淡茶・淡茶／青の順番に、打ち返し杼で緯糸が入られる。文様は緯糸方向のみに反復している。本作例は No.34 の紅地渦連珠輪違双獅子文錦とともに、日本伝世品のうち貴重な複様平組織緯錦の例である。

使用状況不明。



I-336-74



顕微鏡画像（×20） 緯糸②



顕微鏡画像（×50） 緯糸①

36 双鳥円文木綿裂 N-323/I-331-B-88

一括

N-323：最大片 40.0×47.0cm、I-331-B-88：26.2×20.8cm

木綿製、複様平組織緯錦

経糸：S撚

①顕文経 白（素色か、0.94mm）

②組織経 白（素色か、0.94mm）

緯糸：Z撚、各色 2 本引き揃えとする。2 色一組。

①赤（0.55～1.1mm、2 本で 1.1～2.5mm）、白（0.6～1.3mm、2 本で 1.5～3.0mm）

②青（0.74～1.31mm、2 本で 1.83mm）

③赤紫（0.70～1.4mm）

密度：経 7 本/1cm、緯 4 組/1cm

文丈：各段約 25cm、復元全体文丈 49.2cm

文様幅：19cm（窠間幅：対称軸 9.5cm）

組織備考：織耳あり。S 撚双糸の太糸（1.92～4.0mm）を耳糸として 2 本入れる。両側の織耳が現存するが、織幅不明。

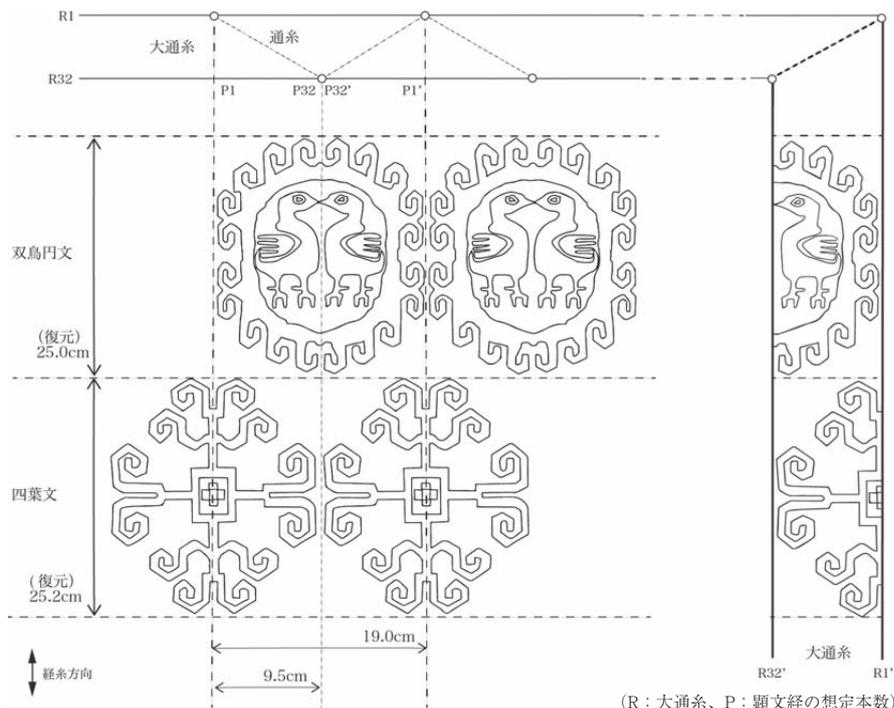
一部に青の緯糸で平織とする部分あり、織始めあるいは織止めか。

飛鳥時代・7 世紀。中央アジア生産か

既刊報告 —

渦円文に双鳥文を配す文様と、四葉文を織り出した木綿製の緯錦である。顕微鏡画像（×50）を見ると、紅／白・白／紅の順番に、打ち返し杼で緯糸を入れている。また復元した各段の文丈から推測すれば、おおよそ経 25cm×緯 9.5cm の縦長の文様単位を、屏風のように緯糸方向に打ち返している（文様略図参照）。現状では全体を通して一致しているかは確認しがたいが、部分的に計上したところ、一つの文様単位に必要な顕文経の本数は 32 本であった。一方、経糸方向には文様が反復せず、二種類の文様段を順に織り出している。このように緯糸方向へ文様を反復させる綜統の仕組みは、羊毛による紋織が行なわれた中央アジア以西で発達したと考えられ、獣毛や真綿の細糸による平組織緯錦が出土品として報告されている。タリム盆地では 5 世紀ごろより木綿生産が行なわれた記録があるが、当地からは木綿製の平組織緯錦の出土例は現在のところ報告されておらず、本作例はユーラシア大陸全体でみても貴重な遺例である。古代日本では木綿生産は根付かなかったため、本作例も大陸からの輸入品であろう。円文内に双鳥文を配す例は、7 世紀中頃の中国生産の経錦にみられ、副文として四葉文を表す点も共通する。円文のなかに対称動物文を表す文様構成は、7 世紀初頭の綾組織緯錦における連珠円文内単独動物文を、経錦の技法で模したために生まれた可能性が高いと考えられている。平組織緯錦である本作例は、経錦の文様がふたたび中央アジアの緯錦に影響を与えた例としても興味深い。平組織緯錦という古様の技法であるが、ひとまず製作年代は 7 世紀と考えられる。

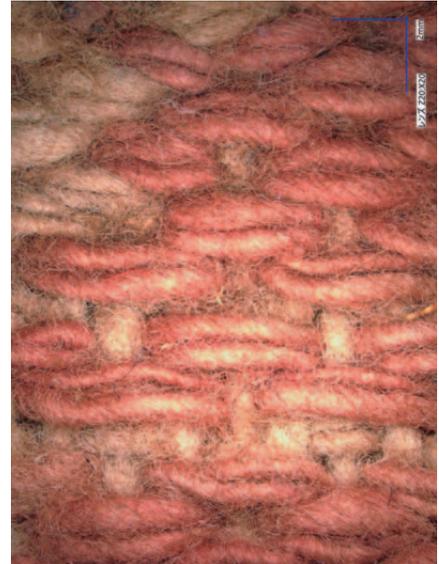
使用状況不明。



文様略図



N-323 部分



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×20) 青糸部分



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分

37 紅地鳥獸連珠円文錦 I-336-57

1片

33.4×20.2cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、練糸。3色一組。経糸方向の張りが強い。

①赤（紅か。色斑あり。0.14mm）、白（0.12mm）、赤紫（0.31mm）

②赤（紅か。0.19～0.31mm）、白（0.24mm）、浅葱（0.22mm）

緯糸：甘撚、生糸か。茶（0.19～0.21mm、生染か）

密度：経60組/1cm、緯40越/1cm

文丈：21cm（対称軸10.5cm）

文様幅：不明。織幅に相当するか。

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM670（沢田2017年）、科研報告94～95頁（2018年）

四方に重角文を置いた連珠円の中に走獣文を表わし、副文として連珠花文を中心にパルメット文を上下左右に延ばした四葉文を配している。経糸は長斑を呈し、3色一組の経糸で、経糸①の赤紫を文様の地とする組、経糸②の浅葱を文様の地とする組が交互に並び、組織緯と平に組織する。

文様の輪郭線の移行に必要な経糸は5本から10本ほどが確認でき、平組織経錦としては例外的な把釣の粗さである。四葉文の中心から円文の対称軸までの10.5cmを製織上の文様単位として紋綜統を整え、織幅分の文様を経糸方向に反復、対称させていたと考えられる。通常の経錦の文丈が3~6cm程度であることを考えれば、2倍にも相当する。円文の大きさは21cm程度となり、7世紀の中央アジア以西生産の大型連珠円文錦に近似する。同時期の経錦における連珠円内動物文は、10cm程度の連珠円の中に、動物文を経糸方向に対し横ざまに織り出して2頭の対称動物文とすることが多い。本作例は、平組織経錦のなかでは特に大きな円文の例といえ、西方の大型連珠円文の緯錦を平組織経錦の技法を用いて織り出すことを試みた例と考えられる。

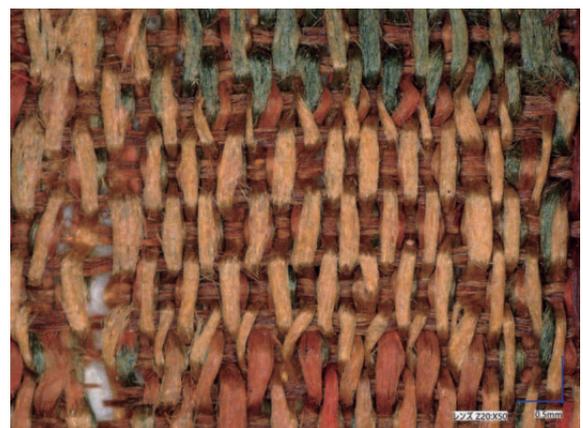
正倉院所蔵の色違いの類裂（紫地鳥獣円文錦、南倉185〈128櫃〉幡類残欠雑43、経35.5×緯46.6cm）とは別裂とみられる。使用状況不明。



I-336-57



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）

38 赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦 ◎N-26-1・2／◎N-56

一括

N-26-1：21.0×6.7cm、N-26-2：21.2×7.0cm、N-56：70.5×24.5cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、練糸か。光沢強く、丸みのある糸。3色一組。

①赤 (0.17~0.42mm)、白 (0.18~0.29mm)、青 (0.26~0.31mm)

②赤 (0.32mm)、白 (0.17~0.34mm)、緑 (0.17~0.37mm)

③赤、黄 (0.26mm)、緑

緯糸：甘撚、生糸か。茶 (0.26mm、生染か)

密度：経 42.5 組/1cm、緯 27.5 越/1cm

文丈：10.6cm (対称軸 5.3cm)

文様幅：織幅に相当する。

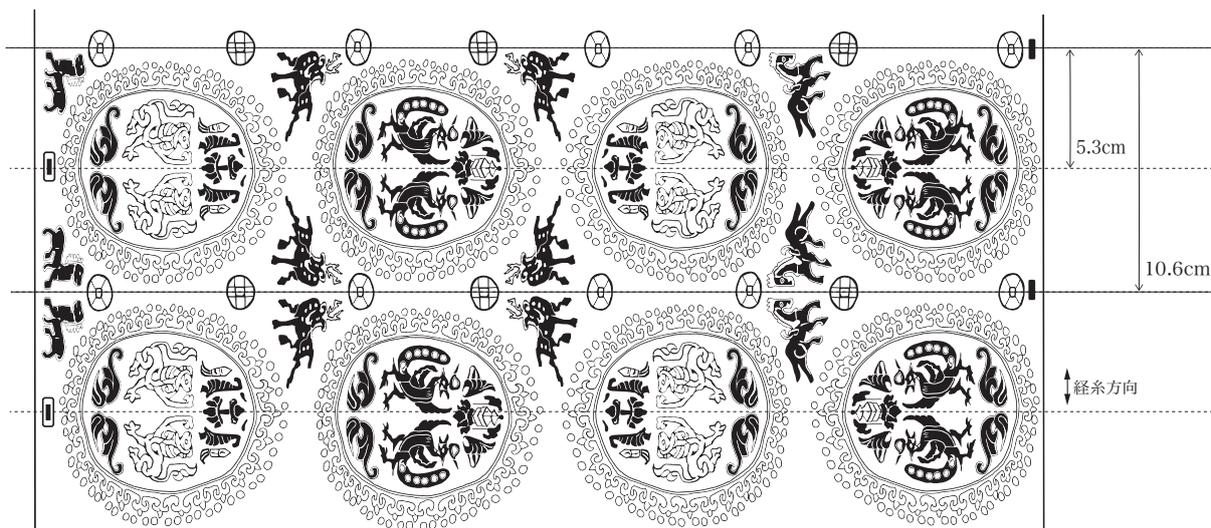
組織備考：織耳あり、端の装飾補強処理なし。織幅不明 (各円文幅からの推定 48cm)。

飛鳥時代・6世紀後半~7世紀前半

既刊報告 研究図録3、4 (1986年)、MUSEUM544 (沢田1996年)

パルメット連珠円文の中に、2種類の文様を納める。一つは、向かいあい翼を広げる鳳凰孔雀文に香炉文とパルメット文、もう一つは、片足を挙げて蹲踞する双獅子に、博山炉様の香炉と小幡にパルメット文である。副文として、円外には天馬や斑鹿、小円文などを配し、織耳近くには重角文を置く。類裂として、現在の中国新疆ウイグル自治区トルファン市近郊アスターナ古墓群から出土例 (Ast.v.201 〈インド、ニューデリー国立博物館所蔵〉) があり、また、正倉院伝来とされる当館所蔵品 I-337-148・149 が確認されている。参考として、仮にこれらの断片を統合した文様図を示す (経錦は緯糸方向に任意の文様要素を配列できるため、N-56 に確認できない左端側の文様要素が異なる可能性がある)。文様天地を経糸方向に直交させ、緯糸方向に異なる文様要素を配置し、経 5.3cm 程度、緯糸方向の幅は織幅いっぱいの細長い文様を、経糸方向に打ち返すことを繰り返している。天馬・斑鹿部分を経糸①、円文部分を経糸②③を長斑に配列することで、それぞれの経糸は3色一組ながら、全体で5色以上の多色を表現する。織耳には、中国出土品によくみられる、地と異なる色を経糸とし色帯をつくる装飾・補強処理はみられないが、重角文による印がある。

この種の錦は寺伝では「蜀江錦」とされ、灌頂幡一具に使用された。「蜀江錦綾幡」(N-26) は一具のうち小幡にあたり、幡身第一坪に本錦が用いられる。法隆寺にも「蜀江大幡」の残欠 (北倉 147) があり、大幡の第一坪に用いられたと思われる断片が残る。「蜀江錦幡残欠」(N-56) も、中央が矩形に褪色し、表裏として折り返していたとみられる折痕が残ることから、同様に大幡に使用されたと考えられる。



文様略図 (左端~中央左円は中国出土品を含む類裂より想定)



N-56



N-56 裏面（修理前）



顕微鏡画像（×50） 経糸①部分



顕微鏡画像（×50） 経糸②③部分

39 白茶地双鳳連珠円文錦 I-336-69

1片

20.3×19.5cm

絹製、複様綾組織緯錦 (a)

経糸：①顕文経 ややS撚、生糸か。2本引き揃え (2本で0.29mm)。茶 (0.15mm)

②組織経 甘撚、生糸か。1本遣い。茶 (0.17mm)

緯糸：甘撚、いずれも練糸か。4色一組 (杼4挺)。

①淡茶 (紅か、0.20mm)、緑 (0.19mm)、紫 (0.17mm)、白茶 (0.17mm)

密度：経40本/1cm、緯50組/1cm

文丈：推定26cm

文様幅：推定24.8cm (窠間幅：対称軸12.4cm)

組織備考：織耳なし。織幅不明。

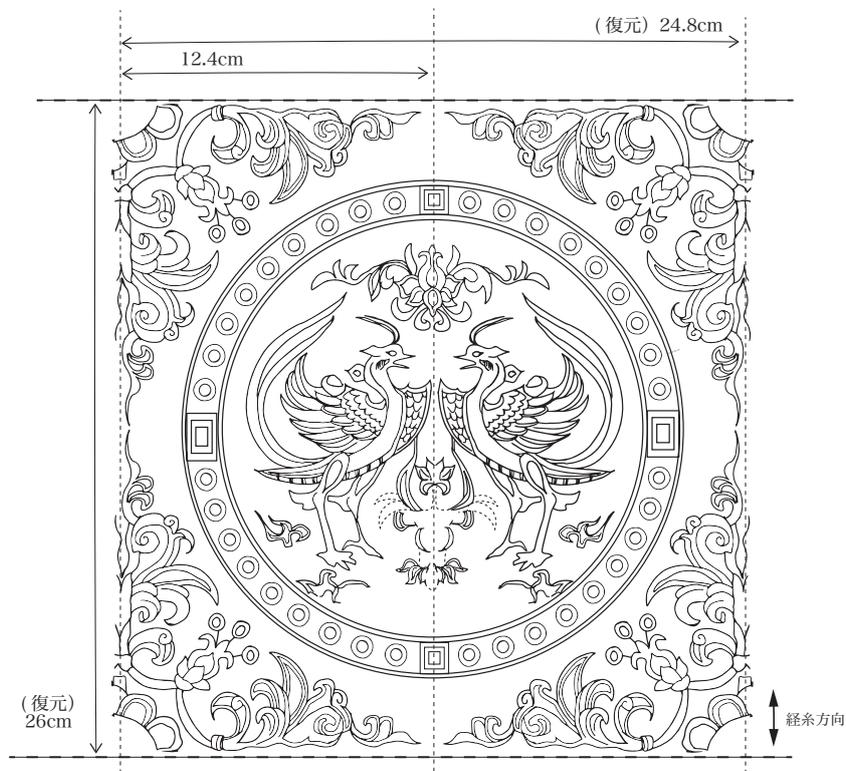
飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 MUSEUM670 (沢田2017年)、科研報告114~115頁 (2018年)

上下左右に重角文を配した連珠円文に、向かい合う鳳凰文を納める。鳳凰の上部には柘榴果パルメット文、脚部には宝雲文を配している。副文は四方に装飾化の進んだパルメットを四方に延ばした四葉文で、間に柘榴果を表わす。鳳凰の形態、雲文、パルメット文の変化からみて中国唐代の作かと考えられるものの、主文の連珠円文が南北朝時代の錦に多く見られる形式を留める点からすると、積極的に8世紀までは下げがたい。

顕微鏡画像 (×50) において、緯糸は紅/紫/白/緑・紅/紫/白/緑の順に追掛杼で織り入れられており、交錯する糸は2本引き揃えと1本のみのもとの2種類ある。織機に対して二重に整経していることとなり、中国出土の緯錦の特徴と一致する。以上より、本調査において本作が経錦ではなく綾組織緯錦である可能性が高いことを確認した。4色一組の緯糸が組織経と左流れ (ㄨ) の三枚綾組織をつくり、顕文経が2本引き揃えでやや太い糸となるために緯糸が角張り、文様の輪郭線を明確にみせている。この文様の輪郭線を形づくる把釣は経糸2本分とみられる。現在は褪色と緯糸の脱落のために全体的に同系色に見えるが、地を白、文様の地を緑と紅、輪郭線を紫として織り出している。文様の天地と経糸方向は一致し、およそ経26cm、緯12.4cmの縦長矩形の文様単位を一単位として、緯糸方向に反復させている。

使用状況不明。



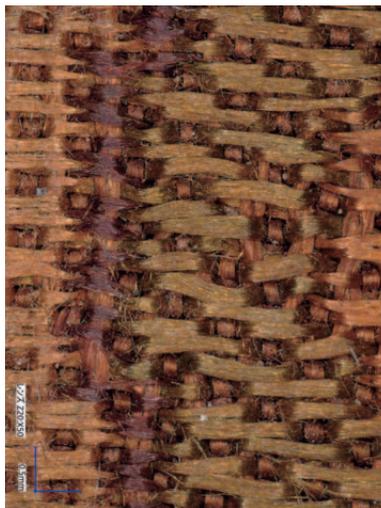
文様略図



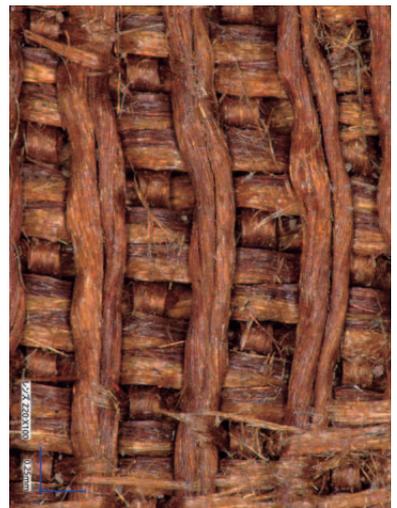
I-336-69



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 緯糸の色交替



顕微鏡画像 (×100) 経糸拡大

40 茶地双鳳連珠円文錦 I-336-58

1片

22.0×21.2cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘燃、練糸か。3色一組。経糸の張りが強い。

①紫(0.17mm)、白(0.14mm)、淡紅(0.16mm)

緯糸：甘燃、生糸か。茶(0.15mm、生染か)

密度：経60組/1cm、緯32.5越/1cm

文丈：6.0cm(対称軸3.0cm)

文様幅：7.2cm

組織備考：織耳あり、経糸5本分ほど文様を入れずに単色で密度を高めて織る。織幅不明(円文7窠分に相当するか)。

飛鳥時代・7世紀後半

既刊報告 MUSEUM655(沢田・三田2015)、科研報告96~97頁(2018年)

連珠円文の中に鳳凰が向かい合う経錦断片である。円外にはX字形の文様とともに、中心に六弁花を置き四方に吹き上がるようにパルメット文を配した、凝った意匠の四葉文が表わされる。経糸方向に対し横ざまに織られた鳳凰は、No.38の赤地双鳳獅子唐草連珠円文錦(N-26ほか)の孔雀様の鳳凰に比べると、尾羽や冠羽は唐代の錦にみられる鳳凰にやや近づき、全体に固い表現ながら装飾性の高まりを示している。随所で簡略化しているものの、円内のパルメット文や四葉文の間に、柘榴果の名残とみられる文様が確認できる。以上の文様構成は緯錦のNo.39の白茶地双鳳連珠円文錦(I-336-69)、および経錦であるNo.41の長斑双鳳連珠円文錦(N-318-6)ともほぼ一致する。経糸の張りがよく、緯糸との交錯部で角張り、組織緯がよくみえる。全体を通して同じ組み合わせの3色の経糸を用い、地を紫、連珠やX字形の中心を白、その他の文様の地を淡紅で織りなしている。

使用状況不明。



I-336-58



顕微鏡画像(×50)



顕微鏡画像(×20) 織耳部分

41 長斑双鳳連珠円文錦 ◎ N-318-6/I-331-B-41

2片 (各1片)

N-318-6 : 12.1×4.5cm、I-331-B-41 : 8.2×11.5cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、丸みのある練糸。3色一組。

①緑 (0.25mm)、白 (0.22mm)、赤 (0.36mm)

②青 (0.23~0.31mm)、白 (0.25mm)、赤 (0.26mm)

③紫 (0.22~0.32mm)、白 (0.22mm)、赤 (0.25mm)

④黄 (0.24~0.36mm)、白 (0.21mm)、赤 (0.27~0.32mm)

緯糸：甘撚、生糸か。茶 (紫か、0.21mm、生染か)

密度：経 40 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：9.0cm (対称軸 4.5cm)

文様幅：不明。織幅に一致するか。

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀前半

既刊報告 —

連珠円文の中に、双鳳凰文にパルメット文や香炉文が崩れたかと思われる文様を表わす。円外には副文として、連珠花文を中心とするパルメット四葉文とX字形の文様、十字形文様を配している。全体に文様の崩れが著しいが、No.40の茶地双鳳連珠円文錦 (I-336-58) とほぼ同じ文様構成である。経糸の組み合わせは4種類確認でき、いずれも赤と白を文様の地と輪郭線とし、地色が縦縞になるように配列している。文様は経糸方向に対し横ざまに織られている。

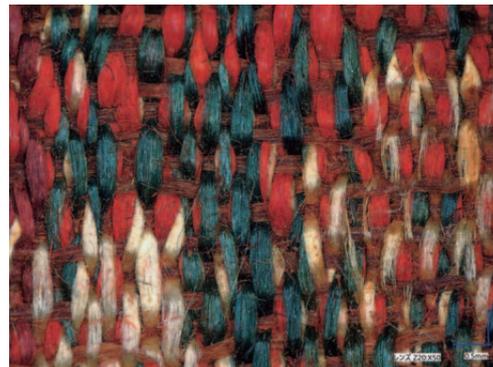
使用状況不明。



I-331-B-41



顕微鏡画像 (×50) 経糸①



顕微鏡画像 (×50) 経糸②

42 緑地狩獵連珠円文錦 ◎N-40

1枚

92.7×51.4cm

絹製、複様綾組織緯錦(c)

経糸：甘撚、生糸か。

①顕文経 淡紅(0.19~0.27mm、1本0.08mm)、2本引き揃え

②組織経 淡紅(0.06~0.08mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。2色一組(杼2挺)。丸みがあり柔らかい風合い。

①淡緑(0.44~0.52mm)、黄(0.42mm)

密度：経45組/1cm、緯25越/1cm

文丈：推定68.6cm(対称軸推定34.3cm)

文様幅：不明、織幅に相当するか。(窠間幅：対称軸24.5cm)

組織備考：織耳は裏面に入り確認できず。織幅不明であるが推定50cm程度か。

奈良時代・8世紀

既刊報告 研究図録25(1986年)

四方に角文を入れた連珠円文に葡萄唐草をめぐらせ、内部に動物狩獵文を納めた緯錦である。円文上方に斑鹿が走り、馬上の狩人が振り返って豹を射抜こうとする。さらに、円文を四分割する対称軸に沿って立木文と山羊文を配す。円外には葡萄を啄む鳥文と、振り返る獅子が表わされる。本作例とほぼ同じ文様の緯錦が、正倉院にも色違いで複数伝世しており、8世紀に多く織られた錦と考えられる。本作例は正倉院の類裂に比べ、葡萄が点状になり、獅子の吐く火焰が尻尾から出ている点など、文様細部の各所に写し崩れとみられる解釈の混乱、文様表現の硬化がみられる。

2色の緯糸は、組織経と左流れ(へ)の三枚綾組織をつくる。組織経1本、顕文経2本とする点は7世紀の緯錦と共通するが、どちらの経糸も細く、緯糸が平糸の丸みを保ったまま織り入れられ、全体におだやかな風合いである。緯糸は黄/淡緑・黄/淡緑/……の順に入れられ、杼2挺の追掛杼となる。類例からみて、おそらく現状の裂が織幅に近いと思われるが、両端が裏に折り返されており織耳は確認できない。副文の植物文の中心と円文を四分割する対称軸を1つの文様単位とすると、経34.3cm、現状見える範囲で緯24.5cmの縦長矩形の文様単位を上下左右に打ち返して製織しているようである。空引機構をもつ織機による製作と考えられ、完結した文様としては、織幅一幅に一つの葡萄唐草円文を織り出すこととなる。

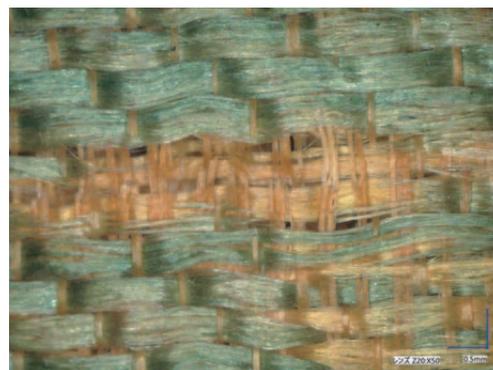
寺伝では「皇太子御褥裂」と伝わる長方形の褥の表裂であるが、やや時代の下る錦と考えられる。



N-40



顕微鏡画像(×20)



顕微鏡画像(×50) 経糸露出部分

43 黄地葡萄唐草円文錦 ◎ N-38／◎ N-39

2枚（各1枚）

N-38：123.8×56.5cm、N-39：147×73cm

絹製、複様綾組織緯錦（d）

経糸：甘撚、生糸か

① 顕文経 淡茶（0.08mm）、1本

② 組織経 淡茶（0.08～0.17mm）、1本

緯糸：甘撚、練糸か。2色一組（杼2挺）。丸みのある柔らかい風合い。

① 黄（0.43～0.47mm）、白（0.42～0.48mm）

密度：経45本／1cm、緯25組／1cm

文丈：58.8cm（対称軸29.4cm）

文様幅：推定57cm（窠間幅：対称軸28.5cm）

組織備考：N-39の両端に織耳あり、S撚の太糸の単糸を補強に用いる。織幅58.5cm

奈良時代・8世紀中頃

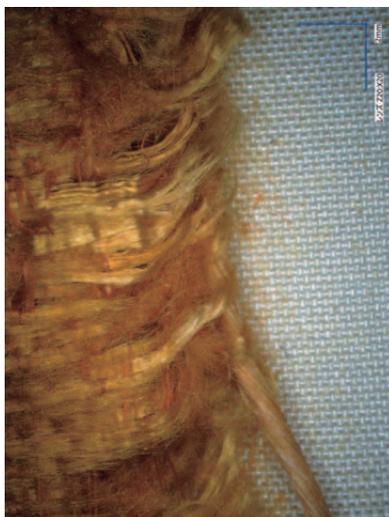
既刊報告 研究図録23、24（1986年）、MUSEUM582（沢田2003年）

パルメット四葉文を二重にした葉文を中央に、伸びのある蔓で八角形の内角を描く葡萄唐草円文を表わした緯錦である。葡萄唐草文の間には簡略化した四葉文が入られる。組織経、顕文経ともに1本遣い（素入）で、緯糸に対して極端に細い。このために緯糸が平糸の丸みを保ったまま織り入れられ、全体におだやかな風合いである。組織経と緯糸は右流れ（ノ）の三枚綾地をなす。また、緯糸は白／黄・白／黄／……の順に入れられ、杼2挺の追掛杼となる。織物の経糸方向の中心軸と、円文内部の葉文の中心と副文の四葉文の中心を、文様の対称軸をつくる線と考えると、経29.4×緯28.5cmのほぼ正方形の文様単位を上下左右に打ち返して織り出している。空引機構をもつ織機による製作と考えられ、織幅一幅に一つの葡萄唐草円文のみを織り出すこととなる。

寺伝では、N-38は「皇太子夏御褥裂」、N-39は「孝謙帝御褥」とされる長方形の褥の表裂である。N-38の下に芯裂として用いられた麻布には、天平勝宝6年（754）に常陸国から納められた調布である旨の墨書銘があり、本作例の大まかな製作年代が知られる。



N-39



顕微鏡画像（×20） 織耳部分



顕微鏡画像（×30）

44 淡紅地雲山錦 I-336-62

1片

17.8×7.8cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組、4色一組。

①淡紅、青緑～淡緑 (0.17mm)、赤

②淡紅 (0.24mm)、青緑 (0.17mm)、赤 (0.16mm)、
淡緑 (0.17mm)

緯糸：ややS撚、練糸か。赤 (経糸と同色、0.26～0.29mm)

密度：経 50 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：2.5cm

文様幅：4.4cm

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM658 (沢田 2015 年)、科研報告 104 頁 (2018 年)

三山形式の山岳文と雲文を緯糸・経糸方向に繰り返した、小ぶりの文の綾組織経錦である。漢代の山岳雲気文経錦の発展した姿とみることもでき、綾組織経錦には珍しく上下対称文をとらない点も、古様の文様構成を引き継いでいる。しかしながら山と雲気が結びつき、種々の神獣とともに上下に動的な線を描く漢代山岳雲気文の錦と比べると、雲文と山岳文が分離し、雲文は靈芝のように変化するなど、その年代差は明らかである。

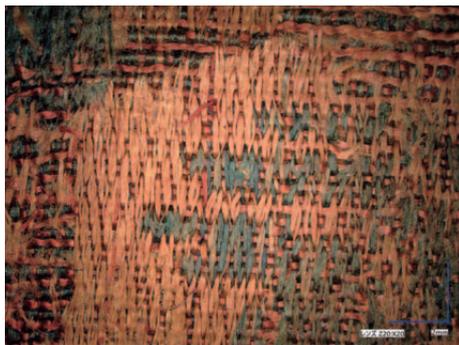
地は淡紅で、山岳文を経糸②淡緑、雲文を経糸①青緑で織り出す。赤の経糸は、確認した限りでは淡紅か青緑の経糸とともに引き揃えのように表面に現れるため、文様上の役割は現状からは判別し難い。経糸に対して緯糸が太く、全体にややよろけた風合いとなる。地組織は左流れ(ㄨ)の三枚綾地であるが、顕微鏡画像(×20、×50)を見ると、隣り合う青糸の組織点が飛び、淡紅の糸が2本一組に表出する箇所の交替が不規則となるなど、完全に整経が整理されきっていない部分が見受けられる。青緑の糸に並んでやや淡い緑の糸が交替する部分が随所にあり(顕微鏡画像(×50)中央上部)、この糸の影響とも考えられる。全体に緯糸の露出が多い。使用状況不明。



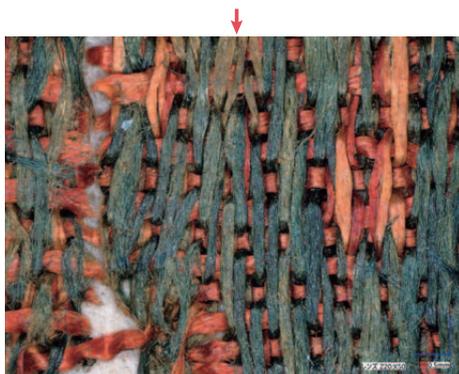
I-336-62



I-336-62 裏面 (修理前)



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

45 紫地獅嚙鳳凰文錦 N-46-1-1・2/I-331-B-40

一括

N-46-1-1：6片。11.5～36.4×4.7～9.2cm、N-46-1-2：11片。2.8～19.5×0.9～5.4cm、I-331-B-40：14.5×7.5cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸とみられる。4色一組。全体にやや細い。

①紫 (0.29mm)、青 (0.20mm)、赤 (0.23mm)、白 (0.21mm)

②紫 (0.20mm)、青 (0.15mm)、赤 (0.18mm)、黄 (0.17mm)

緯糸：甘撚、生糸か。2本引き揃え、茶 (0.21mm、生染か)

密度：経 45 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：5.8cm

文様幅：不明、織幅に相当するか。

組織備考：織耳なし。織幅不明。

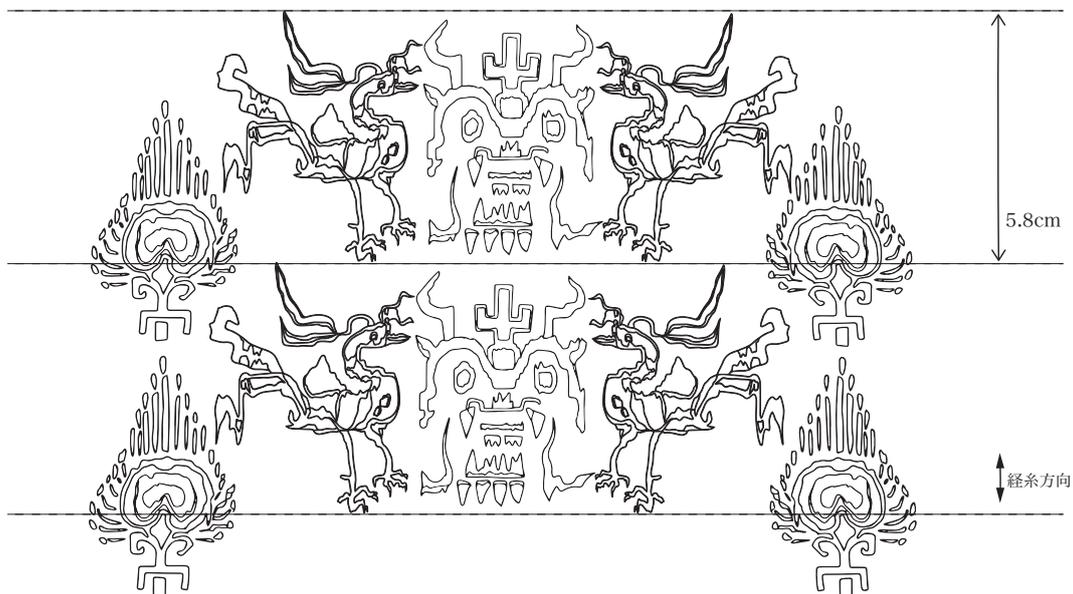
飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM574 (沢田 2001 年)

獅嚙文を挟み鳳凰が立ち、その間に火焰宝珠を配していたとみられる。綾組織経錦で、緯糸方向に小さな文様を並べた文様帯 (文丈 5.8cm) をつくり、これを経糸方向に打ち返さずに段状に反復する。綾組織経錦には珍しく上下対称文をとらない点は、漢代経錦を引継ぐ古様の文様構成といえる。しかしながら類似の出土例は中国では確認されていない。No.69 の赤地獅嚙火焰宝珠入雲気繫文経緋 (N-24) など、朝鮮半島からの輸入品と考えられる経緋にみる獅嚙文や火焰宝珠文と表現が類似する点からみれば、当時の朝鮮半島の美術様式との関連も考慮すべき観点であろう。

地は赤紫で、鳳凰文の輪郭を黄、鳳凰の胴と獅嚙文の頭部を青とし、一部に赤が用いられている。経糸に対して緯糸がやや太く、2本引き揃えの糸を用いている点が特徴的である。全体にややよろけた風合いとなっているため判別しにくい。本作品の地組織は基本的に左流れ (へ) の三枚綾地となっている。顕微鏡画像 (×20、×50) を見ると、文様をつくる黄・赤・青の表出する箇所が捻れ、隣の色糸を越えながら沈む点があるなど、糸交替が整理されきっていない部分が見受けられる。また黄・赤・青の糸が表出する部分で顕文緯が過剰に露出する。組織の特徴は本作例と No.46 の紫地獅嚙白象文錦、No.47 の紫地天人文錦はほぼ共通し、緯糸方向に並ぶ一連の裂である可能性も排除できないが、接続箇所が確認できないため不明。

使用状況不明。



文様略図



N-46-1-1 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

46 紫地獅嚙白象文錦 N-46-2-1・2

一括

N-46-2-1：5片。復元長 52.2×23.0cm、9.7～32.5×2.5～13.5cm、

N-46-2-2：9片。1.8～18.6×0.7～3.6cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘撫、いずれも練糸か。4色一組。全体にやや細い。

①紫 (0.25～0.32mm)、青 (0.17～0.25mm)、赤 (0.19～0.25mm)、白 (0.17～0.28mm)

②紫 (0.26mm)、青 (0.22mm)、赤 (0.15～0.31mm)、黄 (0.14～0.19mm)

緯糸：ややS撚、2本引き揃え。茶 (0.27mm、生染か)

密度：経 50 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：5.7～6.2cm

文様幅：不明、織幅に相当するか。

組織備考：織耳なし。織幅不明。

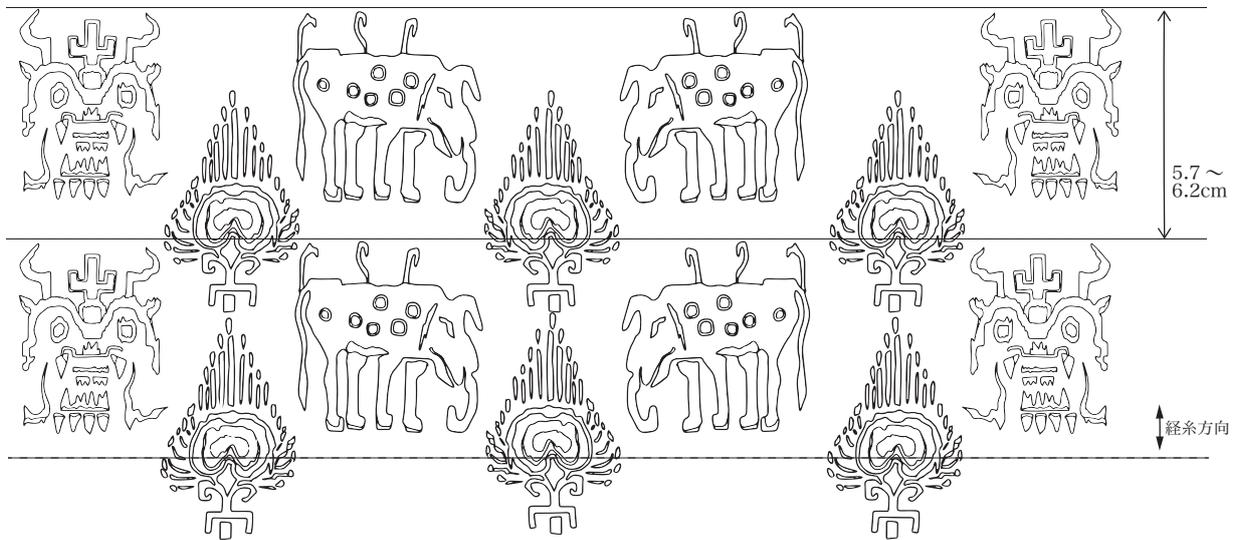
飛鳥時代：7世紀

既刊報告 MUSEUM574 (沢田 2001 年)

獅嚙文を挟み火焰宝珠文を置き、その隣に斑文をもつ白象を配した綾組織経錦である。当館所蔵断片に見えるのは象の臀部で、正倉院に所在する法隆寺伝来とみられる類裂(裂帳 90-4-4)に、白象の頭部が確認できる。

緯糸方向に小さな文様を並べた文様帯(文丈 5.7cm)をつくり、経糸方向に反復する。綾組織経錦には珍しく上下対称文をとらない古様の文様構成である。地は赤紫で、火焰宝珠文の部分に経糸②、白象文を経糸①の組み合わせとする。経糸に対して緯糸がやや太く、2本引き揃えの糸を用いている。全体にややよろけた風合いとなっているが、本作例の地組織は基本的に左流れ(↖)の三枚綾地となっている。顕微鏡画像(×20)を見ると、色系の交替が捻れ、隣の色糸を越えながら沈む、引き攀れて不規則に別色が表出するなど、整経が完全に整理されきっていない部分も見受けられる。組織の特徴はNo.45の紫地獅嚙鳳凰文錦、No.47の紫地天人文錦とほぼ共通し、緯糸方向に並ぶ一連の裂の可能性もあるが、接続箇所が確認できず不明。

使用状況不明。



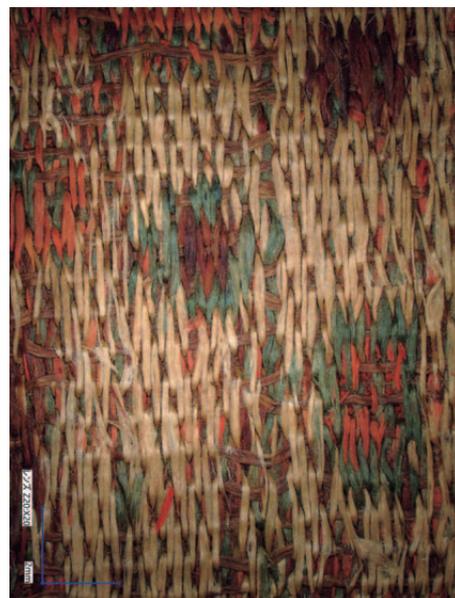
文様略図 (一部は正倉院所蔵法隆寺伝来より推定)



N-46-2-1 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×20)

47 紫地天人文錦 N-46-2 付属

一括

8.0×0.7cm、5.6×1.0cm、8.2×2.0cm、6.5×2.2cm、17.0×3.6cm、17.5×2.2cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘藷、いずれも練糸とみられる。4色一組。全体にやや細い。

①紫(0.25~0.32mm)、青(0.17~0.25mm)、赤(0.19~0.25mm)、白(0.17~0.28mm)

②紫(0.18mm)、青(0.23mm)、赤(0.18mm)、黄(0.23mm)

緯糸：甘藷、茶(0.14~0.21mm、生染か)

密度：経45~60組/1cm、緯30越/1cm

文丈：5.8cm

文様幅：不明、織幅に相当するか。

組織備考：織耳あり、端の補強装飾処理なし。織幅不明。

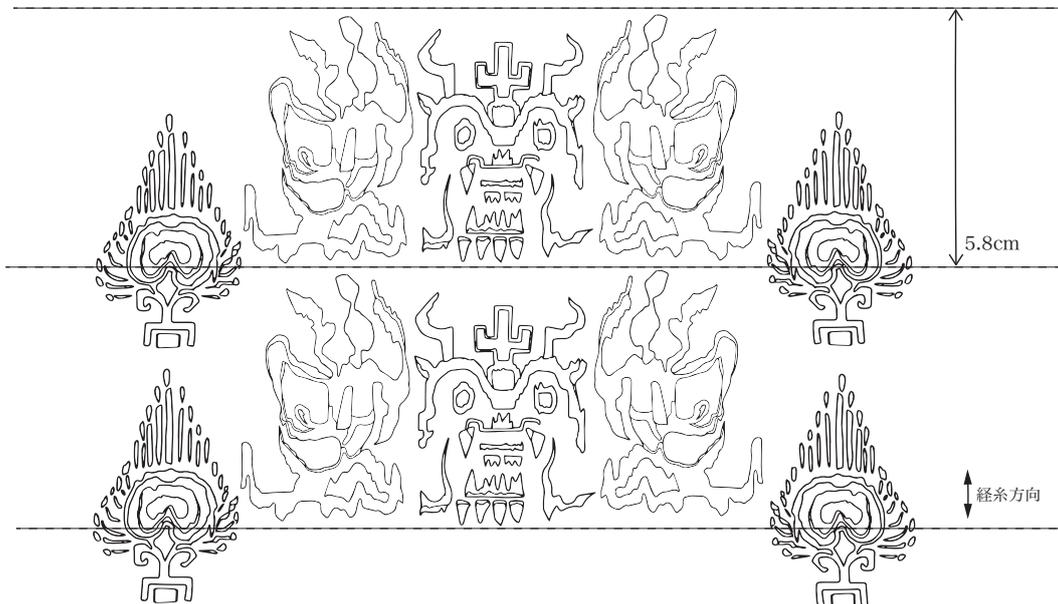
飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM574 (沢田2001年)

天人を表わしたとみられる綾組織経錦である。当館所蔵断片に見えるのは天人の胴部分で、正倉院所在の法隆寺伝来とみられる類裂(玻璃装第221号)を参照すると、獅嚙文をこの天人が挟み、その隣に火焰宝珠文が表わされていたようである(文様略図参照)。

緯糸方向に小さな文様を並べた文様帯(文丈5.8cm)をつくり、これを経糸方向に反復する。上下対称文をとらない古様の文様構成である。地は赤紫で、天人の胴部分に経糸②、天人の顔から袖部分を経糸①の組み合わせとする。経糸に対して緯糸がやや太く、2本引き揃えの糸を用いている。全体にややよけた風合いとなっているが、本作品の地組織は基本的に左流れ(↖)の三枚綾地となっている。顕微鏡画像(×20、×50)をみると、色糸の交替が捻れ、隣の色糸を越えながら沈むなど整経が完全に整理されきっていない部分も見受けられる。一部地綜統の拵えの誤りのためか平組織になる部分や、緯糸が絡まる部分もみられる。組織の特徴はNo.45の紫地獅嚙鳳凰文錦、No.46の紫地獅嚙白象文錦とほぼ共通し、緯糸方向に並ぶ一連の裂の可能性もあるが、接続箇所が確認できず不明。

使用状況不明。



文様略図 (一部は正倉院所蔵法隆寺伝来裂より推定)



N-46-2 付属



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

48 赤地禽獸花葉龜甲繫文錦 ◎ N-43・43 付属/I-336-51

一括（1枚、1片）

N-43：157.0×56.5cm、I-336-51：22.0×3.2cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。

①赤（0.25mm）、白（0.15mm）、青（0.21mm）

緯糸：甘撚、生糸か。茶（0.32mm、生染か）

密度：経 45 組/1cm、緯 20 越/1cm

文丈：3.4cm（対称軸 1.7cm）

文様幅：不明、織幅に相当する。

組織備考：織耳あり、端の補強装飾処理なし。織幅 35cm か。

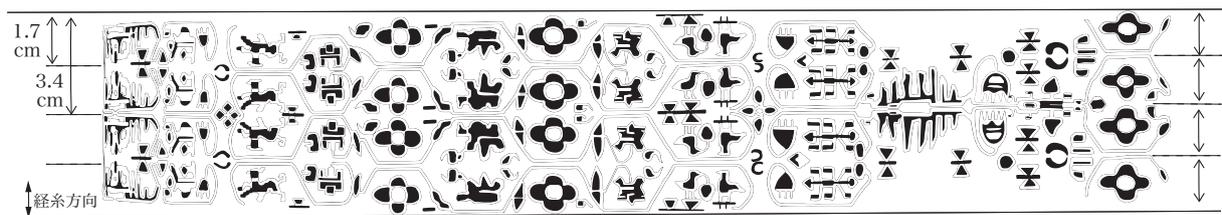
飛鳥時代・6世紀後半～7世紀前半

既刊報告 研究図録 28（1986年）、MUSEUM588（沢田 2004年）

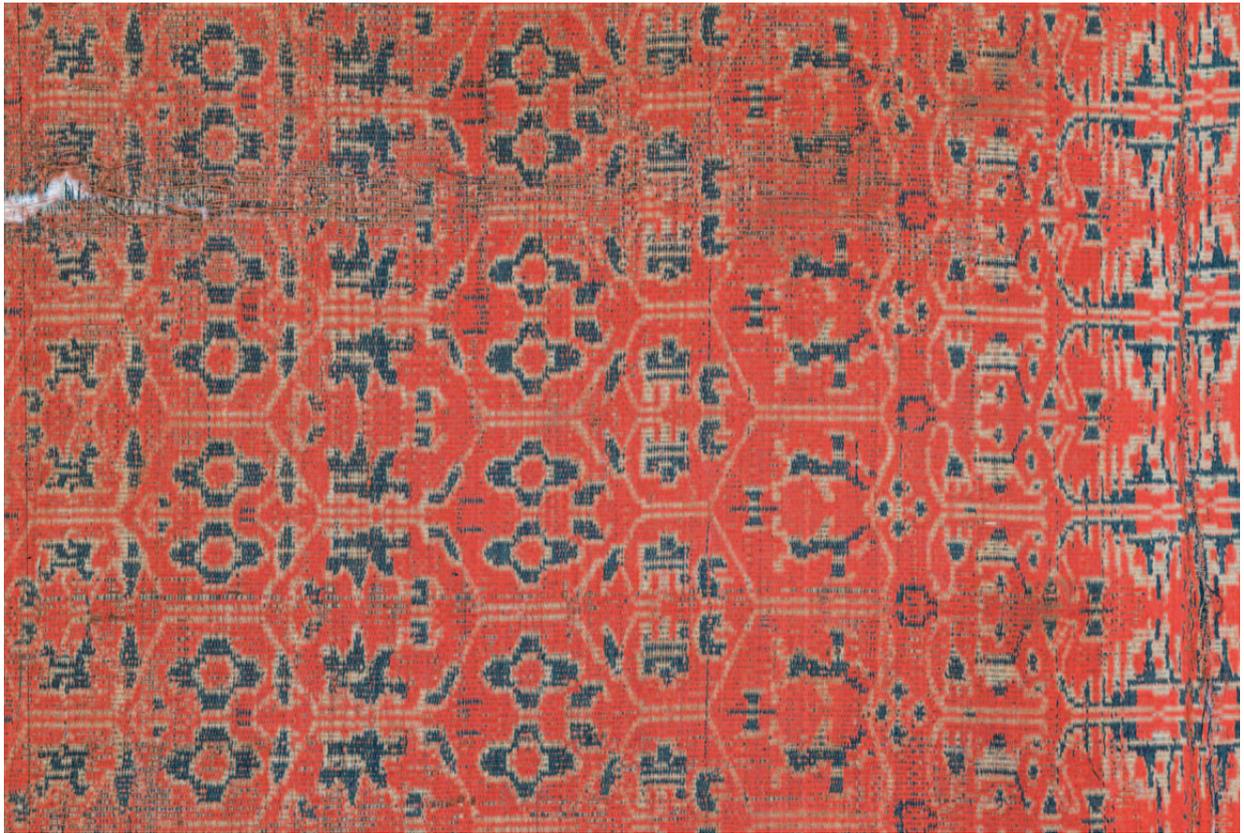
赤地に亀甲繫風の植物文を表わした平組織経錦である。この植物文は単線が上下に蛇行し、六角形に近い構成をとる。この単線をたどると、パルメット文が崩れたものかと思われる葡萄葉状の葉文が3種類確認でき、さらに末端では、先端が三叉に分岐する吊鐘状の文様（茱萸文）が内側に入りこんでいる。植物文の内部には、四弁花文、八弁花文、走獣文、側面観の立鳥文、小雲気文などの文様要素がこめられており、これらに並び、山岳文、三角形を対称に繋げた文様、獅嚙文の一部かと思われる文様もみられる。以上のそれぞれ異なる文様要素が、緯糸方向に織幅いっぱい並び、経糸方向に上下線対称に打ち返される。緯糸方向の織幅全幅にわたり、異なる文様要素を連続して配置し、一段の文様を経糸方向に繰り返す点は、経錦の特徴である。本作例では、文様細部に漢代の雲気動物文や茱萸文の名残がありつつも、南北朝時代以降に作例の多い線対称の文様構成をとり、亀甲繫風の文様骨格となっている点が興味深い。ただし、中国出土とされる類裂では、この文様骨格は直線的な亀甲文よりも、波状の曲線を描いているものが多い。なお、法隆寺所蔵の類裂（額装）は、本作例とは緯糸方向の文様要素や配列が異なり、複数の類裂が法隆寺に伝わっていたと考えられる。

3色一組の経糸は赤／白／青・青／白／赤の順に整経されており、紋上げを簡便にするため、隣接する組のうちそれぞれ同色の2本を同時に引き上げたと考えられる。本作例では、おそらく紋上げの誤りにより顕文緯が露出している箇所や、想定される意匠図とは異なる色糸を引き上げている箇所なども確認できるが、全体的に糸の交替の様相は整っている。織耳は単色で密度を高めることはせず、経糸①の一組を織り入れている。

3枚接ぎの裂であり、中央部と縁に黄茶の縫合糸（S撚双糸、0.37cm）が残存する。それぞれの裂を織耳で繋ぐと仮定すると織幅 35cm となり、当時の平組織経錦としてはかなり幅の狭い例となる。一部色残りのよい部分があり、おそらくこの部分に縁裂を付した褥であったと思われる。本作例も寺伝で「蜀江錦」とされるもの一つで、箱書に「蜀江御褥之裂」とある。



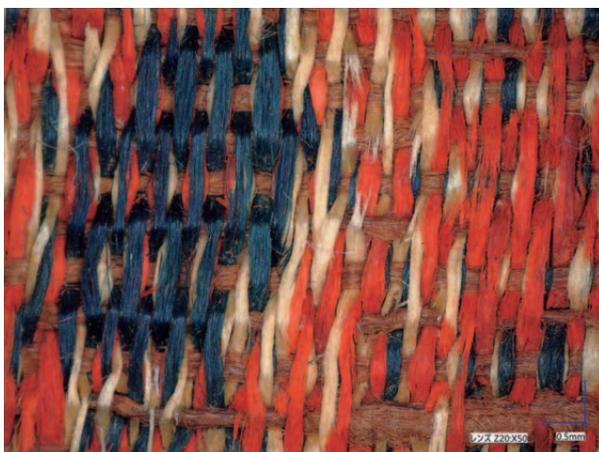
文様略図



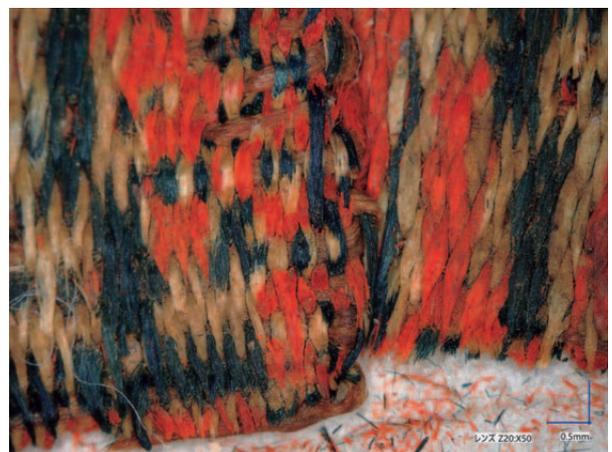
N-43 部分拡大



N-43 縫合部拡大



顕微鏡画像 (×50)



顕微鏡画像 (×50) 織耳部分

49 紫地双鳥文入波唐草文錦 N-315/I-331-B-48・75

一括

N-315 : 3.5×2.8cm、I-331-B-48 : 8.1×3.2cm、I-331-B-75 : 9.0×2.6cm

絹製、複様平組織経錦

経糸：甘撚、練糸。3色一組。

①紫 (0.19~0.23mm)、白~淡黄 (0.15mm)、緑 (0.18mm)

緯糸：甘撚、生糸か。淡茶 (0.17mm、生染か)

密度：経 37.5 組/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：2.8cm (対称軸 1.9cm)

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・6世紀後半~7世紀前半

既刊報告 研究図録 17 (1986年)

波状唐草文の間に双鳥文を横ざまに表わした平組織経錦である。文様天地を経糸方向に直交させ、また 1.9cm 程度の細長い文様を経糸方向に打ち返すことを繰り返している。地を紫とし、輪郭線を白、文様の地を緑とする。この種の錦は「広東幡残欠」(N-315)の幡頭手に用いられており、仏幡の一部と考えられる。



I-331-B-48



顕微鏡画像 (×50)

50 白地花波唐草文錦 I-336-63

1片

11.1×5.1cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：甘燃、いずれも練糸か。4色一組、3色一組。

①赤(0.23mm)、紫(0.18mm)、白(0.09mm)、青(0.19mm)

②紫(0.18mm)、白(0.14mm)、青(0.13mm)

緯糸：甘燃、生糸か。淡茶(0.19mm、生染か)

密度：経50組/1cm、緯20越/1cm

文丈：5.2cm(対称軸2.6cm)

文様幅：不明

組織備考：織耳あり、色帯等の補強装飾処理なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 MUSEUM658(沢田2015年)、科研報告105頁(2018年)

波状唐草文の蛇行する茎の結節点に、花文を表わした綾組織経錦である。緯糸方向に小さな文様を並べた文様帯(文様単位2.6cm)をつくり、経糸方向に線対称に打ち返して全体文様とする。唐草文部分に経糸②、花文部分に経糸①の組み合わせを配列する。経糸に対して緯糸がやや太い。全体にややよろけた風合いとなっているが、本作品の地組織は基本的に右流れ(ノ)の三枚綾地となっている。

使用状況不明。



I-336-63



I-336-63 裏面(修理前)



顕微鏡画像(×50)

51 緑地花葉文錦 I-336-77

1片

14.0×5.4cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：ややS撚、丸みのある糸で、練糸か。2色一組、一部のみ3色一組とする。

①緑(0.29mm)、淡黄(0.23mm)

②緑(0.28mm)、紅(0.16mm)、淡黄(0.24mm)

緯糸：甘撚、練糸か。紅(0.25mm)

密度：経50組/1cm、緯30越/1cm

文丈：3.0cm(対称軸1.5cm)

文様幅：不明。推定6.2cm前後

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

既刊報告 MUSEUM658(沢田2015年)、科研報告126～127頁(2018年)

緑地に可憐な花文を互の目に配した綾組織経錦である。緯糸方向に小さな文様を並べた文様帯(文様単位1.5cm)をつくり、これを経糸方向に線対称に打ち返して全体文様とする。パルメット文の変形かと思われる葉文先端に経糸②、その他の部分に経糸①の組み合わせを配列する。経糸は丸みのある糸で、緯糸の打ち込みも細かい。組織緯と経糸の組が右流れ(↗)の三枚綾組織をつくる。

三角形の形状で、辺の部分のみ色残りがよい。縁裂が付いていたと考えられるが使用状況不明。



I-336-77



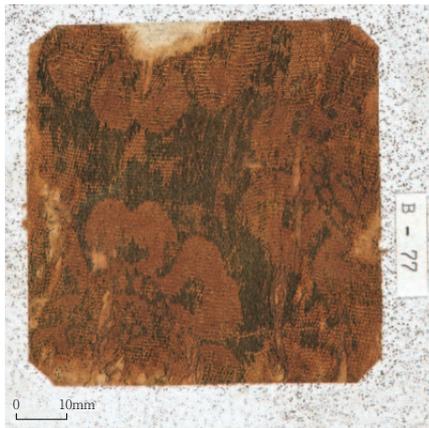
I-336-77
裏面(修理前)



顕微鏡画像(×50)

52 緑地六弁花文錦 I-331-B-77

1片
7.3×7.0cm
絹製、複様綾組織経錦
経糸：甘撚、いずれも練糸か。3色一組。
①青緑(0.20mm)、淡黄(0.16mm)、
淡紅(0.18mm)
緯糸：甘撚、練糸か。淡茶(0.16mm)
密度：経50組/1cm、緯25越/1cm
文丈：6.0cm(対称軸3.0cm)
文様幅：不明
組織備考：織耳なし。織幅不明。
飛鳥～奈良時代・7～8世紀
既刊報告 —



I-331-B-77

四葉文入りの連珠円を中心とした六弁花を表わした綾組織経錦である。四葉文などの副文はみられない。緯糸方向に文様帯をつくり、経糸方向に線対称に打ち返し全体文様とする。経糸は丸みのある糸で、練糸とみられる緯糸の打ち込みもよい。組織緯と経糸の一組が右流れ(↗)の三枚綾組織をつくる。使用状況不明。



顕微鏡画像(×50)

53 緑地四葉文錦 I-331-B-65

1片
3.2×2.1cm
絹製、複様綾組織経錦
経糸：甘撚、練糸か。4色一組か。やや細い。
①青緑(0.17mm)、紫(0.22mm)、
淡紅(0.16mm)
緯糸：甘撚、練糸か。淡茶(0.26mm)
密度：経45組/1cm、緯25越/1cm
文丈：不明
文様幅：不明
組織備考：織耳なし。織幅不明。
飛鳥～奈良時代・7～8世紀
既刊報告 —



I-331-B-65

四葉文かと思われる文様を配した綾組織経錦である。文様、文丈の詳細は現状では判別できない。経糸に対して緯糸が太く打ち込みも緩い。組織緯と経糸が左流れ(↖)の三枚綾組織をつくる。使用状況不明。



顕微鏡画像(×50)

54 青緑地六弁花鳥文錦 N-306/I-336-67

一括（各1片）

N-306：20.9×7.8cm、I-336-67：29.2×7.7cm

絹製、複様綾組織経錦

経糸：S撚、いずれも練糸。4色一組。

①淡緑～青緑（0.18mm、2本引き揃えの部分は0.25mm）、淡紅（0.12～0.18mm）、赤（0.21mm）、白（0.18mm）

緯糸：ややS撚、練糸。紅（0.25mm）

密度：経45組/1cm、緯35越/1cm

文丈：8cm（対称軸3.5～4.0cm）

文様幅：不明

組織備考：織耳あり。織耳部分での端の色帯処理なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM655（沢田・三田2015年）、科研報告110～111頁（2018年）

連珠円を中心とした六弁花文を互の目に配置し、副文に綬を銜える鳥襷文を表わした緻密な綾組織経錦である。正倉院宝物にも献納宝物混入裂以外の類裂が多くあり、法隆寺伝来品と正倉院宝物の同時代性を示している。

I-336-67では褪色によりやや判別しにくいだが、六弁花の輪郭と鳥襷文は白糸、花卉の地を淡紅、鳥襷の連結部や花卉中央部を赤糸とし、4色の経糸を用いている。経糸の配列は赤/白/紅/青緑・青緑/紅/白/赤……となることが確認でき、打ち返し順となる。経糸は丸みのあるS撚の糸で、経糸一組が組織緯と左流れ（ㄨ）の三枚綾組織をつくる。経糸が密に詰まり、顕文緯の露出が少ない。この点は、地を成す青緑の糸のみ多くの部分で2本引き揃えとし、太さを増す工夫によるとみられる。

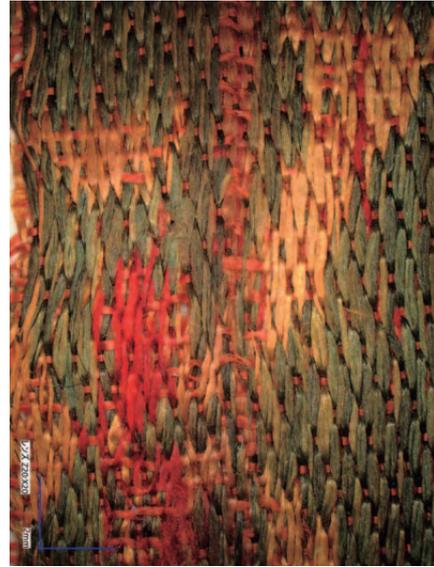
使用状況不明。



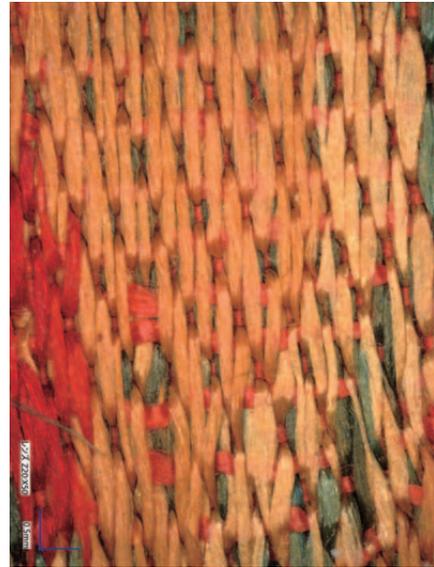
N-306 部分拡大



N-306



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)



顕微鏡画像 (×50) 織耳部分

55 緑地花鳥蝶文錦 ◎N-41

一括

最大片 20.5×33.8cm、断片 26 片、1.5~12.5×7.0~33.5cm、他小断片一括

絹製、複様綾組織緯錦 (d)

経糸：甘撚、生糸か。

①顕文経 赤 (0.12mm)、1 本

②組織経 淡茶 (0.09~0.19mm)、白 (0.13mm、織耳に近い部分)、各 1 本

緯糸：甘撚、練糸。2 色一組 (杼 2 挺)。光沢強く、丸みがあり柔らかい風合い。

①黄 (0.40mm)、緑 (0.31~0.40mm)

密度：経 40 本/1cm、緯 25 組/1cm

文丈：全体 14.5cm、各文様段 5.2cm

文様幅：32cm 程度 (窠間幅：対称軸 15.2~16.0cm)

組織備考：織耳あり。織耳部分には、濃赤 (Z 撚、0.7mm)、紅の太糸 (S 撚、0.69mm) を耳糸として経糸に入れる。織幅不明。

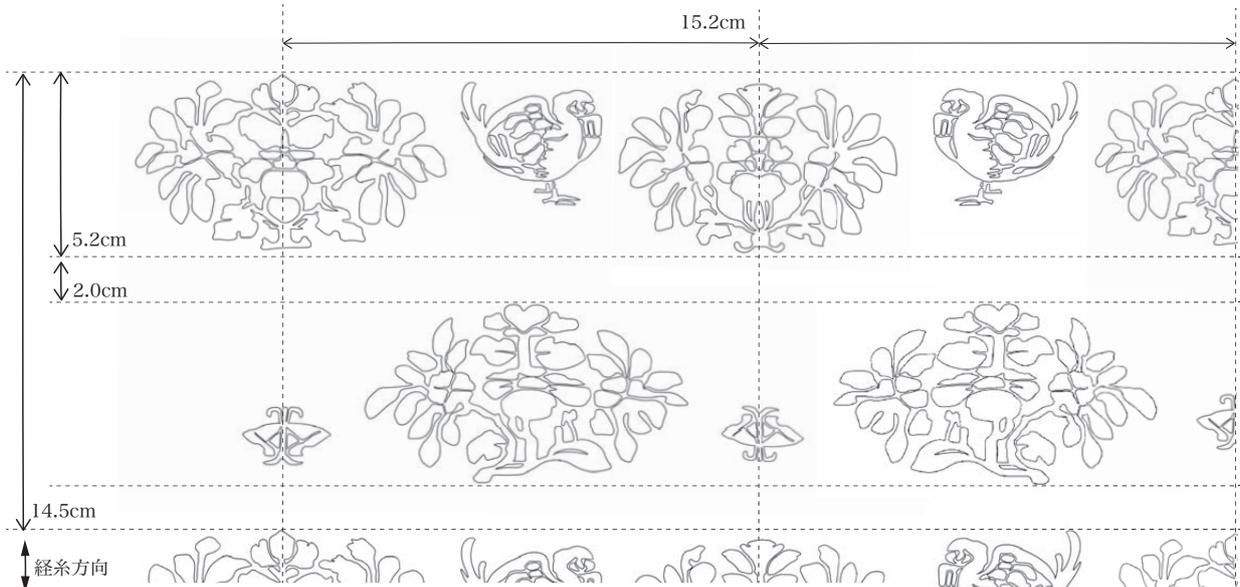
奈良時代・8 世紀

既刊報告 研究図録 26 (1986 年)、MUSEUM574 (沢田 2001 年)

3 種類の草花文を互の目に表わし、その間に横向きの丸みのある鳥、翅を広げた小さな蝶を表わした緯錦である。盛唐の幻想的な唐花文や動物文からはやや離れ、より身近な草花と動物に対するまなごしがのぞく穏やかな表現を示す。

緯糸は、組織経と左流れ (へ) の三枚綾組織をつくる。上記の文様は、黄と緑の 2 色の緯糸で表わし、緯糸は整然と入れられつつも、ふっくらとした風合いがある。この風合いには、組織経と同じく顕文経も細い 1 本の経糸とする点も影響しているよう。緯糸は緑/黄・緑/黄……のように順に入れられ追掛杼となる。左端に織耳があり、織物の端が文様の対称軸で切られていることがわかる。鳥を挟む草花文は同一の植物ではなく、文様一単位の幅としては、蝶文の中心軸から中心軸までの約 15~16cm となる。また、すべての文様要素を含めた文丈は 14.5cm となるが、仮に各段を分けて考えると、無地段 2.0cm、鳥文の段 5.2cm、無地段 2.0cm、蝶文の段 5.2cm となり、大幅な横長矩形の文様単位となる。文様の打ち返しは緯糸方向のみである。7 世紀から 8 世紀初期まで、上下左右に展開する点对称の文様構成が流行したが、本作例には段状に文様を重ねる、中世日本の錦の萌芽もみられる。

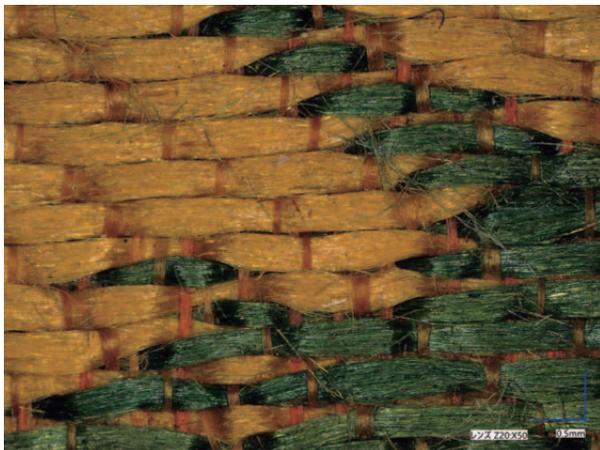
現状は断片となるが、平絹の裏裂や、縁に飾るための濃紫・紫・白の釜糸で組んだ組紐などの一連の付属断片が残り、元来は縁付きの長方形の褥の表裂であったと考えられる。裏裂に「長三尺四寸 廣一尺七寸八分 真神命婦」の墨書があり、褥の寄進者の名が記される。なお、寛政 4 年 (1792) に記された『寺社宝物展覧目録』(柴野彦助・住吉内記 編、伴直方 写、文政 12 年 (1829) 出版) にも「御打敷 唐花蝶鳥萌黄地紋黄紫ノ伏組有之」と記されており、旧状が知られる。



文様略図



N-41



顕微鏡画像 (×50)



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分

56 紫地唐花鳥獸文錦 ◎ N-318-11

一括

小断片のため測定不能

絹製、複様綾組織緯錦 (d)

経糸：甘撚、練糸。

① 顕文経 淡茶 (0.10~0.21mm)、1 本

② 組織経 淡茶 (0.15~0.19mm)、1 本

緯糸：甘撚、練糸。2 色一組 (杼 2 挺)。光沢強く、丸みがあり柔らかい風合い。

① 紫 (0.29~0.43mm)、黄 (0.30~0.40mm)

密度：経 60 本/cm、緯 30 組/cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳あり。端の補強装飾処理はみられないが、耳糸は太めの淡茶とする。織幅不明。

奈良時代・8 世紀

既刊報告 —

N-318-11 の紫地緯錦断片一括に含まれる、紫と黄の 2 色の緯糸を用いた錦である。小断片となっているため文様は確認できないが、献納宝物中の未整理品に同裂が含まれており、その断片から考えると唐花鳥獸文であろう。同様の文様は正倉院の灌頂幡垂端飾に用いられ、8 世紀の緯錦と考えられる。

緯糸は、組織経と右流れ (ノ) の三枚綾組織をつくる。緯糸は整然と入れられつつも、ふっくらとした風合いがある。組織経と同じく顕文経も細い 1 本の経糸とする。緯糸は紫/黄・紫/黄……のように順に入れられ、杼 2 挺の追掛杼となる。



N-318-11



顕微鏡画像 (×100)



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分

57 紫地唐花文錦 © N-318-11/N-319-168/I-331-B-83

一括

N-318-11：測定不能、N-319-168：8.6×4.5cm、8.9×1.7cm、I-331-B-83：6.8×11.5cm

絹製、複様綾組織緯錦（e）

経糸：甘撚、練糸。

①顕文経 淡茶（0.21mm）、1本

②組織経 淡茶（0.19mm）、1本

緯糸：甘撚、練糸。2色一組（杼2挺）。光沢強く、丸みがあり柔らかい風合い。

①紫（0.25mm）、白（0.16mm）

密度：経65本/1cm、緯40組/1cm

文丈：不明（唐花文の大きさは8.0cm）

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

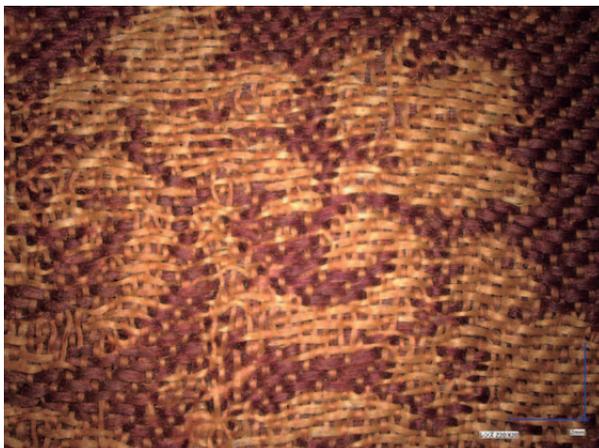
既刊報告 MUSEUM558（沢田1999年）

N-318-11の紫地緯錦断片一括に含まれる、蔓を交差させた八弁の唐花文を織り出した錦である。紫と白の2色の緯糸を用いており、組織経と右流れ（ノ）の三枚綾組織をつくる。緯糸と経糸がほぼ同じ大きさの練糸であるため、組織経が目立ち斑状に見える。このような経糸による緯錦は、献納宝物の錦では他に例が見られないものの、緯糸が紫/白・紫/白……のように順に入り追掛杼となるように見えるため、緯錦と考えられる。

N-319-168では白蓮唐花文錦と縫合されている。具体的な使用方法は不明。



I-331-B-83



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）

58 黄地唐花文錦 I-336-72

1片

15.5×28.3cm

絹製、複様綾組織緯錦 (a)

経糸：甘撚、生糸か。

① 顕文経 淡茶 (0.18mm)、2本引き揃え

② 組織経 淡茶 (0.11~0.14mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。4色一組 (杼4挺)。光沢強い。糸の張りがよく、交替部分は角張る。

① 黄 (0.14mm)、浅葱 (0.15mm)、淡紫 (0.18mm)、藍 (0.17mm)

密度：経45本/1cm、緯50組/1cm

文丈：推定21cm (対称軸10.5cm)

文様幅：推定20.4cm (窠間幅：対称軸10.2cm)

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

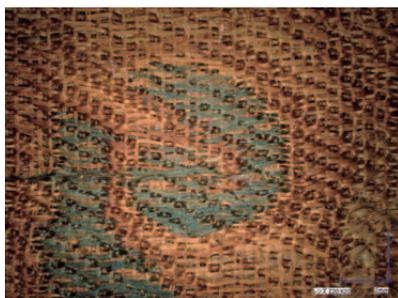
既刊報告 MUSEUM658 (沢田2015年)、科研報告118~119頁 (2018年)

主文は四重に広がる花卉に柘榴果を付す華麗な唐花文である。さらに副文として、中心を八稜形とする柘榴果パルメット文の間に、小さなパルメット文を付加した八葉文を、互の目に表わしている。主文の唐花文の方が副文より一回り大きい。緯糸の入り方は折目正しいが、緯糸はやや細く、糸の張りも緩い。顕微鏡写真に示した部分では、緯糸は淡紫/藍/黄/浅葱の順に入っているように見える。この4色一組の緯糸の一組が、組織経と左流れ(ㄣ)の三枚綾組織をつくっている。顕文経は、細かい色糸交替の部分も大きな色面の部分も2本引き揃えのまま緯糸を押し上げている。経糸方向、唐花文の中心から四葉文の中心軸まで10.5cm、また、緯糸方向では10.2cmであり、ほぼ正方形の文様単位となる。法隆寺伝来の唐花文緯錦のなかでは大きな文様単位である。

使用状況は不明であるが、曲線を描いて裁断されている。



I-336-72



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経糸の動き



顕微鏡画像 (×50) 緯糸の交替

59 白茶地蓮唐花文錦 N-46-4/N-319-168/I-336-73/I-331-B-43・72

一括

N-46-4：21.7×29.6cm、9.0×51.8cm、N-319-168：20片。42.3×53.8cm、8.6×14.0cm、11.0×31.4cm、0.5~3.5×1.2~10.5cm、
I-336-73：10.2×27.4cm、I-331-B-43：9.3×16.7cm、B-72：5.5×20.0cm

絹製、複様綾組織緯錦 (a)

経糸：甘撫、生糸か。

①顕文経 淡茶 (0.20mm)、2本引き揃え

②組織経 淡茶 (0.17mm)、1本

緯糸：甘撫、練糸。4色一組 (杼4挺)。光沢強い。

①淡緑 (0.19mm)、淡紅 (0.22mm)、白茶 (0.23mm)、青緑 (0.19mm)

密度：経40本/1cm、緯45組/1cm

文丈：推定29cm (対称軸19.5cm)

文様幅：17.7cm (窠間幅：対称軸8.8cm 顕文緯1本を軸とする)

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM558 (沢田1998年)、MUSEUM658 (沢田2015年)、科研報告116~117頁 (2018年)

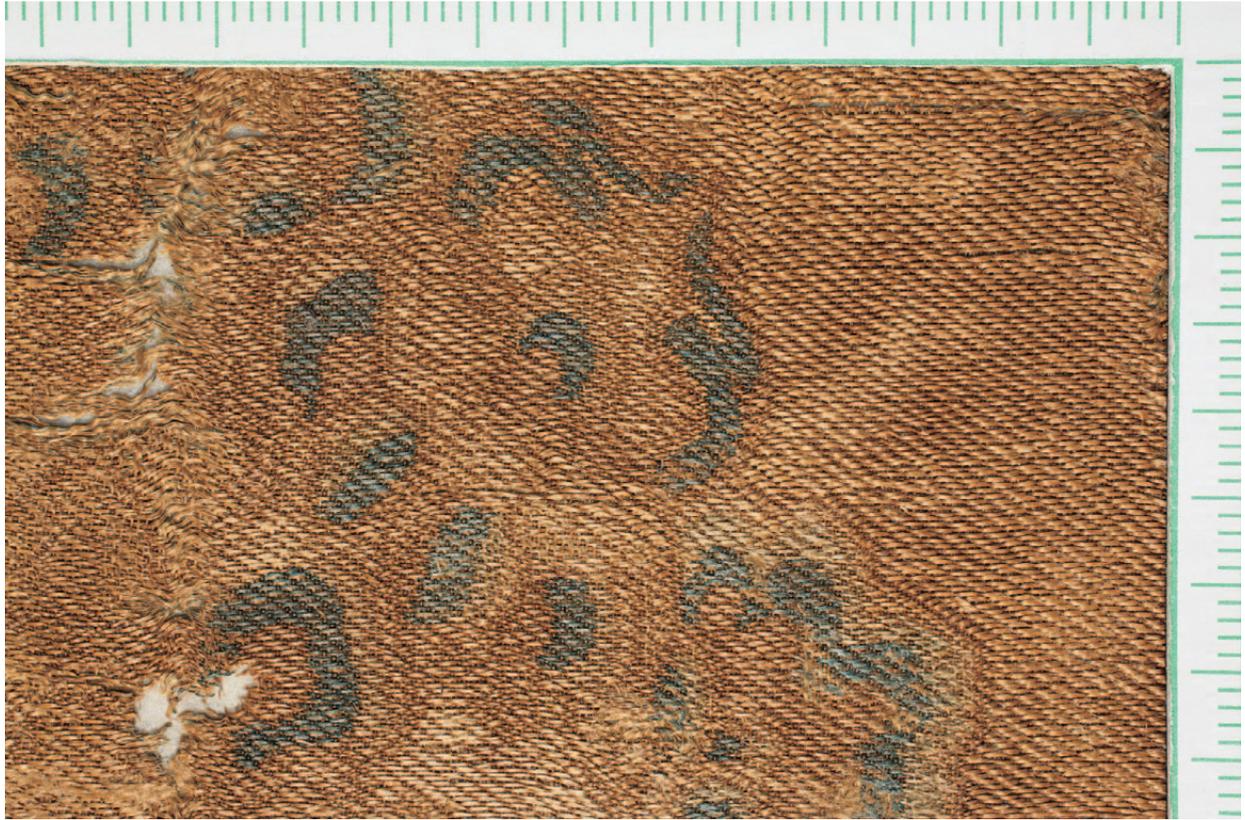
中心に蓮華文を置いた十六弁の唐花文を主文とし、副文としてパルメット四葉文が変形した八葉文を表わした緯錦である。いかにも8世紀の華麗な唐花文であるが、法隆寺にも所蔵断片があり、正倉院裂の混入品ではない。法隆寺伝来の緯錦の幅を示す一例である。

青緑以外は褪色し、色の差がわかりにくい、表面の淡色の糸1本が脱落する部分で、裏面に回った糸に淡色2色と青緑の糸が見えるので全4色と判断できる。この4本の緯糸の一組が、組織経と左流れ (ㄣ) の三枚綾組織をつくっている。組織経は1本、顕文経を2本引き揃えとする通例の綾組織緯錦で、この経糸のために緯糸の張りがよく、経糸との交錯部分で角張って見える。緯糸は、淡緑と白茶の順番に検討の余地があるものの、淡緑/紅/白・青緑/淡緑/紅/白/青緑……のように順に入れられ追掛杼となる。経糸方向の唐花文の中心から四葉文の中心までで19.5cm、また、緯糸方向に8.8cmであり、縦長矩形の文様単位となる。

I-336-73は曲線で裁断されている。N-319-168は紫地唐花文錦と縫合されており、同様の組み合わせの断片が法隆寺にも残されている。具体的な使用方法は不明ながら、寸法からみて当初は褥に仕立てられていたとも考えられる。



N-319-168



N-319-168 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50) 経糸露出部

60 緑地唐花文錦 ◎ N-318-12/I-336-70/I-331-B-76・78

一括

N-318-12: 5.4×9.2cm、I-336-70: 10.7×16.5cm、I-331-B-76: 3.9×14.5cm、B-78: 14.5×5.5cm

絹製、複様綾組織緯錦 (b)

経糸: 甘撚、生糸か。

① 顕文経 茶 (0.16mm、1本 0.09mm)、2本引き揃え

② 組織経 茶 (0.16mm)、1本

緯糸: 甘撚、練糸。4色一組 (杼4挺)。

① 青緑~緑 (0.37mm)、淡黄 (0.28mm)、濃紫 (0.39mm)、赤 (0.29mm)

密度: 経 40本/1cm、緯 30組/1cm

文丈: 13cm (対称軸 6.5cm)

文様幅: 9.6cm (窠間幅: 対称軸 4.7cm 組織経 1本を軸とする)

組織備考: 織耳あり、端の耳糸は現存せず。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM662 (沢田 2016年)、科研報告 116~117頁 (2018年)

二重花卉の唐花文と、中心を八稜形とするパルメット八葉文を互の目に表わした緯錦である。主文の唐花文と副文には明確な大きさの差はない。緯糸の入り方は折目正しいが糸の張りは緩く、顕微鏡写真 (×50) に示した部分では、緑/紫/黄/赤の順に追掛杼となる。この4本の緯糸の一組が、組織経と左流れ (へ) の三枚綾組織をつくっている。顕文経は2本引き揃えとするが、広い色面の部分では2本引き揃えで交錯して緯糸を押し上げ、輪郭線などの部分でこの顕文経が1本ずつ個別に動き、細かく文様を表出している部分がある。経糸方向、唐花文の中心から四葉文の中心軸までで6.5cm、また緯糸方向に4.7cmであり、やや縦長矩形の文様単位となる。唐花文緯錦のなかではやや小ぶりといえる。

使用状況は不明であるが、曲線に裁断され、織耳同士を縫い代1cm程度で縫合している。



I-336-70



顕微鏡画像（×50）緯糸の交替順



顕微鏡画像（×50）顕文経の動き



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）2本引き揃えの経糸

61 紫地唐花文錦 ◎ N-45-1-1・2

一括

N-45-1-1：8.0×10.5cm、12.2×10.2cm、21.2×25.9cm、N-45-1-2：22片。0.6～2.5×6.0～15.0cm

絹製、複様綾組織緯錦（b）

経糸：甘撚、生糸か。

①顕文経 淡茶（0.16mm）、2本引き揃え

②組織経 淡茶～淡紅（0.16mm）、1本

緯糸：甘撚、練糸。6色一組（杼6挺）、7色一組（杼7挺）。

①紫（0.31mm）、淡緑（0.38mm）、黄（0.35～0.43mm）、浅葱（0.24mm）、紺（0.24mm）、白（0.35mm）

②淡緑（0.38mm）、紺（0.24mm）、黄（0.21mm）、紫（0.34mm）、朱紅（0.29mm）、白（0.17mm）、浅葱（0.24mm）

密度：経40本/1cm、緯30組/1cm

文丈：10.5cm（対称軸5.3cm）

文様幅：9.0cm（窠間幅：対称軸4.5cm 顕文経1本を軸とする）

組織備考：両端の織耳あり。左端は、一番端に強いS撚の紅の太い単糸、次に強いZ撚の紅の単糸（0.49mm）。右端は強いS撚の白の単糸（0.49mm）のみ確認できるが、もとは強いZ撚の単糸も入っていたと思われる。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM574（沢田2001年）

三重に花卉を広げる華麗な唐花文と、中心を八稜形とするパルメット八葉文を、互の目に表わした緯錦である。主文の唐花文と副文には明確な大きさの差はない。緯糸の入り方は折目正しいが糸の張りはやや緩い。顕微鏡写真に示した部分では、緯糸①は紫／黄／紺／白／浅葱／淡緑の順、緯糸②は淡緑／紺／黄／紫／朱紅／白／浅葱の順に入っているように見える。この6色一組、あるいは7色一組の緯糸の一組が、組織経と左流れ（へ）の三枚綾組織をつくっている。顕文経は2本引き揃えとするが、広い色面の部分では2本引き揃えで交錯して緯糸を押し上げ、輪郭線などの部分で顕文経が個別に動き、細かく文様を表出している部分がある。経糸方向、唐花文の中心から四葉文の中心軸までで5.3cm、また緯糸方向では4.5cmで、やや縦長矩形の文様単位となり、唐花文緯錦のなかでは比較的小ぶりである。織耳近くは文様を表出せず、1cmほどを残して四葉文の中心を通る対称軸を文様の端とする。

使用状況不明。



N-45-1-1 部分



N-45-1-1 織耳部分拡大



顕微鏡画像 (×20) パルメット文部分 緯糸①交替



顕微鏡画像 (×50) 唐花文部分 緯糸②交替

62 黄緑地唐花文錦 I-336-75

1片

24.0×3.2cm

絹製、複様綾組織緯錦 (b)

経糸：①顕文経 淡茶 (0.27mm、1本0.13mm)、S撚、2本引き揃え

②組織経 淡茶 (0.17mm)、甘撚、1本

緯糸：甘撚、練糸。4色一組 (杼4挺)。光沢強い。

①紫 (0.21~0.24mm)、淡緑 (0.26~0.39mm)、
白 (0.13~0.22mm)、淡茶 (紅か、0.23mm)

密度：経40本/1cm、緯35組/1cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM658 (沢田2015年)、科研報告123頁 (2018年)

三重に花卉を広げる唐花文の緯錦である。現状は唐花文の四分の一ほどが残っており、副文には四葉文ではなく、梅花に似た五弁花と丸みのある葉を主要素とした唐草文を配している点がめずらしい。顕微鏡画像 (×50) に示した部分では、淡緑/紫/白/淡茶 (紅) の順に追掛杼となる。白と淡茶はやや色差がわかりにくい、糸の交替がみられることから4色とわかる。この4本の緯糸の一組が、組織経と左流れ (ㄥ) の三枚綾組織をつくる。顕文経は広い色面の部分では2本引き揃えで交錯して緯糸を押し上げ、3色以上の糸が細かく交替する箇所では、2本の顕文経が1本ずつ個別に動き、輪郭線などを細かく表現している。顕文経、組織経ともにやや太いためか、緯糸の張りも強く、経糸との交替部分は角張り、全体に整然としてみえる。

使用状況不明。



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)



I-336-75

63 赤地唐花文錦 I-331-B-35・39

一括（各1片）

I-331-B-35：7.5×5.6cm、I-331-B-39：4.9×5.3cm

絹製、複様綾組織緯錦（b）

経糸：甘撫、生糸か。

①顕文経 淡茶（0.13mm）、1本。2本の部分ありか

②組織経 淡茶（0.17mm）、1本

緯糸：甘撫、練糸。4色一組（杼4挺）。経糸に対し非常に太い。

①白（測定不能）、淡黄（0.43mm）、淡緑（0.31mm）、赤（0.48mm）

密度：経35本/1cm、緯17.5組/1cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 —

文様は唐花文かと思われるが、糊の固着、糸の脱落により判別不能。組織経も顕文経ともに緯糸に対して極端に細く、緯糸が平糸の丸みを保ったまま織り入れられる。緯糸は白/淡黄/淡緑/赤……の順に入れられ追掛杼となる。この緯糸が組織経と左流れ（へ）の三枚綾組織をつくっている。一部顕文経が二手に分かれ、個別に文様表出に関わっているとみられる部分があるが、断片のため全体に渡っているかは不明。

使用状況不明。



顕微鏡画像（×50）



I-331-B-35

64 紅地唐花文錦 N-37

一括

最大片 16×2cm、長 15.5cm

絹製、複様綾組織緯錦 (f)

経糸：やや強いS撚、練糸か。

①顕文経 淡茶 (0.18mm)、2本引き揃え

②組織経 淡茶 (0.24mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。5色一組 (杼5挺) か。光沢強く丸みのある糸。

①紅 (0.38mm)、白 (0.34mm)、淡緑 (0.40mm)、濃紫 (0.30mm)、淡黄 (0.33mm)

密度：経 45本/1cm、緯 35組/1cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

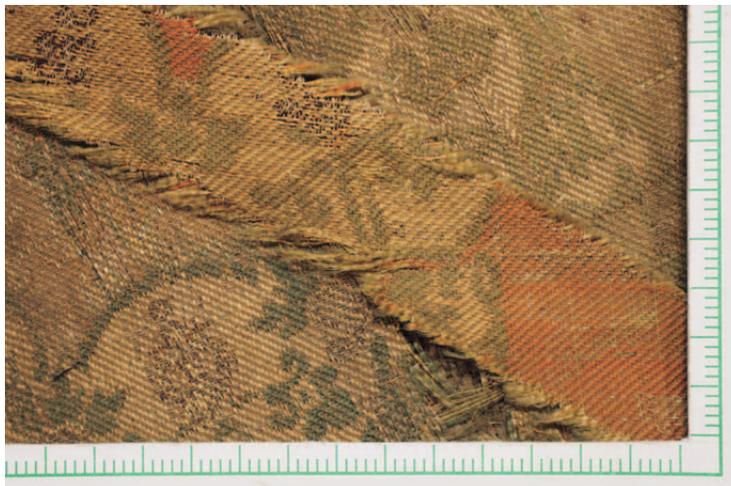
組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

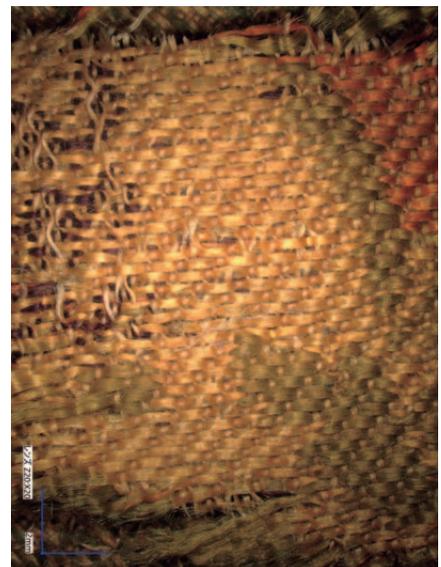
既刊報告 —

四重に花卉を広げる唐花文の緯錦である。パルメット唐草文の蔓を交差させて丸い花卉を形作る例の少ないもので、副文は判別できない。明治時代の模写から、およその文様構成を知ることができる(「法隆寺伝来御物図」)。顕微鏡画像(×20)に示した部分では、紅/白/淡緑/濃紫/淡黄の順に追掛杼となっており、この5本の緯糸の1組が、組織経と右流れ(ノ)の三枚綾組織をつくる。顕文経は広い色面の部分では2本引き揃えて交錯して緯糸を押し上げ、2本の顕文経が1本ずつ個別に動き、輪郭線などを細かく表現している部分がある。顕文経、組織経ともにS撚で、緯糸の張りも緩く、全体にやわらかな風合いをもつ。

「円座具」(N-37)の内張り裂として用いられる。「円座具」は、寺伝では聖徳太子が7歳の時、百濟より伝わった経論を読んだ際に用いたものとされ、江戸時代に製作された収納箱の蓋にも「太子七歳経論御披見之時御座具」と記されている。座具とされるも、麻芯にNo.64の紅地唐花文錦、No.65の青地唐花文錦、No.66の淡緑地唐花文錦、黄色綾などを使った鏡管として用いられた可能性が高い。



N-37 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



N-37 円座具



P-609 法隆寺伝来御物図
永井如雲・石本秋園・石原重盈ほか／写
明治時代・19世紀

65 青地唐花文錦 N-37

一括

最大片 15×17cm

絹製、複様綾組織緯錦 (f)

経糸：やや強いS撚、練糸か。

①顕文経 白 (0.16mm)、1本

②組織経 白 (0.23mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。4色一組 (杼4挺) か。光沢強く丸みのある糸。

①淡黄 (0.26mm)、紅 (0.26mm)、水色 (0.20mm)、紺 (0.25mm)

密度：経 45本/1cm、緯 30組/1cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

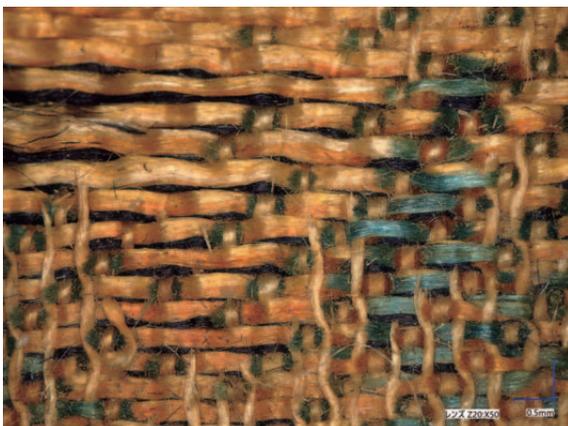
既刊報告 —

四重に花卉を広げる唐花文の緯錦である。唐花文はパルメット唐草文の蔓を交差させて丸い花卉を形づくった特色あるもので、紅地唐花文錦とほぼ同じ文様の同種の錦であるが、顕文経を1本のみとする点に差異がある。顕微鏡写真 (×50) に示した部分では、紺/水色/紅/淡黄の順に追掛杼となっており、この4本の緯糸の一組が、組織経と右流れ (↗) の三枚綾組織をつくる。顕文経、組織経ともにS撚で緯糸の張りも緩く、全体にやわらかな風合いをもつ。

鏡筥に用いられた裂とみられ、青糸縫合糸 (Z撚双糸) が残存し、No.64 の紅地唐花文錦と縫合されている。



N-37 部分拡大



顕微鏡画像 (×50)

66 淡緑地唐花文錦 N-37

一括

幅 1cm

絹製、複様綾組織緯錦 (f)

経糸：やや強いS撚、練糸。

①顕文経 白茶 (0.27mm)、2本引き揃え

②組織経 白茶 (0.21mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。5色一組 (杼5挺) か。光沢強い。

②淡緑 (0.26mm)、紫 (0.19~0.27mm)、
黄 (0.24mm)、白 (0.28mm)、紅 (0.28mm)

密度：経 45 本/1cm、緯 45 組/1cm

文丈：不明

文様幅：10cm (窠間幅：対称軸 5cm)

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 ー

さわやかな淡緑地の緯錦で、現状の帯状断片は、唐花文の副文のパルメット四葉文の中心部分であろう。淡緑/紫/黄/白/紅の順に追掛杼となっており、この5色の緯糸の1組が、組織経と左流れ(へ)の三枚綾組織をつくる。一部、右流れになっている部分がある(顕微鏡画像(×30)中央部淡緑糸)、これが地綜統の操作順の誤り、または変化を加えたものかについては、小断片につき確認できない。また、2本の顕文経が1本ずつ個別に動き、輪郭線などを細かく表現している部分がある。顕文経、組織経ともにやや強いS撚で、表面の緯糸が脱落した部分では顕文経が振れて曲線を描く。この点は、N-37に用いられる3種の錦に共通する。緯糸は、経糸との交替部分は角張るが張りが甘く、全体に柔らかな風合いをもつ。

鏡筒の縁に用いられた裂と考えられる。



N-37 部分拡大



顕微鏡画像 (×30)

67 青緑地唐花文錦 I-336-71・76

3片 (2片、1片)

I-336-76 : 17.6×6.6cm、8.4×6.6cm、I-336-71 : 3.2×9.5cm

絹製、複様綾組織緯錦 (g)

経糸：甘撚、生糸。

①顕文経 淡茶 (0.13mm)、1本

②組織経 紫 (0.12mm)、1本

緯糸：甘撚、練糸。4色一組 (杼4挺)。光沢強い。緩く入るため太さに幅あり。

①青~青緑 (0.20~0.31mm)、白 (0.20~0.29mm)、黄 (0.18mm)、紅 (0.20~0.25mm)

密度：経 50 本/1cm、緯 35 組/1cm

文丈：不明

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

奈良時代・8世紀

既刊報告 MUSEUM658 (沢田 2015 年)、662 (沢田 2016 年)、科研報告 124~125、130 頁 (2018 年)

蓮花様の花を四方に付加した唐花文の緯錦で、パルメット四葉文の蔓が八稜形を描く。文様の大きさは不明であるが、四葉文の中心から葉の先端までで8cm程度あり、唐花文を含めて考えるならば比較的大きな文丈であったことが想定される。

経糸は緯糸に対し細く、顕微鏡画像(×50)に示した部分では、緯糸は青緑/白/黄/紅の順に追掛杼で入れられているようである。本調査によって、本作例の地組織が右流れ(へ)の緯五枚綾組織であることであることが確認された。紫色の組織経が露出する組織点から数えると、緯糸が組織経4本分を越して裏に沈んでいる。また、裏面では経五枚綾組織であることが確認でき、複様の五枚綾組織緯錦とみなすことができる。文様構成は盛唐の唐花文錦に近いものの細部表現には硬化が認められる。9世紀の縹子地緯錦にやや先じる時代のもので、8世紀後半にかかるとみられる。これまでほとんど確認例のない組織の綾組織緯錦であり、たいへん貴重である。法隆寺に伝来する上代緯錦のなかでは、技術面からみて時代の下る特徴をもつ錦といえる。

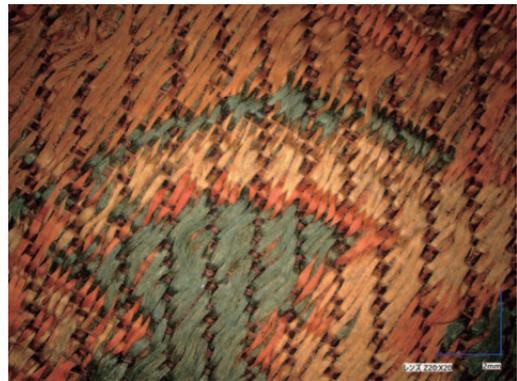
使用状況は不明であるが、中央に折山があり、同裂と縫合されたバイヤス状の断片である。



I-336-76



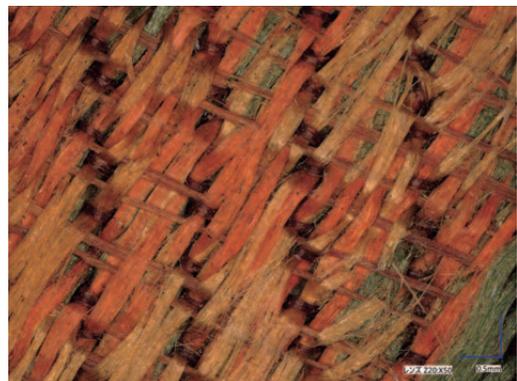
裏面 拡大 経糸方向 (↖) 経五枚綾組織



顕微鏡画像 (×20) 経糸方向 (↘) 唐花文部分



顕微鏡画像 (×50) 経糸方向 (↘) 緯糸交替



顕微鏡画像 (×50) 経糸方向 (↘)
四葉文部分、顕文経露出部分

経緋

68 赤地火焰宝珠入雲気繫文経緋 ◎N-25

1流 (部分)

29.0×18.7cm

絹製、経緋 (平組織)

経糸：S撚、練糸。0.24mm。箇所により、白、藍、淡黄、

青緑、赤、濃紫

緯糸：甘撚、生糸か。赤 (0.25mm、生糸か)

密度：経 50 本/1cm、緯 22.5 越/1cm

文丈：推定 22.5cm

文様幅：14.5cm (対称軸 7.2cm)

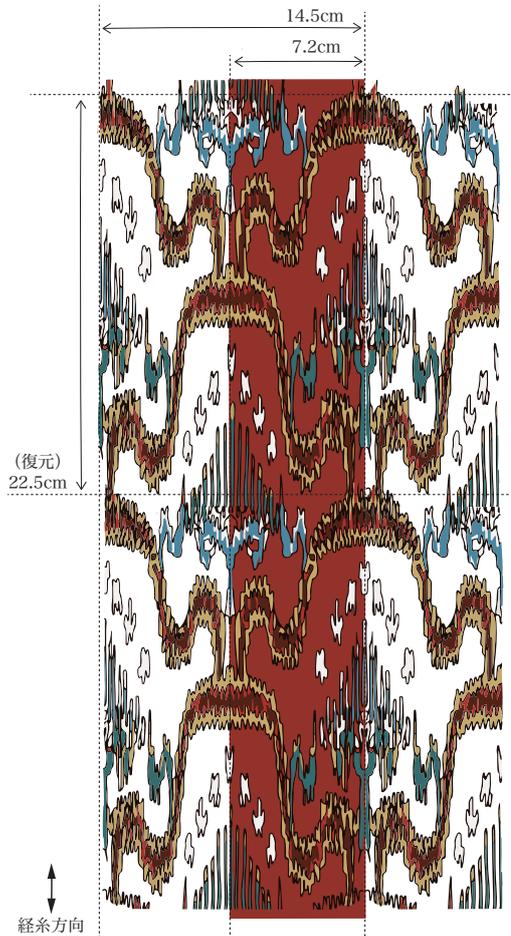
組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

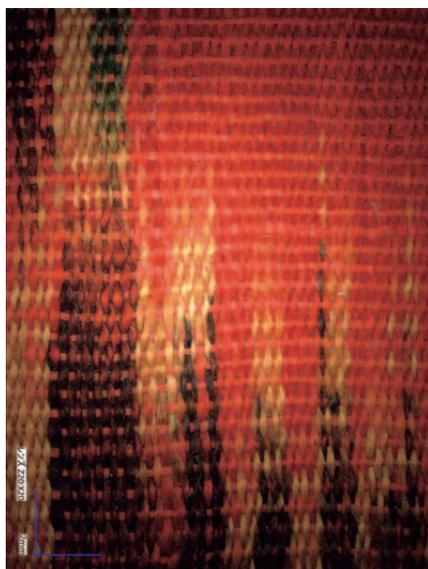
既刊報告 研究図録 2 (1986 年)、MUSEUM667 (沢田 2017 年)

赤色の地に雲気文を重ね、内部に火焰宝珠を配しており、文様単位が概ね判明する点で貴重である。経緋は経糸を糸の状態で作りに即して数回に分け括り染めし、この経糸と緯糸とで平組織に織った先染めの織物である。緋括り (染色の際に経糸をまとめて防染する) の本数は 6 本を単位とし、白に藍を重ねる部分、また淡黄に染めてから藍を重ね青緑にする部分、淡黄に赤、濃紫を重ねる部分が確認された。本作例では箄目がみられず、緯糸密度に対して経糸が非常に密である。経糸を螺旋に輪奈状にして織機にかけるために、箄を入れない輪状整経による製作であることを裏付ける。

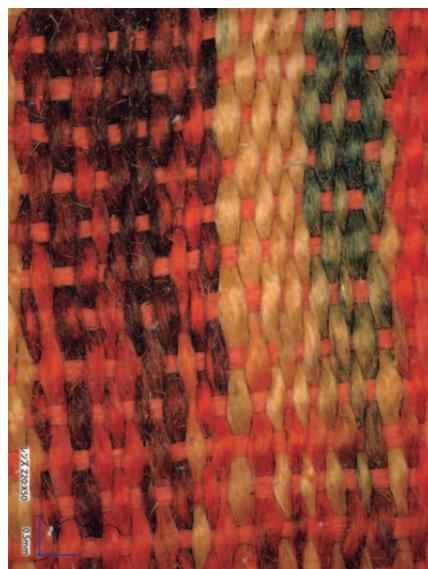
灌頂幡一具の大幡で、「広東平絹大幡」(N-25) の第一坪の坪裂に用いられた経緋である。この種の織物は江戸時代より「広東錦」とも呼ばれてきた。



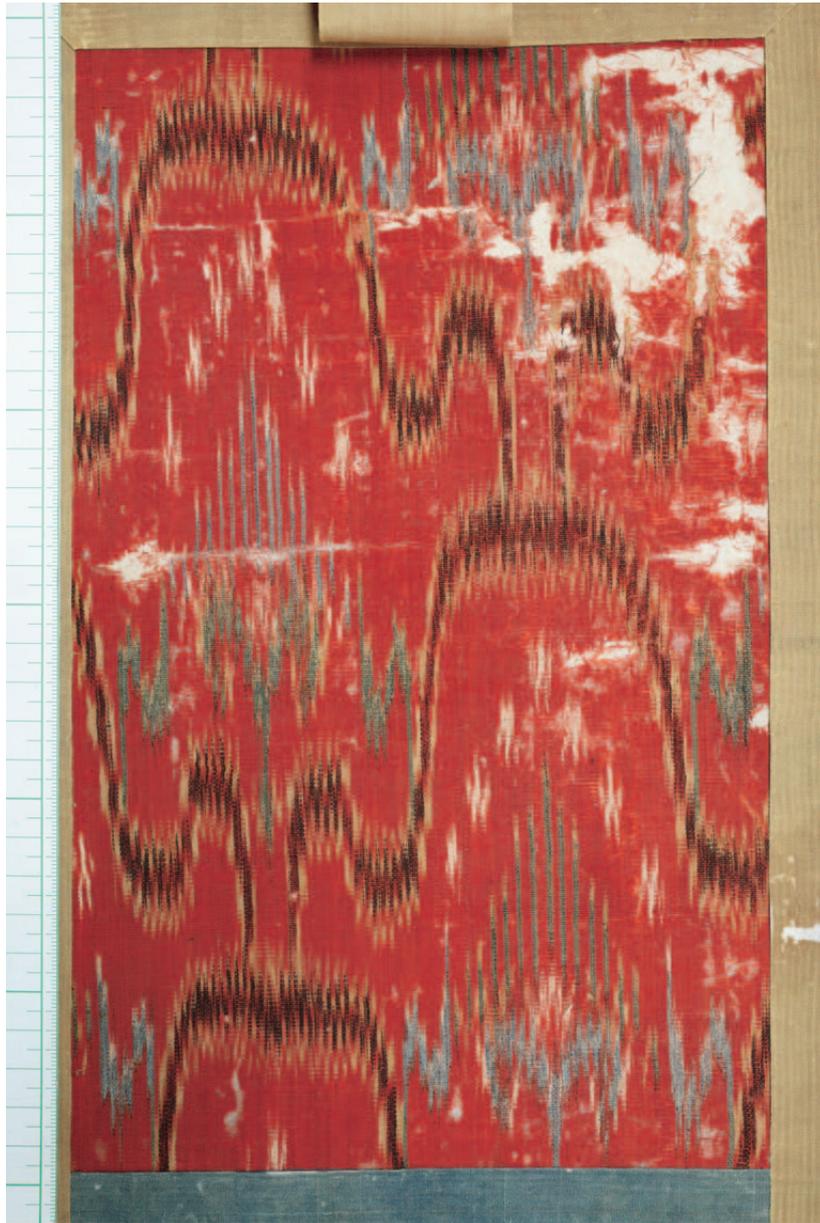
文様略図



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)



N-25 部分拡大

69 赤地獅嚙火焰宝珠入雲氣繫文経絣

◎ N-24・24 付属 / ◎ N-28-2 / ◎ N-318-13 / I-336-90 / I-331-B-55・60・67

一括

N-24 : 34×19cm、N-28-2 : 68.8×27.0cm、N-318-13 : 最大片 11.8×4.5cm、I-336-90 : 22.6×3.4cm、5.6×4.0cm、22.6×5.5cm、I-331-B-55 : 17.7×14.0cm、I-331-B-60 : 12.8×6.5cm、I-331-B-67 : 2.6×4.8cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S捻、練糸。0.17～0.27mm。箇所により白、藍、淡黄、青緑、赤、濃紫

緯糸：甘撚、生糸か。赤（0.25mm、生染か）

密度：経 80 本 / 1cm、緯 30 越 / 1cm

文丈：推定 30cm

文様幅：推定 14.5cm（対称軸 7.2cm）

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

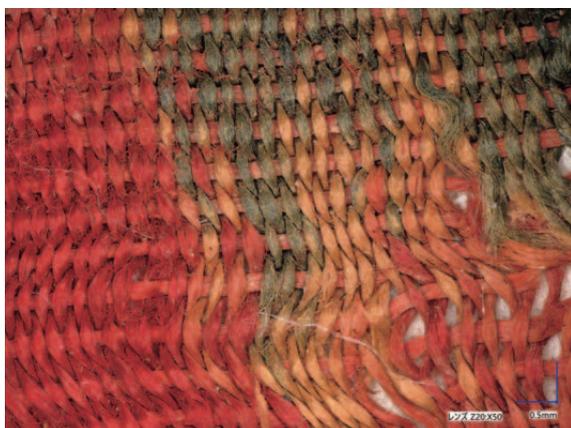
既刊報告 MUSEUM662（三田・沢田 2016 年）、667（沢田 2017 年）、科研報告 144～145 頁（2018 年）

獅嚙文の眉の部分山岳状の雲氣文を形づくり、そのなかに火焰宝珠を納める。古代中国の文様の雰囲気をとどめつつも、直接的には朝鮮半島との関わりが指摘される。経括りの本数は 6 本を単位とし、白に藍を重ねる部分、また淡黄に染めてから藍を重ね青緑にする部分、淡黄に赤、濃紫を重ねる部分がある。緯糸密度に対して経糸が非常に密である。

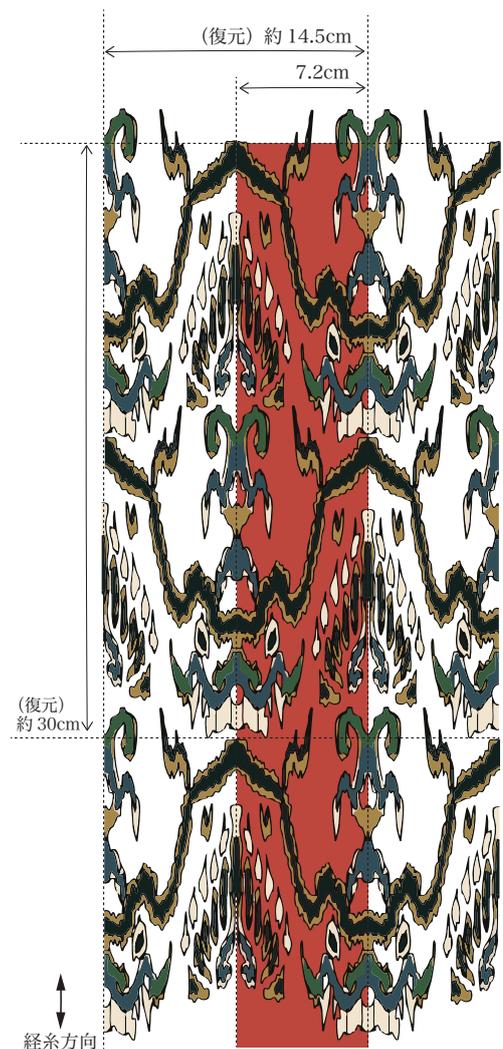
灌頂幡一具の大幡で、法隆寺系の幡のなかでも最大長を有する「広東綾大幡」(N-24) の第一坪の坪裂に用いられた経絣である。大幡残欠では、現状では縁裂に挟まれた部分の周辺のみが残っており、小さな断片となって分かれる。大幡は、元明天皇の一周忌齋会に際して元正天皇が養老 6 年（722）に奉納した「秘錦灌頂幡」に比定されているが、法隆寺では幡の第一坪に貴重な裂を用いる傾向があり、古様の文様からみてこの経絣自体の年代はやや遡ることも想定される。



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）



文様略図



I-336-90

70 紫地植物文入雲気繫文経絣 ◎ N-27-2/I-331-B-46・51・52・56・57・59

一括

N-27-2 : 45.5×7.5cm、24×19cm、9.5×5.5cm、15×3cm、5.0×13.5cm、I-331-B-46 : 21.0×3.7cm、B-51 : 26.2×4.2cm、B-52 : 16.2×4.5cm、B-56 : 23.8×15.8cm、B-57 : 20.1×3.2cm、B-59 : 4.7×9.1cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.18～0.21mm。箇所により白、青、黄、青緑、紫

緯糸：甘撚～S撚、練糸か。赤（0.19mm）

密度：経 65 本/1cm、緯 27.5 越/1cm

文丈：46cm

文様幅：15.4cm（対称軸 7.7cm）

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

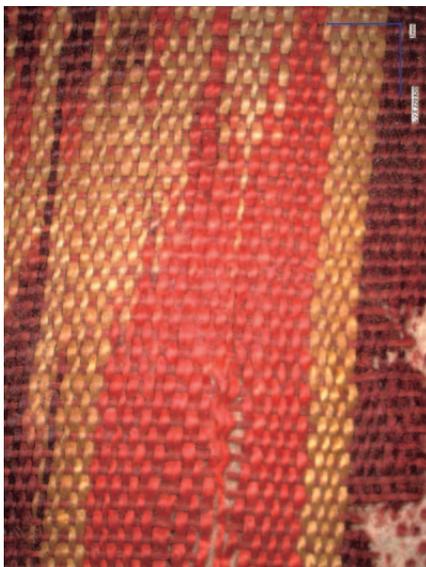
既刊報告 研究図録6（1986年）、MUSEUM667（沢田2017年）

雲気文の内部にはパルメット四葉文の変形とみられる植物文が配される。点对称の文様構成である。絣括りの本数は最低6本を単位とし、白に藍を重ねる部分、また黄に染めてから藍を重ね青緑にする部分、淡黄に赤、紫を重ねる部分がある。本作例では箄目がみられず、緯糸密度に対して経糸が密である。地綜統の取り付けの際に誤って経糸2本ずつとした部分が確認できる。

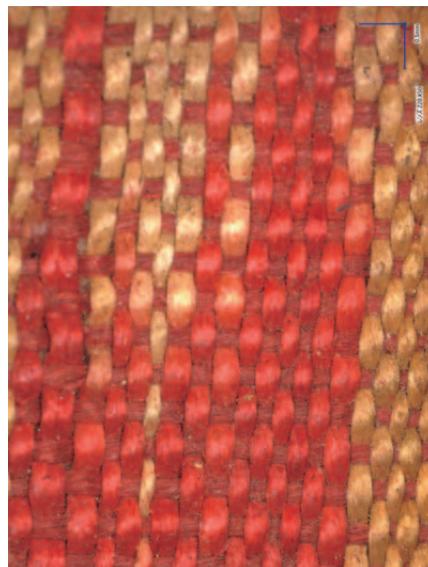
「広東綾幡残欠」（N-27-2）の第一坪の坪裂に用いられており、この幡は二重の緑や綾地綾文綾の使用など8世紀の幡の代表的な特徴を備えている。



文様略図



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50） 紅色部分



N-27-2 部分

71 赤紫地花入雲気繫文経絣 I-336-91-2

1枚

22.3×14.4cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.23～0.26mm。白、青、黄、緑、赤、赤紫

緯糸：S撚、生糸か。淡赤茶（0.26mm、生染か）

密度：経60本/1cm、織耳部分で経100本/1cm、緯30越/1cm

文丈：不明。復元約34cm

文様幅：不明。復元約17cm（対称軸8.5cm）

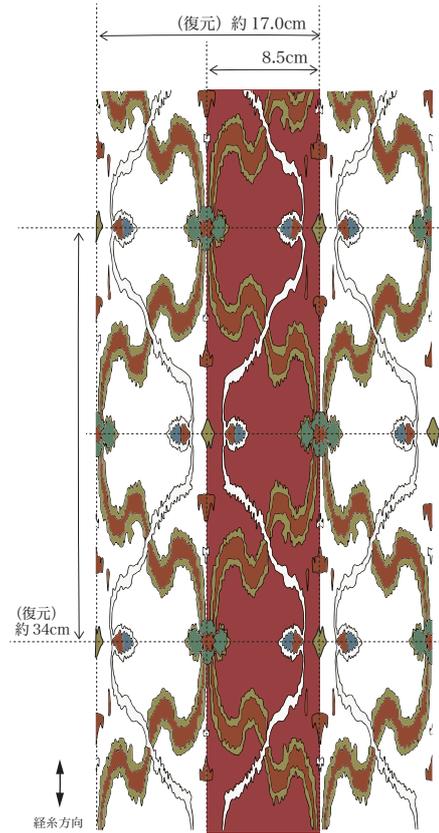
組織備考：織耳あり。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM662（三田2016年）、667（沢田2017年）、科研報告146～147頁（2018年）

やや紫がかった赤地に山岳状の雲気繫文を配し、交点に四弁花文を置き、これと交差するように立涌状の柵を配した経絣である。7世紀中頃の制作と考えられる法隆寺金堂多聞天像の袴に、類似の文様が描かれていることが指摘される。織耳部分には、経糸を緑3本、赤5本分、色帯になるように入れて密度を高めている。絣括りの本数は6本を単位とし、白に藍・黄、黄に藍・赤・紫を重ねている。使用状況不明。

使用状況不明。



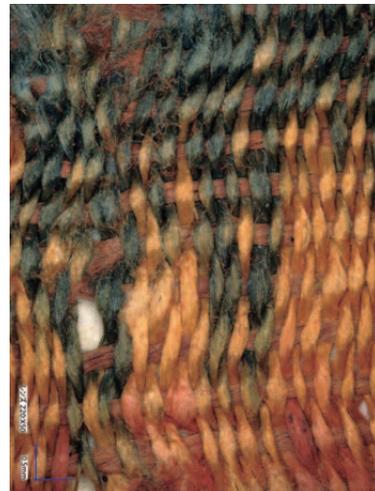
文様略図



I-336-91-2



顕微鏡画像（×50） 織耳部分



顕微鏡画像（×50）

72 紫地花繫文経絣 N-46-5-1・2/◎ N-318-14

一括

N-46-5-1 : 33.0×31.2cm、N-46-5-2 : 29.0×6.4cm、11.8×5.4cm、15.0×9.2cm、34.2×13.3cm、
N-318-14 : 3.6×1.2cm、2.8×2.8cm、3.6×0.8cm、0.5×0.4cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.24～0.27mm。橙、茶紫。糸の毛羽立ち少なく平滑。

緯糸：甘撚～S撚、練糸。茶紫（0.23mm、経糸の地色と同色）

密度：経 65 本/1cm、緯 30 越/1cm

文丈：8.3～9.3cm

文様幅：3.2～3.7cm

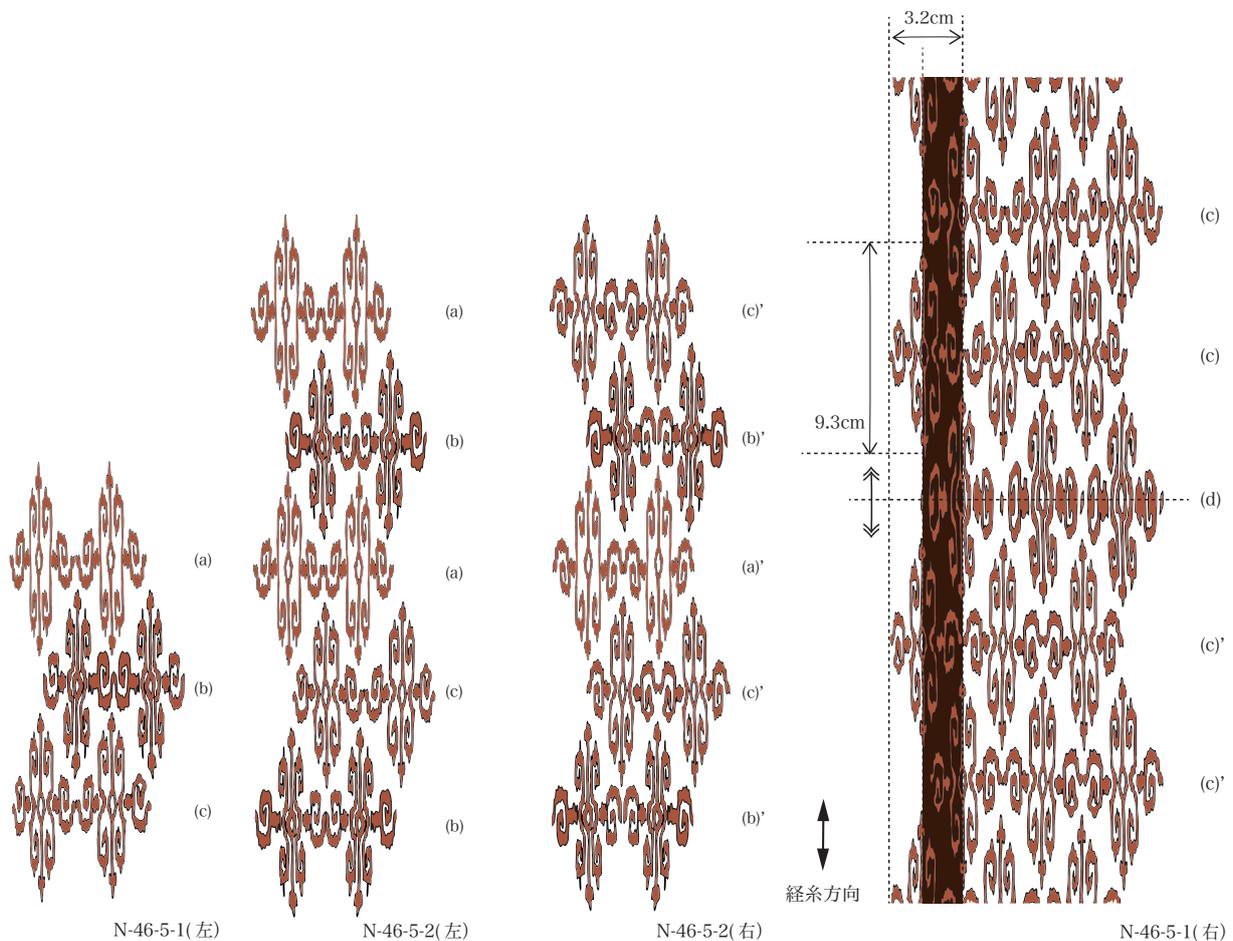
組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM574（沢田 2001 年）、667（沢田 2017 年）

紫地に蕨手文風の数種類の花文を繫いだ経絣である。現存寸法が大きく、文様構成が推定できる。花文には、(a) 頂部の蕨手文が内向きで中央部にかけて伸びる線が真っ直ぐのもの、(b) 外向きで中央部にかけて輪郭線が湾曲するもの、(c) 内向きで中央部にかけて線が湾曲するもの、(d) 側部の渦文が二重のもの、4種類があり、その線対称の文様 (a)'～(c)' が確認された。配置に明確な規則性は見受けられないが、(d) を境に、花文が線対称になる断片がある (N-46-5-1 右)。拵括りの本数は 4 本を単位とし、橙に紫を重ね染めている。箄目がみられず、経地合の織物ではあるが、経糸と緯糸のバランスはよく、緯糸が露出する。

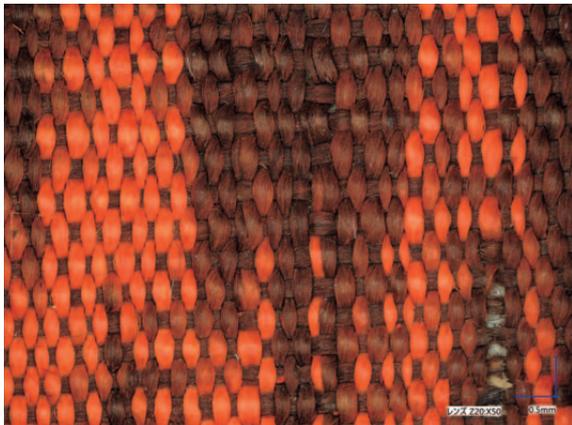
N-46-5 はそれぞれ 2 枚接ぎの断片である。中央部を黄緑の縫合糸（黄緑、Z撚双糸）で繫いでおり、縁に経錦の残片がある（絹製、複雑綾組織経錦、経糸：赤 0.14～0.30mm、白 0.24mm、青 0.18mm、別の箇所にも黄糸も残り、赤・黄・青の部分もあったようである。緯糸：茶 0.16mm）。本来は錦の縁を備えた褥であったかと推測される。



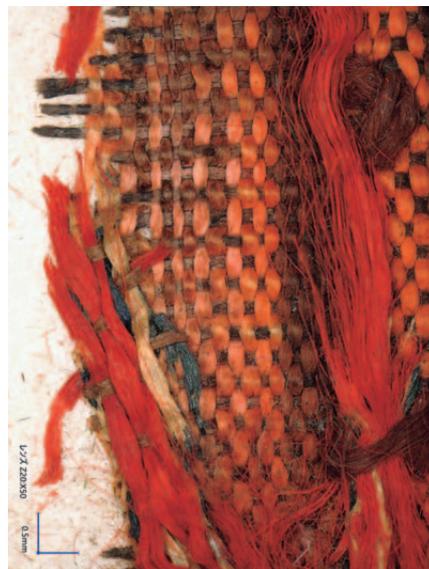
文様略図



N-46-5-1



顕微鏡画像 (×50)



顕微鏡画像 (×50) 縁裂部分

73 赤地花繫文経絣 N-315・315 付属/I-331-B-45

一括

N-315：最大片 31×14cm、I-331-B-45：15×2cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.18-0.21mm。白、青、黄、緑、赤、濃茶。

糸の毛羽立ち少なく平滑。

緯糸：強いS撚、練糸。赤（0.17~0.20mm）

密度：経 50~70 本/1cm、緯 25 越/1cm

文丈：11.8cm

文様幅：2.5cm（対称軸 1.2cm）

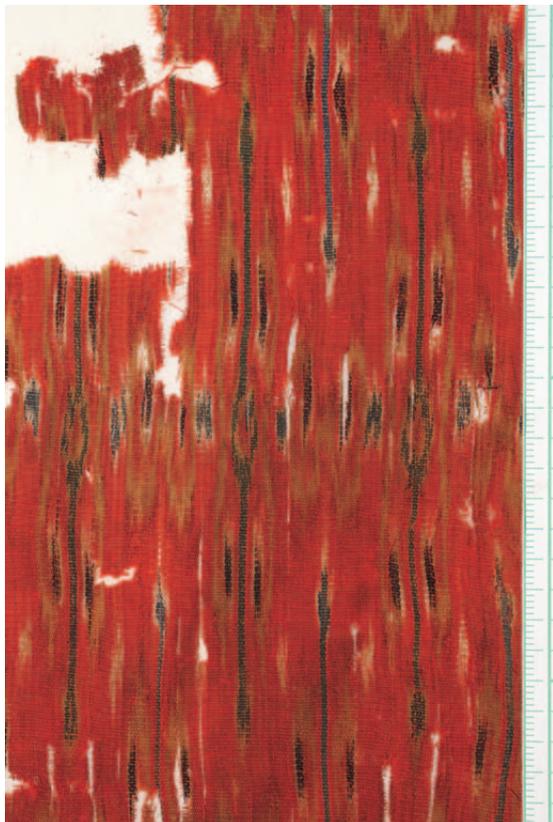
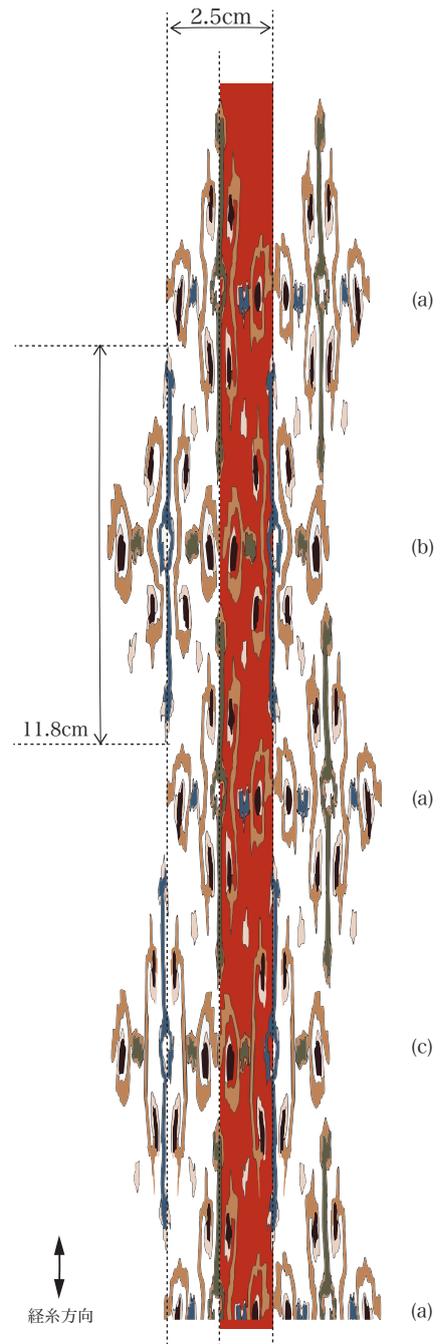
組織備考：織耳なし。筈目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

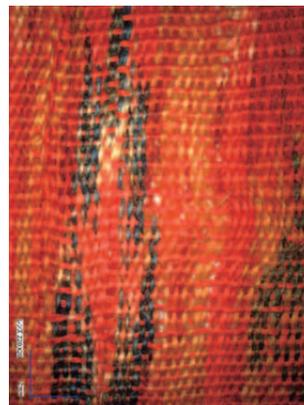
既刊報告 研究図録 17（1986年）、MUSEUM667（沢田 2017年）

赤地に蕨手文風の数種類の花文を繫いだ経絣である。花文には、(a) 頂部の蕨手文が内向きで中央部にかけて線が湾曲するもの、(b) 外向きで中央部にかけて輪郭線が湾曲するもの、(c) 内向きで中央部に伸びる線が真っ直ぐなもの、以上3種類が確認された。絣括りの本数は最低4本を単位とし、白に藍、黄に藍、濃茶、地を赤として重ね染めている。

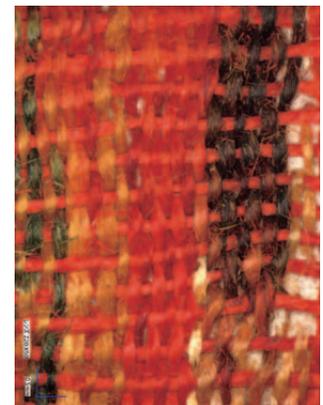
「広東幡残欠」(N-315)の幡身第一坪に用いられている。この幡も二重縁で、8世紀以降の幡に多い特徴を示している。



N-315 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

74 赤地花繫文経絣 I-336-89

1枚

37.5×14.4cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.14～0.22mm。白、青、黄、緑、赤、濃茶

緯糸：甘撚、練糸。赤（0.17～0.20mm）

密度：経60～80本/1cm、緯35越/1cm

文丈：不明。一つの花文の丈は8.5cm

文様幅：3.7cm

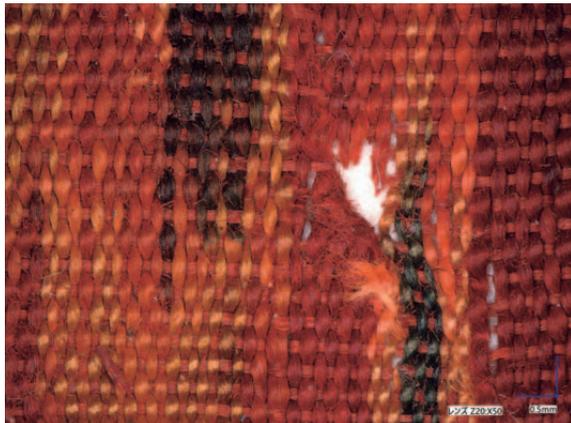
組織備考：織耳あり。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

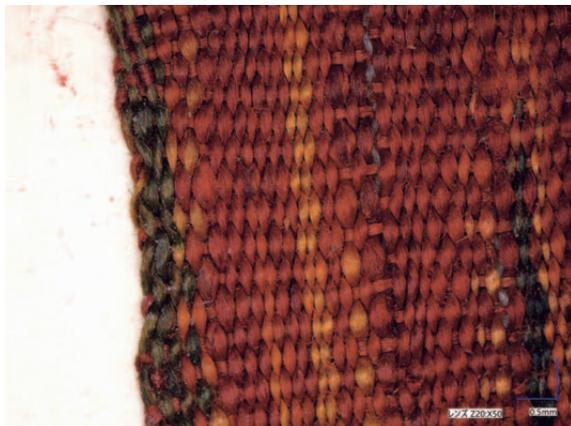
既刊報告 MUSEUM662（三田2016年）、667（沢田2017年）、670（沢田2017年）

赤地に蕨手文風の数種類の花文を繫いだ経絣である。花文には、(a) 頂部の蕨手文が外向きで中央部にかけて線が湾曲するもの、(b) 内向きで中央部に伸びる線が真っ直ぐなもの、(c) 内向きで中央部に伸びる線が湾曲するもの、以上3種類が確認された。絣括りの本数は4本を単位とし、白に藍・黄、黄に藍・赤・濃茶を重ねている。箄目がみられず、経地合の織物ではあるが、経糸と緯糸のバランスはよく、緯糸が露出する。織耳部分はやや経糸密度を高める。

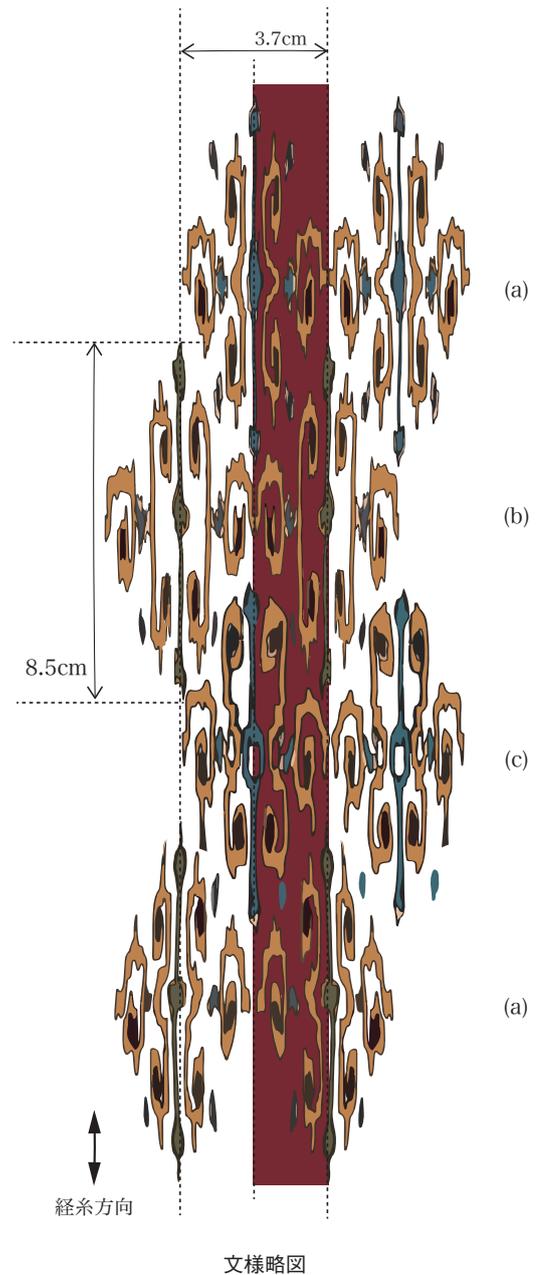
仏幡残欠かと思われるが具体的な使用状況は不明。中央に縫合痕（2～4mm幅）あり。



顕微鏡画像（×50）



顕微鏡画像（×50） 織耳部分





I-336-89

75 紫地宝珠文経絣 ◎ N-27-1 / ◎ N-45 付属

一括

N-27-1 : 8.6×2.7cm、9.5×2.3cm、11.0×1.8cm、6.5×0.5cm、4.3×1.3cm、N-45 付属 : 測定不能

絹製、経絣 (平組織)

経糸 : S 撚および Z 撚。練糸。0.18~0.23mm。箇所により、白、青、淡黄、青緑、紫、濃紫

緯糸 : 甘撚、練糸。紫 (0.21mm)

密度 : 経 70 本 / 1cm、緯 25 越 / 1cm

文丈 : 不明

文様幅 : 不明

組織備考 : 織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

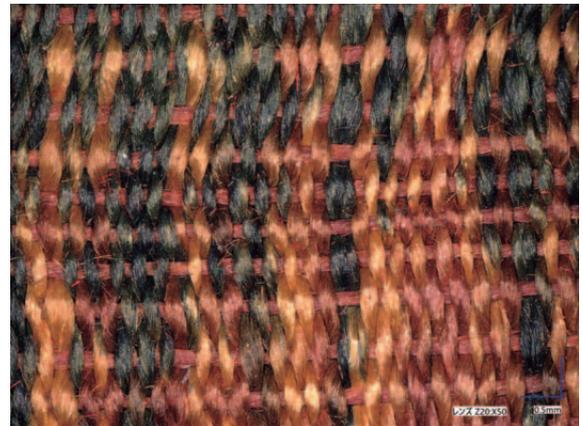
既刊報告 研究図録5 (1986年)、MUSEUM667 (沢田2017年)

宝珠を配した経絣と思われるが、残欠のため文様単位を推定できない。絣括りの本数は8本を単位とし、白に藍を重ねる部分、また淡黄に染めてから藍を重ね青緑にする部分、淡黄に紫を重ねる部分がある。箄目がみられず、緯糸密度に対して経糸が非常に密である。地綜統を整える際に誤って経糸2本ずつとした部分も確認できる。断片ではあるが、経糸にS撚、Z撚の糸が交互に入り、シボにより表面が波打つように見える点が注目される。

「広東綾幡残欠」(N-27)の第一坪の坪裂に用いられた経絣で、この幡は和銅7年(714)の墨書銘が記された基準作といえ、二重の緑や綾地綾文綾の使用など8世紀の幡の代表的な特徴を備えている。



N-27-1 部分



顕微鏡画像 (×50) 淡黄、青緑、紫



顕微鏡画像 (×50) 淡黄、紫、濃紫

76 赤紫地雲気文経緋 N-304-1

一括

幅 10.8cm

絹製、経緋（平組織）

経糸：S撚、練糸。0.18～0.31mm、箇所により、黄、赤、青、紫

緯糸：S撚、練糸。赤（0.33mm）

密度：経 60 本/1cm、緯 25 越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

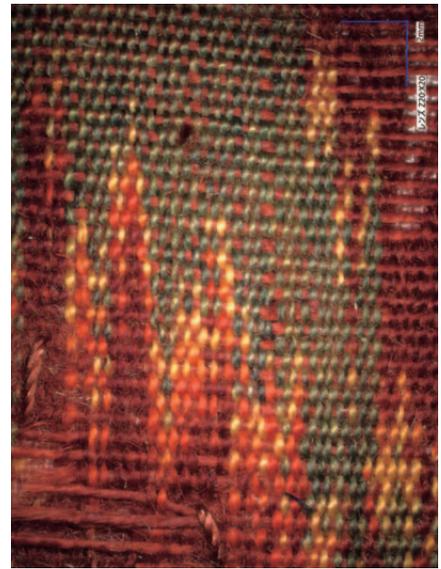
既刊報告 研究図録 11（1986年）

雲気文を配した経緋と思われるが、残欠のため文様単位を推定できない。緋括りの本数は最低6本を単位とし、白に藍を重ねる部分、また黄に染めてから赤や藍を重ねる部分があり、最終的に地となる紫を重ねる。紫の部分に繊維の抜けが目立つ。箄目が見られず、緯糸密度に対して経糸が非常に密である。平織のための地綜統に経糸を通す際に、誤って経糸2本ずつとした部分が確認できる。本作例では経糸、緯糸ともにやや強いS撚である。

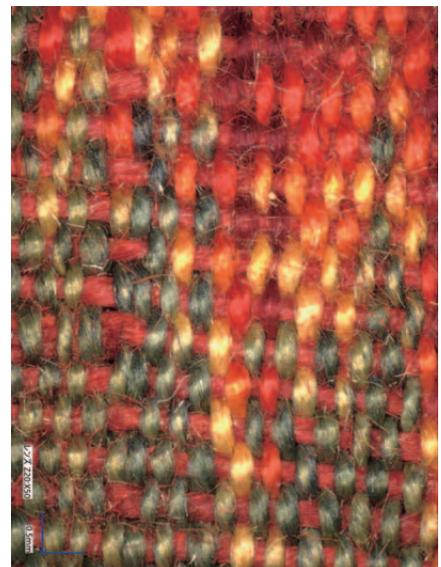
二重の縁と丸形金銅金具をもつ「広東綾幡残欠」(N-304)の第一坪の坪裂に用いられた経緋である。



N-304-1 部分拡大



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）

77 赤地四葉文経絣 ◎ N-45 付属／◎ N-318-13／I-331-B-54・58

一括

N-45 付属：測定不能、N-318-13：6.8×4.5cm、
I-331-B-54：2.5×2.5cm、I-331-B-58：6.0×7.5cm、
絹製、経絣（平組織）

経糸：S 撚および Z 撚、練糸。S 撚は 0.20～0.28mm、
Z 撚は 0.21～0.29mm でほぼ同じ太さの糸である。
黄、緑、赤、赤紫

緯糸：S 撚、練糸。赤（0.28mm）

密度：経 55 本／1cm、緯 25 越／1cm

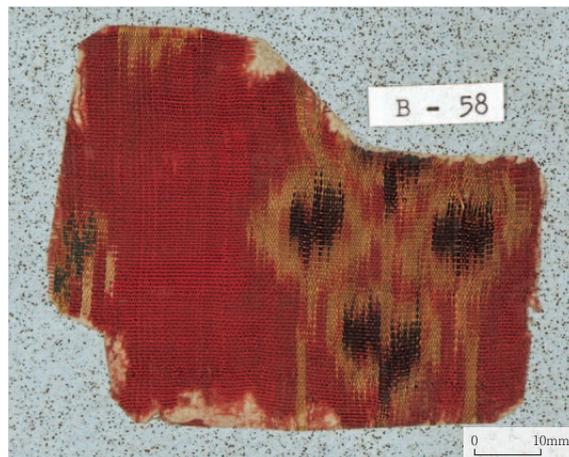
文丈：不明

文様幅：不明。

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7 世紀

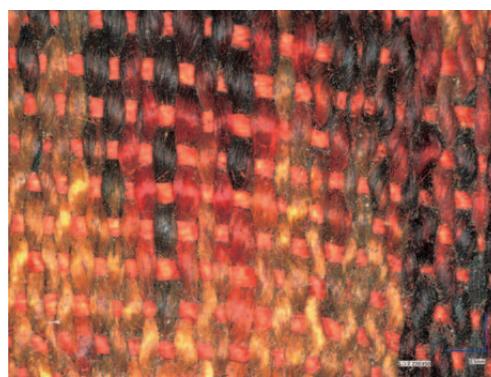
既刊報告 MUSEUM662（三田 2016 年）、667（沢田 2017 年）



I-331-B-58

断片のため全体文様は不明であるが、赤地に四葉文が表わされている。絣括りの本数は 8 本を単位とし、黄、赤、紫を重ねている。箄目はみられない。本作例では経糸が強く撚られた S 撚、Z 撚の糸が 2 本ずつ交互に入るように見える。

使用状況不明。



顕微鏡画像（×50）

78 紫地四弁花雲気文経絣 I-336-91-1

一括

7.2×5.1cm、4.3×1.7cm、3.5×7.6cm

絹製、経絣（平組織）

経糸：S 撚、練糸。0.10～0.31mm、箇所により黄、緑、
赤、赤紫

緯糸：S 撚、練糸。淡茶（0.23mm）

密度：経 60 本／1cm、緯 30 越／1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7 世紀

既刊報告 MUSEUM662（三田・沢田 2016 年）、
667（沢田 2017 年）

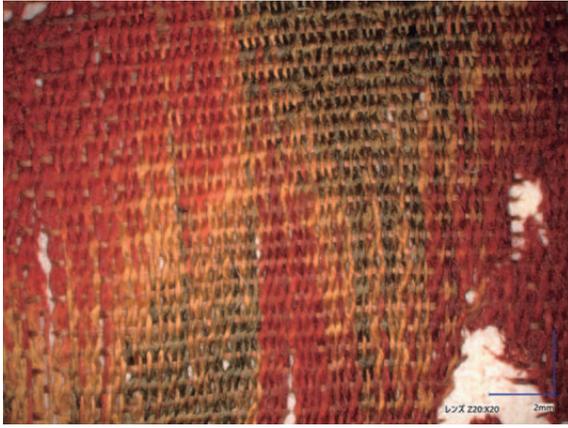
断片のため全体文様は不明であるが、紫地に四弁花文が表わされている。

絣括りの本数は 6 本を単位とし、黄、赤、紫を重ね染めている。

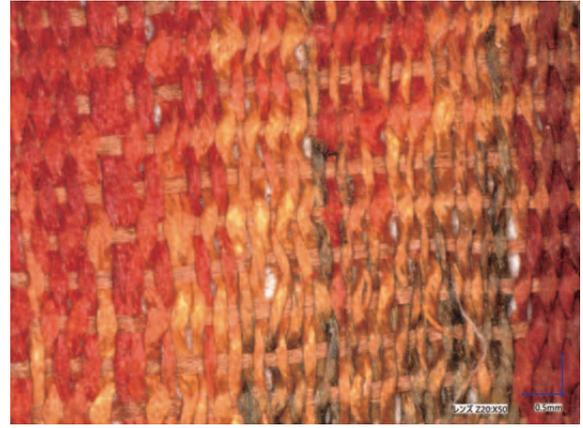
使用状況不明。



I-336-91-1



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)

79 赤地雲気文経緋 I-331-B-53

1片

12.5×8.8cm

絹製、経緋(平組織)

経糸：強いS撚、練糸。0.23~0.28mm、光沢強い。

白、黄、緑、赤

緯糸：甘撚、生糸か。濃茶(0.21mm)

密度：経50本/1cm、緯15越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。箄目なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM667 (沢田 2017 年)

断片のため全体文様は不明であるが、赤地に雲気文が表わされる。緋括りの本数は6本を単位とし、白に黄、藍、赤を重ね染めている。箄目は見られない。本作例では経糸に対し緯糸の打ち込みが非常に少なく、S撚の経糸がやや緩んだ状態で織られている。

三角形の形状、縫合痕等からみて、天蓋垂飾の一部と考えられる。



I-331-B-53



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×100)

綴織

80 金地龍蓮華文綴織 © N-32-付属3/I-336-83/I-331-B-21

一括

N-32-付属3：復元長4.2×21.5cm、4.4×19.8cm、I-336-83：4.1×9.6cm、I-331-B-21：4×13cm

絹製・金属箔糸・綴織・平組織

経糸：強いZ撚の双糸、練糸。淡茶（素色、0.30mm）

緯糸：平箔糸（和紙に金属箔を貼り、裁断した糸。裁断幅は0.67～0.95mm）、緑（0.44mm）、赤（0.34mm）、紫（0.23mm）、淡茶（0.28mm）、淡紅（0.34mm）、紺（0.28mm）、いずれも光沢が強く練糸か。

密度：経25本/1cm、箔糸の部分は緯15越/1cm、絹糸の部分は緯64越/1cm

文丈：復元長4.4cm

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

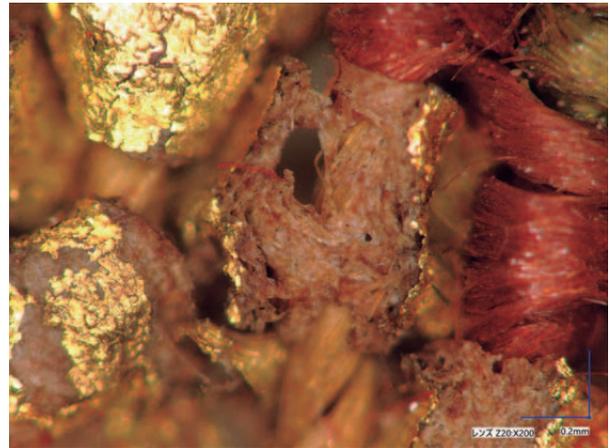
既刊報告 MUSEUM574（沢田2001年）、662（沢田2016年）、科研報告135頁（2018年）

現状ではほとんど剥落しているが、地の部分に金箔糸を用いている。絹の絵緯を織り嵌めていく綴織（緯糸）は、中国では唐代以降の出土例が報告されるが、本作例は蓮華、雲気のごとく湾曲するパルメット文で挟まれた宝珠文、龍文を一行に配し、南北朝時代の気分が漂う点が注目される。織り入れた緯糸は、流し織技法によって密に詰めているので、ほとんど地経が表出せず、文様が象嵌されたように見える。現状では縁にあたる色帯の部分のみ、通常の平織として緑の緯糸を均等に織り入れており、地経が表出し、小整文のような効果を生んでいる。各色の緯糸の折り返し部分には把釣目と呼ばれる綴織特有の孔があるが、地を平箔糸で埋め、一本把釣と流し織技法を併用した細い輪郭線を色面の間に入れていたため、目立たない。地となる金色の平箔糸は、一越ごとに裁断はせず、他の色糸と同様に色面に沿って折り返しながら1本で織り入れている。本調査において、箔糸は片面のみに箔の加工をしており、胎となる紙は、目視では、繊維の形状からみて麻紙の可能性が高いとの意見を得た。金色の箔には一部赤紫に変色し、また青みのある黒灰色が覗く部分がみられる。今回の調査では金属箔や接着剤の主成分は確認できていない。

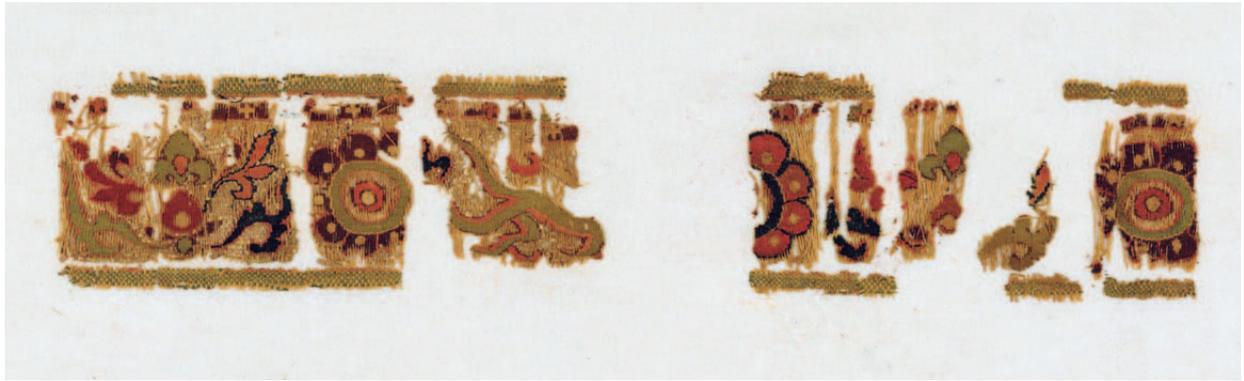
I-336-83は、上辺に淡茶（0.58mm）、下辺に藍（0.49mm）の縫合糸が残る。使用状況不明。



顕微鏡画像（×50）平箔糸折り返し部分



顕微鏡画像（×200）平箔糸断面拡大



N-32-付属 3



顕微鏡画像 (×20) 一本把釣、流し織技法



顕微鏡画像 (×50) 縁部分

81 葱花山形文綴織 ◎ N-312/I-336-82/I-331-B-8・9・12

一括

N-312：4.9×20.2cm、I-336-82：4.8×28.2cm、I-331-B-8：4.5×8.7cm、I-331-B-9：3.5×9.0cm、I-331-B-12：4.2×6.5cm

絹製、綴織・平組織

経糸：Z 撚双糸（ゆるくS 撚に下撚した糸を合わせた糸）、練糸。淡茶（素色、0.31mm）

緯糸：①淡茶（0.39mm）、②濃紫（0.41mm）、③赤（茜、0.36mm）、④朱紅（茜、0.37mm）、⑤黄（0.39mm）、⑥濃青（藍、0.46mm）、⑦淡青（藍、0.31mm）、⑧緑（0.44mm）、⑨淡緑（0.31mm）、⑩茶（0.40mm）、いずれもゆるい練糸で光沢強く丸みがある。②濃紫は他の色系に比べ糸の摩滅が進む。

密度：経 15 本/1cm、緯 50～60 越/1cm

文丈：復元長 4.9cm

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM574（沢田 2001 年）、662（沢田 2016 年）、科研報告 134 頁（2018 年）

十字と山形文、宝珠文の文様帯を並べた綴織で、宝珠と山形文は、段階的な色調を重ねる縹綉彩色のような表現である。宝珠文が葱坊主に似ていることから、葱花と呼ばれている。粗く整経した地経に、絵緯を文様に沿って織嵌めていくことによって文様を表現する。織入れた緯糸は、流し織技法によって密に詰めていくので、ほとんど地経が表出せず、文様が象嵌されたように見える。各色の緯糸の折り返し部分には把釣目と呼ばれる綴織特有の孔がある。宝珠の輪郭線部分は、一本把釣技法と流し織技法によって表わしている。地は緯糸①、赤色の宝珠は緯糸②③④⑤、青色の宝珠は緯糸④⑥⑦、緑色の宝珠は緯糸②⑧⑨④の配色とする。

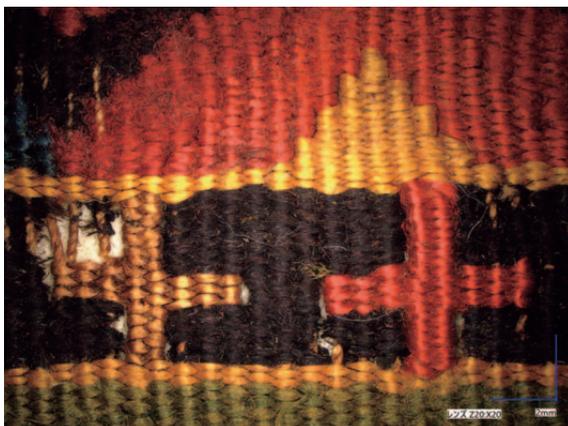
使用状況は不明だが帯状の装飾帯であり、「天寿国繡帳」（奈良・中宮寺所蔵）の縁との説もある。



N-312



I-336-82



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50） 経糸露出部分

82 大型連珠円文綴織 I-336-84・85

一括（各1片）

I-336-84：14.0×14.7cm、I-336-85：13.2×13.3cm

絹製、綴織

経糸：S撚単糸、白茶（素色か、0.31mm）

緯糸：いずれも練糸で光沢強く丸みがある。⑤赤のみやや細い糸

①赤紫（0.34mm）、②淡緑（0.24mm）、

③藍（0.21mm）、④白（素色、0.26mm）、

⑤赤（茜か、0.15～0.23mm）、⑥白茶（0.42mm）、

⑦淡橙（0.24mm）、⑧緑茶（0.34mm）

密度：経15本/1cm、緯30～54越/1cm

文丈：不明

文様幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

飛鳥時代・7世紀

既刊報告 MUSEUM662（三田・沢田2016年）、670（沢田2017年）、科研報告136～137頁（2018年）

大型の連珠円文に、天衣あるいは雲気のような文様が残る。全体の文様構成は不鮮明であるが、連珠円文の中に獅嚙文を配した意匠であると指摘される（文様略図参照）。I-336-84では連珠の文様帯が上辺と右辺に見え、連珠格子文の中に連珠円文を入れていたと推測される。

粗く整経した地経に、平箔糸を含む絵緯を文様に沿って織嵌めていくことによって文様を表現し、緯糸は流し織技法によって密に詰めていくので、ほとんど地経が表出せず、文様象嵌されたようにみえる。各色の緯糸の折り返し部分には把釣目と呼ばれる綴織特有の孔がある。宝珠の輪郭線部分は、一本把釣技法と流し織技法によって表わしている。地は緯糸①または緯糸②、連珠円文は緯糸③に円を緯糸④とし、円の輪郭を緯糸⑧、全体の輪郭を緯糸⑦とする。雲気かと思われる文様部分では、同じく輪郭を緯糸⑦、内部を緯糸③①⑧の配色とする。

使用状況不明。



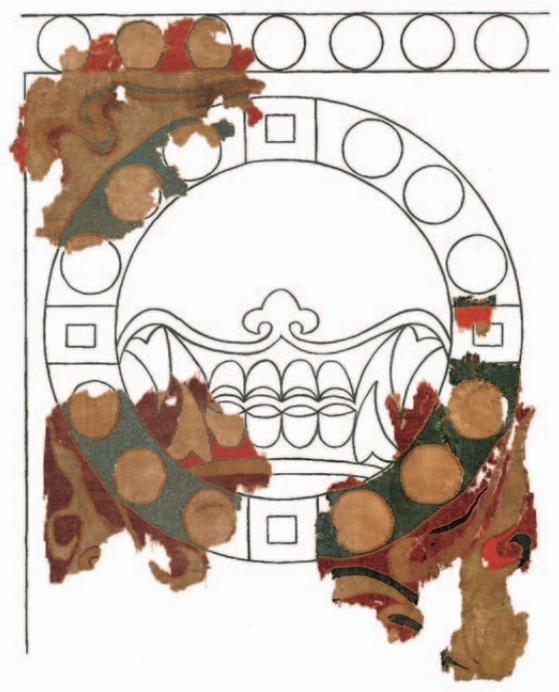
I-336-84・85



顕微鏡画像（×20）



顕微鏡画像（×50）
把釣目部分



文様略図

右下の裂は正倉院宝物「紫地連珠文綴織」
（中倉202、第90号櫃、玻璃装古裂第73号）

中世の錦

83 紅地菊花入唐草円文錦 N-44

1枚

79.8×82.3cm（幅41.3cm、41.0cmの錦を2枚接ぎ合わせ）

絹製、経三枚綾地絵緯浮文織

経糸：白（0.16mm）、甘襴、練糸か。

緯糸：甘襴、練糸。3色一組（杼3挺）、2色一組（杼2挺）。太さに幅あり。

①紅（0.61mm）、黄（0.59mm）、緑（0.49mm）

②紅（0.42mm）、黄（0.41mm）、白（0.23～0.67mm）

③紅（0.46mm）、黄（0.41mm）、紫（0.54～0.88mm）

④紅、黄

密度：経60本/1cm、緯20組/1cm

文丈：13.1cm。円文の段6.3cm、唐草文の段6.8cm

文様幅：6.0cm（対称軸2.9cm）

組織備考：織耳あり。織幅は推定43cm。箄目が入り、経糸2本が吹き寄せとなる。

鎌倉時代・13～14世紀

既刊報告 ー

紅地に唐草文と二重円文からなる複雑な構成の文様を浮文で表わす。意匠化が進み不鮮明であるものの、内円を五つの菊文とした二重円文の外円に、雲文とともに鶴文のような文様を表わし、唐草文の段では、四方に延びる葉文の中心に菊文、連結部に菱花文を置く。このような円文外縁部に鶴文を置く文様構成は、中国東北部遼代墳墓から出土した宋代の錦にも見られる。唐草文を斜め方向に展開させて空隙を埋め、文様が段に区切られず調和している点も、宋代の染織品、ならびにそれらを日本で吸収した有職織物の延長にあるといえ、鎌倉時代ごろの製作と考えられる。

白の経糸と、撚りのない釜糸の紅の地緯糸を左流れ（ㄨ）の経三枚綾に織り、絵緯を浮かせて文様を表わす。地経のほかに浮糸を抑える経糸（搦経）はない。一見、縫取織の一種である唐織物にも近いが、本作例の絵緯は織幅いっぱいを通しており、緯糸1越毎に1本（全越）を入れた地絡全通織の一種である。二重円文と葉文の中央部分が緯糸①～③、葉文部分は緯糸④にあたる。線対称の文様が上下左右に展開する。織耳部分では0.33mm程度の太糸を経糸に3本ほど入れて補強している。

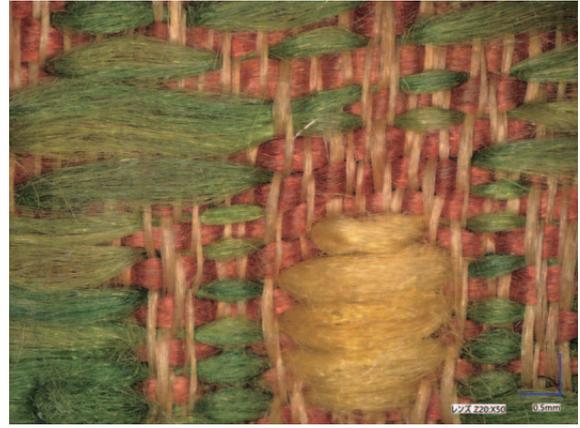
褪色の状態からみて、包裂の底部にあたるとみられる。現状は、幅41.3cm、41.0cmの2枚を接ぎ合わせ、縫い代を1cm程とり、織耳同士を繋げている。献納時の箱蓋裏には「能曾姫御□／夏御□」との貼紙がある。寺伝では、この包裂の付属品として残る真綿と淡黄平絹が、能曾姫が捧げたと伝わる衾「夏御褥」にあたると考えられている。



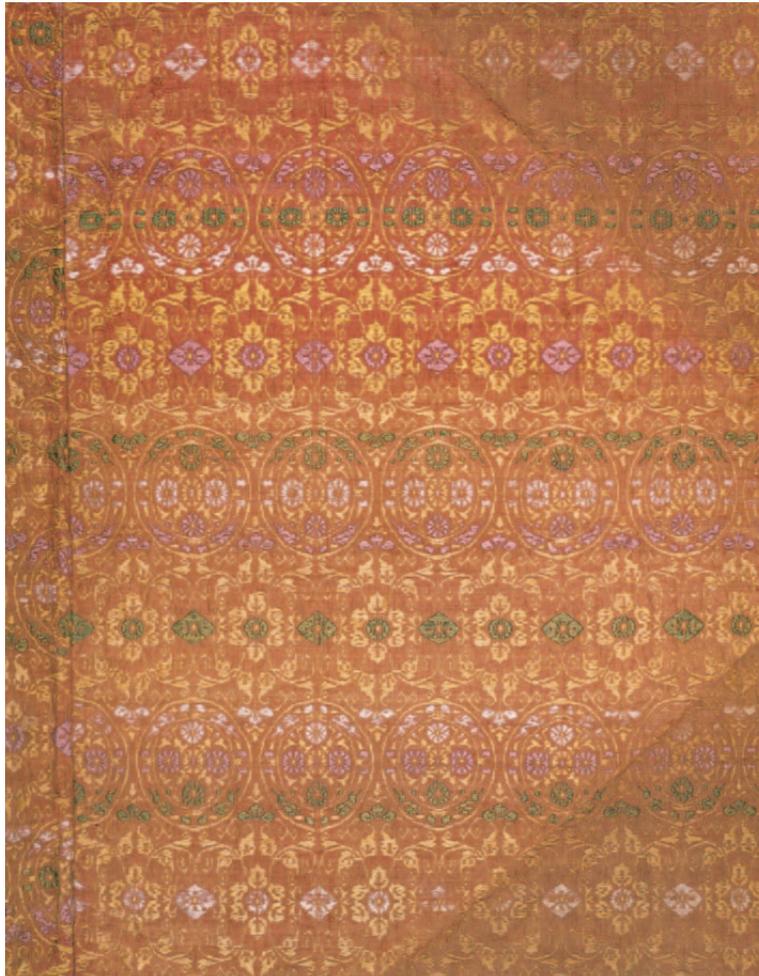
N-44 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×50)



N-44 部分

84 紅地菊桐文錦 N-46-6

1枚

73.8×41.5cm

絹製、平地浮文織

経糸：甘撚、生糸。淡茶（0.08～0.18mm）、2本引き揃え。

緯糸：甘撚、練糸。2色一組（杼2挺）。太さに幅あり。

①紅（0.70mm）、黄（0.81～0.97mm）

②紅（0.74mm）、萌葱（0.59～0.92mm）

③紅（0.61～0.81mm）、白（0.49～0.71mm）

密度：経25本/1cm、緯15組/1cm

文丈：4.5cm。桐文段3.0cm、無地1.1cm、菊文段0.4cm

文様幅・窠間幅：2.8cm

組織備考：織耳あり、淡茶の耳糸（0.45mm）を6本分入れる。織幅不明。

室町時代・14～16世紀

既刊報告 —

紅地に桐文、菊と梅花のような五弁花を重ねた、簡潔で可憐な錦である。このように色数が少なく文様段を重ねるような表現は日本中世の錦の特徴であり、桐文を用いる点からも時代の下る錦とみなされる。

見た目上、経糸の8倍ほどはあろうかと思われる太い紅の地緯糸と、経糸を平地に織る。文様に即して絵緯糸（萌葱・黄）を浮かせる部分では、2本の経糸のうち1本を、浮糸となる絵緯と地緯の間に入れて立ち上げ、浮糸を抑える搦経はない。絵緯が浮く部分は緯糸の打ち込みが甘く、絵緯は裏では経糸と絡まずに浮いている。桐文の段は緯糸16越、色替して22越、菊花の段は16越、間の絵緯を入れない部分は8越分となり、この3段を繰り返している。

現状は矩形で、両端に縫合痕が残る。褪色の仕方からみて、長方形のものを包んでいた包装の断片と考えられる。



N-46-6



N-46-6 部分拡大



顕微鏡画像 (×20)



顕微鏡画像 (×20) 織耳部分

85 紅地花唐草文錦 N-53

一括

長 69.2cm、幅 3.0cm

絹製、緯六枚綾地緯六枚綾文錦

経糸：甘撚、生糸。淡茶（0.08mm）、1本

緯糸：甘撚、練糸。3色一組（杼3挺）。太さに幅あり。

①紅（0.37mm）、白（0.32mm）、緑（0.36mm）

②紅（0.38mm）、黄（0.33~0.41mm）、緑（0.33~0.48mm）

密度：経 50 本/1cm、緯 30 組/1cm

文丈：13cm

文様幅・窠間幅：不明

組織備考：織耳なし。織幅不明。

室町時代・14世紀

既刊報告 —

本作例の花唐草文は輪郭線のない没骨的な描法で、葉の表現は類型化しつつもお伸びやかさを保つ。一本の経糸で、地・文様ともに緯六枚綾を織り出した一重の織物である。見た目上、経糸の4倍ほどの太さの緯糸と、細い経糸とを右流れの緯六枚綾（表出した糸が経糸5本飛んで沈む）に織り、裏面も緯六枚綾に押さえている。文様の輪郭線に入る経糸の数（把釣）は4本。

先行の報告では鎌倉時代の裂とされてきたが、鎌倉時代の主流であった緯錦の組織と比べると、経糸の機能がより簡略化されている。中世日本の錦が段階的に簡潔な糸遣いの錦に変遷していくことを考えれば、さらに時代が下ると考えられる。

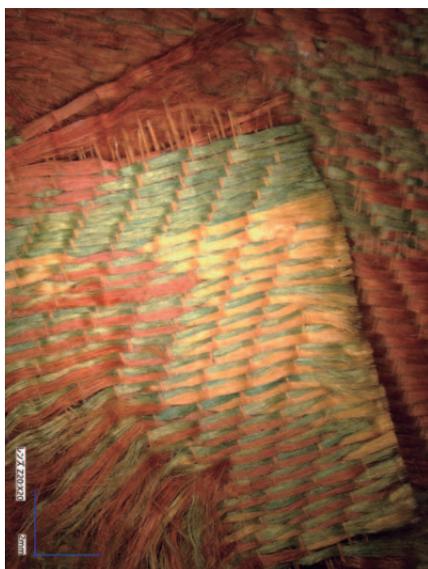
「竜鬚筵」(N-53)の切断後の補修裂として、縁にまわされた錦である。



N-53 竜鬚筵



N-53 部分拡大



顕微鏡画像 (×20) 裏面



顕微鏡画像 (×30) 表面

86 紅地髷木瓜桐文錦 N-53

一括

長 67.5cm、幅 3.0cm

絹製、平地浮文織

経糸：甘撚、生糸。淡茶（0.09～0.13mm）、2本引き揃え

緯糸：甘撚、練糸。2色一組（杼2挺）。太さに幅あり。

①紅（0.59～0.82mm）、浅葱（0.45～0.76mm）

②紅（0.59～0.82mm）、白（0.83mm）

密度：経 25 本／1cm、緯 15 組／1cm

文丈：9.2cm。髷文段 1.3cm、木瓜窠文・桐文段 3cm、無地段 0.3cm

文様幅・窠間幅：不明（対称軸推定 2.1cm）

組織備考：織耳なし。箴目あり。織幅不明。

室町時代・14～16世紀

既刊報告 —

浮いた糸の摩耗が激しく文様はやや不鮮明であるが、髷文の段と、桐文と木瓜窠文を並べた段を経糸方向に繰り返している。2段目の木瓜窠文・桐文段は、髷文段を挟んで桐と木瓜窠文が互の目に見えるように配列している。このように極端に色数が少なく文様帯を段のように重ねる点は、日本中世の錦の特徴であり、桐文を用いる点からも時代の下る錦とみなされる。

地は太くやわらかい緯糸（紅）と、2本引き揃えた細い生糸の経糸で平地に織る。文様部分では、絵緯糸（浅葱・白）を、経糸2本のうち1本を用いて適宜浮かせ、文様を織り出している。絵緯は緯糸1段毎（全越）に入り、撚経はない。緯糸②の桐文と木瓜窠文の段は緯糸36越、緯糸①髷の段は16越となる。

「竜鬚筵」(N-53)の切断後の補修裂として、縁にまわされた錦である。



N-53 部分拡大



顕微鏡画像（×20）

87 浅葱地髷桐文錦 N-53

1片

12×7cm

絹製、平地浮文織

経糸：甘藷、生糸。淡茶（0.11mm）、2本引き揃え

緯糸：甘藷、練糸。2色一組（杼2挺）。

①水浅葱（淡い緑味の青。0.52mm）、淡黄（0.46mm）

②水浅葱（0.52mm）、紅（0.45mm）

密度：経 25 本/1cm、緯 20 組/1cm

文丈：5.3cm、髷文段 1.3cm、桐文段 不明

文様幅・窠間幅：対称軸 1.3cm 程度

組織備考：織耳なし。箄目あり。織幅不明。

室町時代・14～16世紀

既刊報告 —

表面に浮いた糸の摩耗が激しく文様は不鮮明であるが、髷文と、桐文かと思われる植物文を段状に並べていると思われる。太くやわらかい緯糸と、2本引き揃えた細い生糸の経糸で平地に織り、地とは別色の緯糸を適宜浮かせることで文様を織り出しており、紅地髷木瓜桐文錦と同組織の錦である。絵緯は緯糸1段毎（全越）に入り、搦経はない。緯糸②を用いる桐文の段は糸の抜けが激しく確認できないが、緯糸①髷の段は緯16越となる。「竜鬢筵」（N-53）の補修裂として、中央部の穴の開いた部分に付された錦である。



N-53 部分拡大



顕微鏡画像（×20）

東京国立博物館所蔵法隆寺伝来錦類一覽

	名称	列品番号	組織・技法	法隆寺昭和資料帳 掲載類型	正倉院所蔵法隆寺伝来裂	推定年代	図版編 掲載順
類 錦	茶地雑色経縮裂	I-336-86	平組織		紀要1 裂帳〔85-16-1、243-c(6)①〕、 玻璃〔158①、511-a①〕	飛鳥時代・7世紀	1
	雑色柰糸平織	I-336-56	平組織			飛鳥時代・7世紀	2
	雑色柰糸平織	I-331-B-27	平組織			飛鳥時代・7世紀	3
	雑色段織裂	N-319-18/ I-336-88/ I-331-B-38	平組織		紀要2 南倉179古屏〔60-2-②-2、60-8〕、 中倉202〔玻璃114-1②(83櫃)、 玻璃62-b③(83・85櫃)〕、 玻璃〔63-a①、64-k、65-1①、65-1②、 65-1③、65-1④、66①、107②、 114-1①、158④、514-a②〕、 南倉165幡幡紋具26	飛鳥時代・7世紀	4
	雑色段織裂	I-336-87/ I-331-B-11	平組織		紀要2 南倉179古屏〔60-2-②-2〕、中倉202 〔玻璃114-1②(83櫃)、 玻璃〔63-a①、65-1②③④〕、 114-1①、158④、514-a②〕	飛鳥時代・7世紀	5
	雑色段織裂	N-318-4	平組織			飛鳥時代・7世紀	6
	雑色段織裂	I-331-B-13	平組織			飛鳥時代・7世紀	7
	赤地堯文交織裂	N-45付属/ N-318-16/ I-336-79/ I-331-B-63	平組織	至宝12〔238〕	紀要10 南倉148古屏61-6-①、 玻璃〔493-b⑨、509-b⑥〕	飛鳥時代・7世紀	8
	白地山菱文錦	N-42	平地浮文錦		紀要3 裂帳13-13-11	飛鳥時代・7世紀	9
	赤地山菱文錦	N-26-1・2/ N-46-3-1~4/ N-318-5/ I-331-B-37	平地浮文錦		紀要4 南倉179古屏55-4-b、 裂帳〔13-9-12、85-16-9・10〕	飛鳥時代・7世紀	10
	淡茶地入子菱繫文錦	I-336-81/ I-331-B-61・64	複様緯四枚綾地菱文組織		裂帳〔10-19-3、90-11-6〕	飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	11
	淡茶地入子菱繫文錦	I-331-B-68	複様緯四枚綾地菱文組織			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	12
	小堯文風通	N-45付属/ N-318-52/ I-336-80	二重織 (平地平文風通)		紀要12 裂帳〔90-f(17)①、260-b(7)①〕	飛鳥時代・7世紀	13
	緑地目結禪文風通	I-336-78	二重織(平地変わり平 文風通)		紀要14	飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	14
	縹綯縹地花文錦	I-336-44	経三枚綾地緯浮文織			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	15
経 錦・ 緯 錦	縹地連珠櫻花文錦	N-45-2/ I-336-54・55	複様平組織経錦			飛鳥時代・ 6～7世紀	17
	赤地格子連珠花文錦 (小幡)	N-26-1・2	複様平組織経錦		玻璃155-f	飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	22
	赤地格子連珠花文錦 (帯)	N-47・47付属/ N-318-2・3/ I-331-B-20・30	複様平組織経錦	至宝12〔243〕/ 至宝14〔1〕	紀要13 古屏55-3-4、5、 裂帳〔7-1-1・2、8-8-4、8-19-7、 8-j、83-13-1、116-a①、182-e〕	飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	23
	赤地格子連珠花文錦 (大幡)	N-318-2/ I-331-B-25・28	複様平組織経錦	至宝12〔247、 249〕/ 至宝14〔1〕	裂帳〔8-8-5、8-d②、13-15-8〕、 玻璃〔76-b、155-d・e〕	飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	24
	赤地格子連珠花文錦 (分類不明)	I-336-53	複様平組織経錦	至宝12 〔241、242、246、 253、487、488〕	中倉202玻璃155-c(84櫃)、 玻璃511-a⑤	飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	25
	赤地花入連珠円文錦	I-331-B-62	複様平組織経錦			飛鳥時代・7世紀	31
	赤地花鳥入連珠円文錦	I-336-65・66	複様平組織経錦			飛鳥時代・7世紀	32
紅地鳥獸連珠円文錦	I-336-57	複様平組織経錦		紀要37 南倉179古屏60-1-①、 古屏〔49-3、60-1-②・③〕、 裂帳4-4-7、 南倉185幡類残欠雑43〔128櫃〕	飛鳥時代・7世紀	37	

	名称	列品番号	組織・技法	法隆寺昭和資材帳 掲載類型	正倉院所藏法隆寺伝来裂	推定年代	図版編 掲載順
経 緯 錦	赤地双鳳獅子唐草連珠 円文錦	N-26-1・2/N-56	複様平組織経錦	至宝 12〔247〕		飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	38
	茶地双鳳連珠円文錦	I-336-58	複様平組織経錦		紀要 31 裂帳 13-11-11	飛鳥時代・7世紀 後半	40
	長斑双鳳連珠円文錦	N-318-6/ I-331-B-41	複様平組織経錦		紀要 30 裂帳〔12-18-15、13-12-6、83-18-1、 243-e (14)〕、 玻璃 182-f	飛鳥時代・7世紀 前半	41
	赤地禽獸花葉亀甲繫文 錦	N-43・43 付属 / I-336-51	複様平組織経錦	至宝 12〔241、 244、245、480〕	紀要 22	飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	48
	紫地双鳥文入波唐草文 錦	N-315/ I-331-B-48・75	複様平組織経錦			飛鳥時代・ 6世紀後半～7世 紀前半	49
	紅地渦連珠輪違文入双 獅子文錦	N-317/N-318-10/ I-331-B-42	複様平組織緯錦			飛鳥時代・ 6～7世紀	34
	淡茶地渦連珠輪違文錦	I-336-74	複様平組織緯錦		紀要 38 裂帳〔9-7-8、79-1-2、83-15-4〕	飛鳥時代・ 6～7世紀	35
	双鳥円文木綿裂	N-323/I-331-B-88	複様平組織緯錦(木綿)			飛鳥時代・7世紀	36
	淡緑地輪繫文錦	N-45 付属 / N-313-1・2/ I-336-68/ I-331-B-73	複様綾組織経錦		紀要 27 南倉 179 古屏〔59-4、60-2-①〕、 新屏 140-19-b、 裂帳〔6-13-10、12-2-5・6、12-14-1、 12-18-13・14、13-5-1・2、13-6-6、 18-c、79-2-11、79-19-1、82-4-4、 83-1-2、83-2-2、83-5-1・6、83-14-5、 83-18-3、85-17-1、90-2-2、90-②〕、 110-9-1、142-8-8、145-12-1〕	飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	16
	茶紫地小花目結襷文錦	I-336-59/ I-331-B-17	複様綾組織経錦		紀要 16 中倉 202 新屏〔33-a、34-d〕(85 櫃)、 新屏 140	飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	18
	紫地亀甲繫花葉文錦	N-305/I-336-60	複様綾組織経錦		南倉 179 古屏 60-4、 裂帳〔13-7-4・5、13-12-13・14・15、 109-7-6〕	飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	19
	緑地蓮華入連珠亀甲繫 文錦	I-331-B-86	複様綾組織経錦			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	20
	雑色変り堯花文錦	I-336-61/ I-331-B-10	複様綾組織経錦			飛鳥時代・ 7世紀後半	21
	赤地花入連珠円文錦	N-45 付属 / I-336-64	複様綾組織経錦		紀要 34 南倉 179 古屏 60-2-8、玻璃 155-a	飛鳥時代・ 7世紀後半	26
	標地花入連珠円文錦	N-318-5	複様綾組織経錦			飛鳥時代・ 7世紀後半	27
	赤地花入連珠円文錦	I-331-B-36	複様綾組織経錦	至宝 12〔241〕	裂帳〔9-9-10、12-18-11、110-14-4〕	飛鳥時代・ 7世紀後半	28
	赤地花入連珠円文錦	I-336-52	複様綾組織経錦			飛鳥時代・ 7世紀後半	29
	赤地花入連珠円文錦	I-331-B-26	複様綾組織経錦			飛鳥時代・ 7世紀後半	30
	赤地双獅子連珠円文錦	N-318-4	複様綾組織経錦		紀要 33 古屏 60-2-10、 中倉 202 玻璃 155-b (84 櫃)、 南倉 165 輪軸鉸具 26、 正 9 南倉 III〔125、126〕	飛鳥時代・ 7世紀後半	33
	淡紅地雲山錦	I-336-62	複様綾組織経錦		紀要 6	飛鳥時代・7世紀	44
	紫地獅嚙鳳凰文錦	N-46-1-1・2/ I-331-B-40	複様綾組織経錦		紀要 9 中倉 202 玻璃 221	飛鳥時代・7世紀	45
	紫地獅嚙白象文錦	N-46-2-1・2	複様綾組織経錦		紀要 7 裂帳 90-4-4	飛鳥時代・7世紀	46
	紫地天人文錦	N-46-2 付属	複様綾組織経錦		紀要 8 中倉 202 玻璃 221-1 ①	飛鳥時代・7世紀	47
	白地花波唐草文錦	I-336-63	複様綾組織経錦			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	50
	緑地花葉文錦	I-336-77	複様綾組織経錦			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	51

	名称	列品番号	組織・技法	法隆寺昭和資材帳 掲載類型	正倉院所蔵法隆寺伝来裂	推定年代	図版編 掲載順
経緯・緯錦	緑地六弁花文錦	I-331-B-77	複様綾組織経錦			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	52
	緑地四葉文錦	I-331-B-65	複様綾組織経錦			飛鳥～奈良時代・ 7～8世紀	53
	青緑地六弁花鳥文錦	N-306/I-336-67	複様綾組織経錦		紀要 91 古屏 [2-1、2-1-②、34-2、 48-1-①②③④⑤⑥、49-5、50-5、 55-3-②、61-4-①②③④]、 中倉 202 新屏 33-b (85 櫃)、 新屏 [29 ①②、31-a・b)、35-a、 35-b ①②、199 ①②③、208]、 9-2-27、9-7-11、10-1-1、10-5-6、 10-6-1・4、10-12-2、10-16-3・7、 10-19-2、11-5-2、11-15-7、11-20-7、 12-19-7、13-9-16、13-18-12、 18-2-12、19-7-8、20-1-3、23-8-7、 78-1-5、78-6-9-15、79-4-8、82-20-3、 85-14-5、90-8-6、90-a(8)②、 108-10-1、108-20-6、254-b(13)、 260-a(1)、260-c)、 玻璃 [274、275 ①②、410]、 裂帳 [4-5-7-11、4-12-14、4-15-2、 4-19-5、6-12-8、7-1-5、7-5-1-2、 7-6-1-2・3・4・5、7-7-2、7-10-3、 7-11-1-2・3、7-12-1-2・3・4、7-13-6、 7-14-9、7-15-3・5・6、7-16-4、 7-19-6、7-20-1、8-1-3、8-2-1-2、 8-3-2、8-5-2、8-12-1、8-13-5・6、 8-15-7・8、8-16-2・3・4・5・6・7、 8-18-4・5・6・7、8-a ①②、8-b ②、 8-c、8-e、8-f ①、8-g ①、8-h ①②③、 8-i、8-k-c	奈良時代・8世紀	54
	白茶地双鳳連珠円文錦	I-336-69	複様綾組織緯錦 (a)		紀要 32 古屏 49-5-8、 裂帳 [8-11-5・6、13-7-9、90-e ①]、 玻璃 [66 ②、170-b]	飛鳥時代・ 7世紀後半	39
	黄地唐花文錦	I-336-72	複様綾組織緯錦 (a)			奈良時代・8世紀	58
	白茶地蓮唐花文錦	N-46-4/N-319- 168/I-336-73/ I-331-B-72・43	複様綾組織緯錦 (a)	至宝 14 [18、19]		奈良時代・8世紀	59
	緑地唐花文錦	N-318-12/ I-336-70/ I-331-B-76・78	複様綾組織緯錦 (b)			奈良時代・8世紀	60
	紫地唐花文錦	N-45-1-1・2	複様綾組織緯錦 (b)			奈良時代・8世紀	61
	黄緑地唐花文錦	I-336-75	複様綾組織緯錦 (b)			奈良時代・8世紀	62
	赤地唐花文錦	I-331-B-35・39	複様綾組織緯錦 (b)			奈良時代・8世紀	63
	緑地狩獵連珠円文錦	N-40	複様綾組織緯錦 (c)			奈良時代・8世紀	42
	黄地葡萄唐草円文錦	N-38/N-39	複様綾組織緯錦 (d)		中倉 202 古屏 50-6-2 (108 櫃)、 古屏 [50-1、50-6-1]、 新屏 [8-④-b、8-b]	奈良時代・ 8世紀中頃	43
	緑地花鳥蝶文錦	N-41	複様綾組織緯錦 (d)			奈良時代・8世紀	55
	紫地唐花鳥獸文錦	N-318-11	複様綾組織緯錦 (d)			奈良時代・8世紀	56
	紫地唐花文錦	N-318-11/ N-319-168/ I-331-B-83	複様綾組織緯錦 (e)	至宝 14 [17、18、19]	古屏 60-4-①、 裂帳 [6-6-3・4、7-13-5、8-11-2、 8-13-1・2、12-18-7、85-17-5、 90-8-7、90-12-4、90-13-1、 90-a (8) ①、90-c (12) ②、 106-9-6、144-18-4、145-13-4]	奈良時代・8世紀	57
	紅地唐花文錦	N-37	複様綾組織緯錦 (f)			奈良時代・8世紀	64
	青地唐花文錦	N-37	複様綾組織緯錦 (f)			奈良時代・8世紀	65
	淡緑地唐花文錦	N-37	複様綾組織緯錦 (f)			奈良時代・8世紀	66
	青緑地唐花文錦	I-336-71・76	複様綾組織緯錦 (g)			奈良時代・8世紀	67
	経緋	赤地火焰宝珠入雲氣繁文経緋	N-25	経緋 (平組織)			飛鳥時代・7世紀
赤地獅嚙火焰宝珠入雲氣繁文経緋		N-24、24 付属 / N-28-2/N-318-13/ I-336-90/ I-331-B-55・60・ 67	経緋 (平組織)	至宝 12 [262]	古屏 61-6-②-1、 裂帳 [84-13-11、243-a-b ①]、 玻璃 [157、493-b ②、511-a ⑥]	飛鳥時代・7世紀	69
紫地植物文入雲氣文経緋		N-27-2 I-331-B-46・51・ 52・56・57・59	経緋 (平組織)		玻璃 [116、117、116-a ②]	飛鳥時代・7世紀	70

	名称	列品番号	組織・技法	法隆寺昭和資材帳 掲載類型	正倉院所蔵法隆寺伝来裂	推定年代	図版編 掲載順
経 緋	赤紫地花入雲気縹文経緋	I-336-91-2	経緋（平組織）			飛鳥時代・7世紀	71
	紫地花縹文経緋	N-46-5-1・2/ N-318-14	経緋（平組織）		裂帳〔105-17-4、105-17-5〕	飛鳥時代・7世紀	72
	赤地花縹文経緋	N-315・315 付属/ I-331-B45	経緋（平組織）		玻璃〔168-b、185-b〕	飛鳥時代・7世紀	73
	赤地花縹文経緋	I-336-89	経緋（平組織）			飛鳥時代・7世紀	74
	紫地宝珠文経緋	N-27-1/N-45 付属	経緋（平組織）			飛鳥時代・7世紀	75
	赤紫地雲気文経緋	N-304-1	経緋（平組織）			飛鳥時代・7世紀	76
	赤地四葉文経緋	N-45 付属/ N-318-13/ I-331-B-54・58	経緋（平組織）		玻璃 186	飛鳥時代・7世紀	77
	紫地四弁花雲気文経緋	I-336-91-1	経緋（平組織）			飛鳥時代・7世紀	78
	赤地雲気文経緋	I-331-B-53	経緋（平組織）		玻璃〔116-b ①②〕	飛鳥時代・7世紀	79
綴 織	金地龍蓮華文綴織	N-32-付属3/ I-336-83/ I-331-B-21	綴織		紀要 145	飛鳥時代・7世紀	80
	葱花山形文綴織	N-312/I-336-82/ I-331-B-8・9・12	綴織	至宝 12〔238〕		飛鳥時代・7世紀	81
	大型連珠円文綴織	I-336-84・85	綴織	至宝 12〔238〕		飛鳥時代・7世紀	82
中 世 の 錦	紅地菊花入唐草円文錦	N-44	経三枚綾地絵緯浮文織			鎌倉時代・ 13～14世紀	83
	紅地菊桐文錦	N-46-6	平地浮文織			室町時代・ 14～16世紀	84
	紅地髹木瓜桐文錦	N-53	平地浮文織			室町時代・ 14～16世紀	86
	浅葱地髹桐文錦	N-53	平地浮文織			室町時代・ 14～16世紀	87
	紅地花唐草文錦	N-53	緯六枚綾地緯六枚綾文 錦			室町時代・ 14世紀	85

凡例：

- ・本表は、当館の所蔵品として整理登録が成されている法隆寺伝来錦類の一覧である。
- ・図版掲載順：本表の掲載順は技法順とする。図版編の掲載順と前後する場合がありますため、図版との対照には本欄を参考されたい。
- ・法隆寺昭和資材帳掲載類型：以下の文献を基に、昭和資材帳調査にて報告された法隆寺に残る類似の錦類との対照を記す。
（例：『法隆寺の至宝 12』掲載、238 番→「至宝 12〔238〕」
- なお、下線は、当館所蔵断片とは別裂の可能性の高い類似文様の錦を指す。
法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 12 莊嚴具・堂内具・供養具：莊嚴具・堂内具・供養具』、小学館、1993 年
法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 14 法会儀式具・収納具・生活具・染織品：法会儀式具・収納具・生活具・染織品』、小学館、1998 年
- ・正倉院所蔵法隆寺伝来裂：類裂、及び献納宝物の移送に伴う混乱により、東大寺正倉院宝物に明治期に混入した可能性の高い裂の一覧を記す。
以下論文掲載目録をもとに三田、廣谷が加筆修正を加えた。
沢田むつ代「正倉院所在の法隆寺献納宝物染織品——錦と綾を中心に——」『正倉院紀要』36号、宮内庁正倉院事務所、2014 年
紀要：『書陵部紀要』第 13 号（昭和 37 年 3 月刊行）所載、太田英藏：正倉院の錦 概説、佐々木信三郎：正倉院の錦 組織、西村兵部：正倉院の錦 各説の図版番号。
裂帳：帖装整理の古裂、古屏：古屏風装整理の古裂、新屏：新屏風装添付の古裂、玻璃：玻璃装整理の古裂

既刊報告等一覧

木内武男・沢田むつ代

法隆寺献納宝物広東大幡について、『MUSEUM』302号、1976年5月

法隆寺の仏幡について、『MUSEUM』348号、1980年3月

奥村秀雄

東京国立博物館保管上代裂について（上）、『MUSEUM』389号、1983年8月

東京国立博物館保管上代裂について（下）、『MUSEUM』390号、1983年9月

長崎巖

東京国立博物館所蔵上代錦の文様、『MUSEUM』399号、1984年6月

沢田むつ代

法隆寺献納宝物染織幡三流と幡足一条——重要資料緊急修理（昭和61年度）を終えて——、『MUSEUM』442号、1988年1月

蜀江大幡（奈良・法隆寺蔵）、『MUSEUM』544号、1996年10月

法隆寺献納宝物 幡と幡足、平絹・錦残欠——平成9年度の修理を終えて——、『MUSEUM』558号、1999年2月

法隆寺献納宝物 刺繍・錦・綴織などの残欠——平成11年度の修理を終えて——、『MUSEUM』574号、2001年10月

法隆寺献納宝物 葡萄唐草文錦褥——平成12年度の修理を終えて——、『MUSEUM』582号、2003年2月

法隆寺献納宝物 蜀江錦褥残欠と褥裏裂——平成13・14年度の修理を終えて——、『MUSEUM』588号、2004年2月

《報告》法隆寺伝来上代裂 纈纈・綾・錦等の幡足および天蓋垂飾他——平成23年度修理の成果一、『MUSEUM』658号、2015年10月

《報告》法隆寺伝来上代裂 纈纈・綾・錦・組紐・刺繍・氈等の残欠——平成24年度修理の成果、『MUSEUM』662号、2016年6月

法隆寺献納宝物の広東裂——その分類および絵画・彫刻等からみた文様の伝播について——、『MUSEUM』667号、2017年4月

《報告》法隆寺伝来上代裂 天蓋垂飾・錦・綴織・刺繍等の残欠——平成25年度修理の成果、『MUSEUM』670号、2017年10月

沢田むつ代・三田覚之

《報告》法隆寺伝来・上代裂 綾幡足と錦残欠等——平成22年度修理の成果——、『MUSEUM』655号、2015年4月

平成26年度-平成29年度科学研究助成事業・基盤研究（C）「古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究」報告書、『東京国立博物館所蔵 法隆寺伝来——飛鳥・奈良時代の染織品——（研究代表者・沢田むつ代）、2018年

三田覚之

《研究ノート》法隆寺伝来「古裂」の本格修理に伴う配置復元について、『MUSEUM』662号、2016年6月

法隆寺献納宝物特別調査概報および研究図録等一覧

昭和54年度	法隆寺献納宝物特別調査概報1	伎楽面	平成24年度	法隆寺献納宝物特別調査概報33	
昭和55年度	法隆寺献納宝物特別調査概報2	鏡鑑		聖徳太子絵伝(四幅本)1	
昭和56年度	法隆寺献納宝物特別調査概報3	漆皮箱	平成25年度	法隆寺献納宝物特別調査概報34	
昭和57年度	法隆寺献納宝物特別調査概報4	押出仏		聖徳太子絵伝(四幅本)2	
昭和58・59年度	法隆寺献納宝物特別調査概報5		平成26年度	法隆寺献納宝物特別調査概報35	
	金銅仏1			古今目録抄1	
昭和60年度	法隆寺献納宝物特別調査概報6	金銅仏2	平成27年度	法隆寺献納宝物特別調査概報36	
昭和61年度	法隆寺献納宝物特別調査概報7	金銅仏3		古今目録抄2	
昭和62年度	法隆寺献納宝物特別調査概報8	金銅仏4	平成28年度	法隆寺献納宝物特別調査概報37	
昭和63年度	法隆寺献納宝物特別調査概報9	金銅仏5		古今目録抄3	
平成元年度	法隆寺献納宝物特別調査概報10	金銅仏6	平成29年度	法隆寺献納宝物特別調査概報38	
平成2年度	法隆寺献納宝物特別調査概報11	灌頂幡		古今目録抄4	
平成3年度	法隆寺献納宝物特別調査概報12	金銅小幡	平成30年度	法隆寺献納宝物特別調査概報39	
平成4年度	法隆寺献納宝物特別調査概報13	水瓶		文王呂尚・商山四皓図屏風1	
平成5年度	法隆寺献納宝物特別調査概報14	楽器	平成31(令和元)年度	法隆寺献納宝物特別調査概報40	
平成6年度	法隆寺献納宝物特別調査概報15	木漆工1		文王呂尚・商山四皓図屏風2	
平成7年度	法隆寺献納宝物特別調査概報16	木漆工2	令和2年度	法隆寺献納宝物特別調査概報41	
平成8年度	法隆寺献納宝物特別調査概報17	木漆工3		染織1 刺繍	
平成9年度	法隆寺献納宝物特別調査概報18		令和3年度	法隆寺献納宝物特別調査概報42	竜首水瓶
	仏画写経貼交屏風1(仏画)		令和5年度	法隆寺献納宝物特別調査概報43	
平成10年度	法隆寺献納宝物特別調査概報19			伎楽面X線断層(CT)調査	
	仏画写経貼交屏風2(写経)		令和6年度	法隆寺献納宝物特別調査概報44	
平成11年度	法隆寺献納宝物特別調査概報20			染織2 錦	
	書跡1(経典)				
平成12年度	法隆寺献納宝物特別調査概報21		研究図録等		
	書跡2(古記録・古文書)		『法隆寺献納宝物 伎楽面』1984年		
平成13年度	法隆寺献納宝物特別調査概報22	計量器	『法隆寺献納宝物 染織I一幡・褥一』1986年		
平成14年度	法隆寺献納宝物特別調査概報23		『法隆寺献納宝物 金銅仏I』1996年		
	武器・武具・馬具		『法隆寺献納宝物銘文集』1999年		
平成15年度	法隆寺献納宝物特別調査概報24	供養具1			
平成16年度	法隆寺献納宝物特別調査概報25	供養具2			
平成17年度	法隆寺献納宝物特別調査概報26				
	聖徳太子絵伝下貼文書1				
平成18年度	法隆寺献納宝物特別調査概報27				
	聖徳太子絵伝下貼文書2				
平成19年度	法隆寺献納宝物特別調査概報28				
	聖徳太子絵伝1				
平成20年度	法隆寺献納宝物特別調査概報29				
	聖徳太子絵伝2				
平成21年度	法隆寺献納宝物特別調査概報30				
	聖徳太子絵伝3				
平成22年度	法隆寺献納宝物特別調査概報31				
	聖徳太子絵伝4				
平成23年度	法隆寺献納宝物特別調査概報32				
	聖徳太子絵伝5				

令和7年3月28日発行
法隆寺献納宝物特別調査概報 44
染織 2 錦

編集・発行 東京国立博物館
〒110-8712
東京都台東区上野公園 13-9
電話 03-3822-1111 (代表)
印 刷 株式会社 アイワード

ISBN 978-4-907515-80-5
©2025 Tokyo National Museum